

笠松遺跡 堀廻遺跡 天良七堂遺跡

(主) 太田大間々線バイパス地方特定道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

群馬県太田土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

笠松遺跡・堀廻遺跡・天良七堂遺跡

(主) 太田大間々線バイパス地方特定道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一三

群馬県太田土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

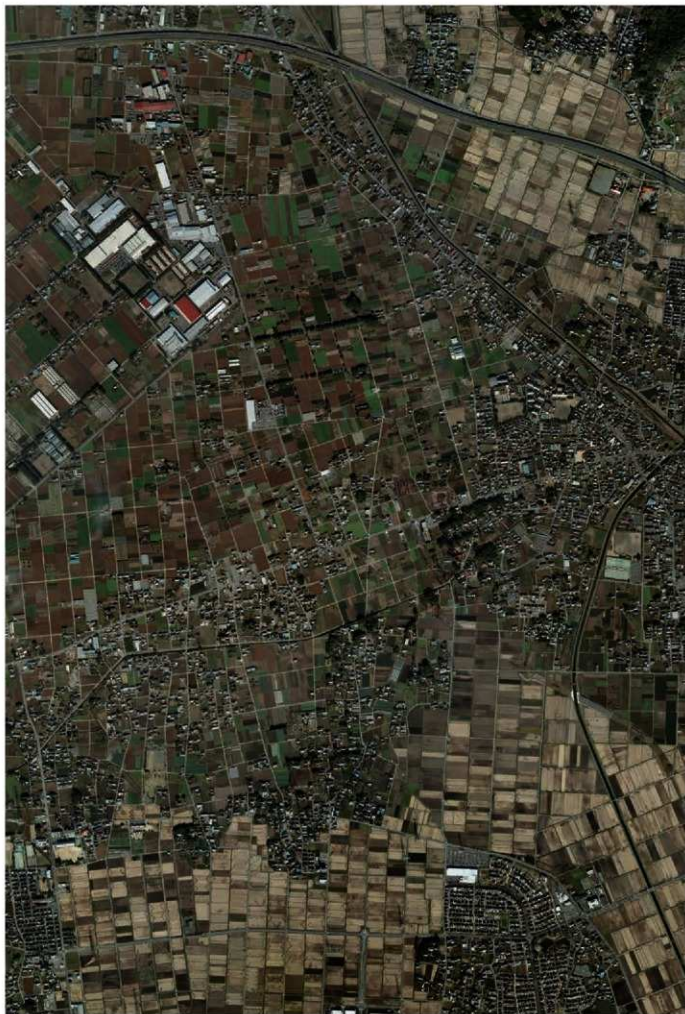


笠 松 遺 跡
堀 廻 遺 跡
天 良 七 堂 遺 跡

(主) 太田大間々線バイパス地方特定道路整備事業に伴う
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2013

群 馬 県 太 田 土 木 事 務 所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



遺跡周辺の航空写真

(中央に笠松遺跡・堀廻遺跡。その右側が史跡上野国新田郡庁跡。郡庁跡の調査区の写真は太田市教育委員会提供。)

序

主要地方道太田大間々線バイパスは、市街地及び周辺地域における交通渋滞の緩和を目的に計画され、太田市から桐生市大間々町を結ぶバイパス道路として建設工事が進められております。

本書で報告いたします笠松遺跡・堀廻遺跡・天良七堂遺跡は、主要地方道足利伊勢崎線の北に位置し、平成22年度・24年度に当事業団が発掘調査を実施いたしました。足利伊勢崎線の南では、新田郡衙に関わると考えられる施設が調査され、その成果は『笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡』として平成23年度に刊行いたしました。今回報告する遺跡はその北側に当たり、発掘調査の結果、予想通りの重要な遺構が数多く発見されました。特に溝に囲まれた掘立柱建物群と、すぐ北側を東西に通過する推定東山道駅路とは、新田郡衙の全体像解明に欠かせない資料であり、今後の研究に資するものと思われまます。

最後になりましたが、群馬県太田土木事務所、群馬県教育委員会、太田市教育委員会、太田市史跡上野国新田郡庁跡調査・整備専門委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行に至るまで多大なご指導・ご協力を賜りました。本書の刊行に際し、心から感謝申し上げますと共に、本書が歴史研究の資料として広く活用されることを願い、序といたします。

平成25年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 須田 榮 一

例言

- 1 本書は、(主)太田大間々線バイパス地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査による、笠松遺跡・堀廻遺跡・天良七堂遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。(主)太田大間々線関連の発掘調査においては、笠松遺跡は1～5区、天良七堂遺跡は1～5区に分かれるが、そのうち笠松遺跡1・2区、天良七堂遺跡1～4区については、平成24年に刊行した『笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡』で報告済である。
- 2 所在地 太田市新田小金井町1503-1,1575-3,1642-1,1643-1,1643-2,1687-1,1688-1,1688-2,1688-3,1693-3,1697-2,1698-1,1698-2,1698-3,1699-1,1700-1,1701-1,1701-2,1702,1703,1707,1708,1709-1,1711-1,1712-1,1718-1,1719-1,1719-7,1720-1,1720-2,1721-1,1721-2,1722-1,1722-2,1754,1755-1,1757-1,1758,1759-1,1759-2,1759-3
- 3 事業主体 群馬県東部県民局太田土木事務所
- 4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間・面積 平成22年度 平成22年4月1日～平成22年6月30日 7,035㎡
平成24年度 平成24年4月1日～平成24年7月31日 4,471㎡
- 6 発掘調査体制は次の通りである。
平成22年度
発掘調査担当 上席専門員 井川達雄 調査研究員 長谷川博幸
遺跡掘削請負工事 須賀工業株式会社
委託 地上測量・空中写真撮影 株式会社シン技術コンサル
平成24年度
発掘調査担当 上席専門員 麻生敏隆 専門調査役 飯島義雄
遺跡掘削請負工事 株式会社シン技術コンサル
委託 地上測量 株式会社シン技術コンサル
空中写真撮影 技研測量設計株式会社
自然科学分析 株式会社火山考古学研究所
- 7 整理事業の期間と体制は次の通りである。
履行期間 平成24年4月1日～平成25年3月31日
整理期間 平成24年8月1日～平成25年1月31日
整理担当 上席専門員 谷藤保彦
遺物写真撮影 補佐(総括) 佐藤元彦 保存処理 補佐(総括) 関 邦一
- 8 本書作成の担当者は次の通りである。
編集 上席専門員 谷藤保彦
執筆 資料統括 松岡正信(遺物観察表:土師器・須恵器) 上席専門員 大西雅広(遺物観察表:中近世陶磁器類)
上席専門員 岩崎泰一(遺物観察表:石器・石製品) 上席専門員 谷藤保彦(遺物観察表:縄文土器・弥生土器)
上席調査研究員 高井佳弘(前記以外)
- 9 出土石器・石製品の石材同定については飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)にお願いした。
- 10 発掘調査諸資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 11 発掘調査および報告書作成に際しては、下記の方々・機関にご協力・ご指導をいただきました。記して感謝いたします。(敬称略・順不同)
群馬県教育委員会、太田市教育委員会、太田市史跡上野国新田郡庁跡調査・整備専門委員会

凡例

- 1 本文中に使用した座標・方位は、総て国家座標(世界測地系)の第Ⅹ系を使用している。なお、座標北と真北との偏差は、笠松遺跡5区と堀廻遺跡3区との間にあたる $X=36,620$ 、 $Y=-45,570$ で東偏 $0^{\circ}18'2.54''$ である。
- 2 遺構断面図に記した数値は標高を表し、単位はmを用いた。
- 3 遺構・遺物実測図の縮尺率は原則として以下のとおりとしたが、最適と思われる縮尺に適宜変更した場合があるので、各図面のスケールを参照していただきたい。

遺構 掘立柱建物・土坑・井戸・ピット 1：40

溝—平面図 1：100か1：40 断面図 1：40

遺物 縄文土器・土師器・須恵器・中世陶磁器・石器(打製石斧など) 1：3

須恵器・中世陶器の大型品、石製品(五輪塔など) 1：4か1：6

銅銭・石鏡 1：1

なお、1：3以外の縮尺の遺物は、遺物番号のあとに縮尺を記入してある。

- 4 本書の図版に使用したスクリーントーンは、次のことを示している。

遺構

焼土



遺物

煤



漆



釉



赤色塗彩



- 5 遺構の主軸方位・走向は、長軸方向で北から東西 90° 以内を主軸方位とした。表記は北を基準とし、東に傾いた場合は $N-\bigcirc^{\circ}-E$ 、西に傾いた場合は $N-\bigcirc^{\circ}-W$ というように表記した。
- 6 遺物観察表の凡例は遺物観察表の前(113ページ)に掲載した。
- 7 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

国土地理院 地形図 1:25,000「桐生」(平成21年4月1日発行)、「上野境」(平成22年12月1日発行)

国土地理院 地形図 1:50,000「深谷」(平成10年9月1日発行)、「桐生及足利」(平成11年6月1日発行)

国土地理院 地勢図 1:200,000「宇都宮」(平成18年4月1日発行)

太田市 1:2,500地形図26 (平成23年測図)

目次

口絵		4	落ち込み	81
序		5	ピット	83
例言		6	旧石器時代の調査	83
凡例		7	遺構外出土の遺物	86
目次				
挿図・表・写真目次				
第1章 調査の経緯・経過・方法	1			
第1節 調査に至る経緯	1			
第2節 調査の方法	2			
第3節 調査の経過	2			
第4節 整理作業の概要と遺構名称の改訂	5			
第2章 遺跡の位置と環境	6			
第1節 地理的環境	6			
第2節 歴史的環境	6			
第3節 基本土層	14			
第3章 笠松遺跡の調査の成果	15			
第1節 成果の概要	15			
第2節 笠松遺跡3区	16			
1 掘立柱建物とピット	16			
2 土坑	22			
3 溝	23			
4 遺構外出土の遺物	25			
第3節 笠松遺跡4区	25			
1 掘立柱建物とピット	25			
2 礎石	36			
3 方形遺構	37			
4 土坑	39			
5 井戸	42			
6 溝	45			
7 旧石器時代の調査	67			
8 遺構外出土の遺物	67			
第4節 笠松遺跡5区	67			
1 土坑	67			
2 井戸	70			
3 溝	70			
4 落ち込み	81			
5 ピット	83			
6 旧石器時代の調査	83			
7 遺構外出土の遺物	86			
第4章 堀廻遺跡の調査の成果	87			
第1節 成果の概要	87			
第2節 堀廻遺跡3区	87			
1 竪穴状遺構	87			
2 土坑	88			
3 溝	90			
4 旧石器時代の調査	93			
5 遺構外出土の遺物	93			
第3節 堀廻遺跡4区	94			
1 土坑	94			
2 旧石器時代の調査	94			
3 遺構外出土の遺物	94			
第4節 堀廻遺跡5区	95			
1 遺構外出土の遺物	95			
第5節 堀廻遺跡6区	96			
1 溝	96			
2 旧石器時代の調査	96			
3 遺構外出土の遺物	96			
第5章 天良七堂遺跡5区の調査の成果	96			
第6章 自然科学分析	101			
第1節 笠松遺跡の火山灰分析	101			
第7章 総括	106			
遺物観察表	113			
写真図版				
報告書抄録				

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1
第2図	調査区位置図	3
第3図	周辺地形分類図	7
第4図	周辺の遺跡	9
第5図	基本土層	14
第6図	笠松道跡3区全体図	16
第7図	笠松道跡3区1・2号掘立柱建物平面図、 1号掘立柱建物断面図	17
第8図	笠松道跡3区2号掘立柱建物断面図	18
第9図	笠松道跡3区3号掘立柱建物平面断面図	19
第10図	笠松道跡3区1・4・10・15・20・21号ピット平面断面図	20
第11図	笠松道跡3区11～13号ピット平面断面図	21
第12図	笠松道跡3区22・24・26・27号ピット平面断面図	22
第13図	笠松道跡3区2・3号土坑平面断面図	23
第14図	笠松道跡3区1・2号溝平面断面図	24
第15図	笠松道跡3区道溝外出土の遺物	25
第16図	笠松道跡3区1号掘立柱建物平面断面図	26
第17図	笠松道跡4区2号掘立柱建物平面断面図	27
第18図	笠松道跡4区2号掘立柱建物断面図	28
第19図	笠松道跡4区3～6号掘立柱建物平面断面図	30
第20図	笠松道跡4区3～6号掘立柱建物断面図	31
第21図	笠松道跡4区3～6号掘立柱建物断面図	32
第22図	笠松道跡4区1～11号ピット平面断面図	34
第23図	笠松道跡4区12～24号ピット平面断面図	35
第24図	笠松道跡4区25～29号ピット平面断面図	36
第25図	笠松道跡4区1・2号礎石平面断面図	37
第26図	笠松道跡4区1号方形道溝平面断面図	38
第27図	笠松道跡4区1・7・8号土坑平面断面図	39
第28図	笠松道跡4区9～15号土坑平面断面図	40
第29図	笠松道跡4区16～18号土坑平面断面図、17号土坑出土遺物	41
第30図	笠松道跡4区1号井戸平面断面図・出土遺物	43
第31図	笠松道跡4区2・3号井戸平面断面図、2号井戸出土遺物	44
第32図	笠松道跡4区1・2・9・10～12・16・20号溝断面図、 2・9号溝出土遺物	46
第33図	笠松道跡4区推定東山道駅路付近平面図(1・2・9～12・ 16・19・20・22～24・32・33号溝)	47
第34図	笠松道跡4区19・22～24・33号溝断面図	49
第35図	笠松道跡4区4号溝平面断面図	51
第36図	笠松道跡4区4号溝出土遺物(1)	53
第37図	笠松道跡4区4号溝出土遺物(2)	54
第38図	笠松道跡4区3・5・13～15号溝平面断面図	55
第39図	笠松道跡4区14・15号溝出土遺物	57
第40図	笠松道跡4区6・17・18号溝平面断面図、6号溝出土遺物	59
第41図	笠松道跡4区25～28・30・31・36号溝平面断面図、 28号溝出土遺物	61
第42図	笠松道跡4区29・32・34・35・41号溝平面断面図	63
第43図	笠松道跡4区37～39号溝平面断面図	65
第44図	笠松道跡4区旧右部調査ピット配置図	66
第45図	笠松道跡4区道溝外出土の遺物	67
第46図	笠松道跡5区2・8・10号土坑平面断面図	68
第47図	笠松道跡5区9・11～15号土坑平面断面図	69
第48図	笠松道跡5区1～3号井戸平面断面図、2号井戸出土遺物	71
第49図	笠松道跡5区1・5号溝北端部、6・7号溝平面断面図	73
第50図	笠松道跡5区5・6号溝断面図	74
第51図	笠松道跡5区1・5号溝中央部、6号溝南端部平面断面図	75
第52図	笠松道跡5区1号溝南部平面断面図	76
第53図	笠松道跡5区1号溝出土遺物	77
第54図	笠松道跡5区4号溝、5号溝南部平面断面図	78
第55図	笠松道跡5区2・3・10号溝平面断面図	79
第56図	笠松道跡5区8・9号溝平面断面図	80
第57図	笠松道跡5区1号落ち込み断面図	81
第58図	笠松道跡5区1号落ち込み断面図、出土遺物	82
第59図	笠松道跡5区1～8号ピット平面断面図	83
第60図	笠松道跡5区9～20号ピット平面断面図	84
第61図	笠松道跡5区21～30号ピット平面断面図	85
第62図	笠松道跡5区旧右部調査ピット配置図	86
第63図	笠松道跡5区道溝外出土の遺物	86
第64図	堀廻道跡3区全体図	87
第65図	堀廻道跡3区1号穴状道溝平面断面図	88
第66図	堀廻道跡3区1～4号土坑平面断面図	89
第67図	堀廻道跡3区1号溝平面断面図	90
第68図	堀廻道跡3区1号溝断面図・出土遺物	91
第69図	堀廻道跡3区2号溝平面断面図	92
第70図	堀廻道跡3区3号溝平面断面図	93
第71図	堀廻道跡3区道溝外出土の遺物	93
第72図	堀廻道跡3区全体図	94
第73図	堀廻道跡4区1・2号土坑平面断面図	95
第74図	堀廻道跡4区道溝外出土の遺物	95
第75図	堀廻道跡5区全体図	95
第76図	堀廻道跡5区道溝外出土の遺物	95
第77図	堀廻道跡6区全体図	97
第78図	堀廻道跡6区1号溝平面断面図	97
第79図	堀廻道跡6区道溝外出土の遺物	97
第80図	天良七堂道跡5区全体図	98
第81図	天良七堂道跡5区1号溝・硬化面下道溝断面図	99
第82図	天良七堂道跡5区硬化面下道溝平面断面図	100
第83図	笠松道跡4区4号溝Bセクション上層柱状図	104
第84図	笠松道跡4区1号溝Aセクション上層柱状図	105
第85図	笠松道跡4区9号溝Aセクション上層柱状図	105
第86図	笠松道跡4区2号溝Aセクション上層柱状図	105
第87図	笠松道跡5区新田部跡	107
第88図	官衙的区画と推定東山道駅路下新田部ルート	108

表目次

第1表	遺構名称の改訂	5
第2表	周辺の遺跡一覧表(1)	10
第3表	周辺の遺跡一覧表(2)	11
第4表	周辺の遺跡一覧表(3)	12
第5表	1号掘立柱建物ピット一覧表	16
第6表	2号掘立柱建物ピット一覧表	16
第7表	3号掘立柱建物ピット一覧表	18
第8表	笠松道跡3区ピット一覧表	21
第9表	1号掘立柱建物ピット一覧表	25
第10表	2号掘立柱建物ピット一覧表	28
第11表	3～6号掘立柱建物ピット一覧表	29
第12表	笠松道跡4区ピット一覧表	33
第13表	笠松道跡4区土坑一覧表	42
第14表	笠松道跡5区土坑一覧表	69
第15表	笠松道跡5区ピット一覧表	83
第16表	溝状遺構に関係するテフラ検出分析結果	104
第17表	遺物観察表(1)	
第18表	遺物観察表(2)	
第19表	遺物観察表(3)	
第20表	遺物観察表(4)	

写真目次

PL. 1	1	笠松道跡3区全景(西から)	2	1号方形道橋全景(北東から)	
	2	笠松道跡3区・天良七堂道跡5区全景(南東から)	3	12号土坑全景(南から)	
PL. 2	1	笠松道跡3-3区全景(北東から)	4	13号土坑全景(南東から)	
	2	笠松道跡3-2区全景(南西から)	5	14・15号土坑全景(北東から)	
	3	笠松道跡3-1区掘立柱建物群全景(上が北西)	6	16号土坑全景(西から)	
PL. 3	1	1・2号掘立柱建物全景(南東から)	7	17号土坑全景(南東から)	
	2	1・2号掘立柱建物全景(南西から)	8	17号土坑全景(北東から)	
	3	1・2号掘立柱建物全景(西から)	PL. 12	1	1号井戸全景(南西から)
	4	3号掘立柱建物全景(南東から)	2	2号井戸全景(東から)	
	5	3号掘立柱建物南半部全景(北東から)	3	3号井戸全景(南から)	
	6	3号掘立柱建物北半部全景(東から)	4	1号溝全景(北東から)	
	7	2号土坑全景(南東から)	5	推定東山道駅路下新田ルート(上が北)	
	8	3号土坑全景(南東から)	PL. 13	1	推定東山道駅路下新田ルート(西から)
PL. 4	1	1号溝全景(北西から)	2	推定東山道駅路下新田ルート(東から)	
	2	1号溝全景(南東から)	PL. 14	1	1号溝全景(西から)
	3	2号溝全景(南西から)	2	2号溝全景(東から)	
	4	2号溝全景(西から)	3	2号溝全景(南西から)	
	5	笠松道跡4区南半部全景 左奥が天良七堂道跡(西から)	4	4号溝東半部全景(北東から)	
PL. 5	1	笠松道跡4区南半部全景(北東から)	5	4号溝西半部全景(南東から)	
	2	笠松道跡4区北半部全景 奥が天良七堂道跡(西から)	6	4号溝東半部全景(南西から)	
PL. 6	1	笠松道跡4区北半部全景(北西から)	7	5号溝南端部全景(北から)	
	2	笠松道跡4区北半部全景(上が北東)	8	5号溝全景(北から)	
PL. 7	1	笠松道跡4区南半部全景(上が北西)	PL. 15	1	5号溝北端部全景(南から)
	2	4号溝と掘立柱建物群(上が北西)	2	6号溝全景(北から)	
PL. 8	1	1号掘立柱建物全景(南西から)	3	6号溝全景(南から)	
	2	1号掘立柱建物全景(南東から)	4	7・8号溝全景(北東から)	
	3	2号掘立柱建物全景(南西から)	5	9・16号溝全景(東から)	
	4	2号掘立柱建物全景(南東から)	6	9号溝全景(西から)	
	5	3~6号掘立柱建物全景(南西から)	7	10・20号溝全景(北東から)	
	6	3~6号掘立柱建物全景(南東から)	8	11号溝全景(北西から)	
	7	1号礎石全景(北東から)	PL. 16	1	12号溝北半部全景(南から)
	8	2号礎石全景(北西から)	2	12号溝北半部全景(西から)	
PL. 9	1	1号ビット全景(南東から)	3	12号溝南半部・24号溝全景(南から)	
	2	2号ビット全景(南東から)	4	13号溝全景(北から)	
	3	3号ビット全景(南から)	5	13号溝北半部全景(南から)	
	4	4号ビット全景(南から)	6	14・15号溝全景(南東から)	
	5	5号ビット全景(南から)	7	19号溝全景(北東から)	
	6	6号ビット全景(南から)	8	23号溝全景(北から)	
	7	7号ビット全景(南から)	PL. 17	1	25・26・30・31号溝全景(東から)
	8	8号ビット全景(南から)	2	27号溝全景(北から)	
	9	9号ビット全景(南東から)	3	27号溝全景(南から)	
	10	10号ビット全景(南から)	4	29号溝全景(北西から)	
	11	11号ビット全景(南東から)	5	32号溝全景(北東から)	
	12	12号ビット全景(南から)	6	32号溝全景(南西から)	
	13	13号ビット全景(南から)	PL. 18	1	33号溝全景(東から)
	14	14号ビット全景(南から)	2	33号溝全景(西から)	
	15	15号ビット全景(南から)	3	34号溝全景(北東から)	
PL. 10	1	16号ビット全景(南から)	4	34号溝全景(南西から)	
	2	17号ビット全景(南から)	5	37号溝全景(南東から)	
	3	18号ビット全景(南から)	6	38号溝全景(北東から)	
	4	19号ビット全景(南東から)	7	39号溝全景(北東から)	
	5	20号ビット全景(南から)	8	41号溝全景(北西から)	
	6	21号ビット全景(西から)	PL. 19	1	笠松道跡5-1区全景(北西から)
	7	23号ビット全景(南西から)	2	笠松道跡5-3区全景(南東から)	
	8	24号ビット全景(南東から)	3	笠松道跡5-2区南部全景(南東から)	
	9	25号ビット全景(南東から)	4	4号土坑全景(北西から)	
	10	1号土坑全景(南東から)	5	6号土坑全景(北東から)	
	11	7号土坑全景(南東から)	PL. 20	1	2号土坑全景(南から)
	12	8号土坑全景(南から)	2	3号土坑全景(北東から)	
	13	9号土坑全景(南から)	3	5号土坑全景(南から)	
	14	10号土坑全景(西から)	4	10号土坑全景(南西から)	
	15	11号土坑全景(南から)	5	1号井戸全景(北東から)	
PL. 11	1	3~21号ビット全景(南東から)	6	2号井戸全景(北から)	

- 7 3号井戸掘出土状態(南から)
 8 16号ピット全景(南から)
 9 17号ピット全景(南から)
 10 18号ピット全景(南から)
 11 19号ピット全景(東から)
 12 24号ピット全景(南から)
 13 28号ピット全景(北から)
 14 29号ピット全景(南から)
 15 30号ピット全景(北から)
- PL 21 1 8号土坑全景(西から)
 2 9号土坑全景(北から)
 3 11号土坑全景(北西から)
 4 12号土坑全景(南から)
 5 13号土坑全景(北から)
 6 14号土坑全景(東から)
 7 15号土坑全景(南西から)
 8 1～3号溝全景(南東から)
- PL 22 1 1～3号溝全景(南から)
 2 1号溝北端部全景(北西から)
 3 1号溝中央部全景(北から)
 4 1号溝中央部全景(南から)
 5 3号溝全景(南から)
 6 4号溝全景(南東から)
- PL 23 1 5号溝北端部全景(北から)
 2 5号溝中央部全景(南から)
 3 5号溝南端部全景(西から)
 4 6・7号溝全景(北から)
 5 8・9号溝北半部全景(北から)
 6 8・9号溝南半部全景(東から)
 7 8号溝南端部全景(北から)
- PL 24 1 10号溝全景(西から)
 2 1号落ち込み全景(南東から)
 3 堀廻道跡3区全景(南西から)
- PL 25 1 堀廻道跡3区全景(南東から)
 2 堀廻道跡3区全景(上が北東)
- PL 26 1 1号型穴状遺構全景(南西から)
 2 1号土坑全景(北西から)
 3 2号土坑全景(北西から)
 4 3号土坑全景(南東から)
 5 4号土坑全景(南東から)
 6 1号溝全景(南西から)
 7 1号溝A-A'セクション(北東から)
 8 2号溝全景(北東から)
- PL 27 1 2号溝全景(南西から)
 2 3号溝全景(南から)
 3 堀廻道跡3区北半部旧石器調査状況(南東から)
 4 堀廻道跡3区南半部旧石器調査状況(南東から)
 5 堀廻道跡4-1区全景(北西から)
 6 堀廻道跡4-3区全景(南東から)
- PL 28 1 堀廻道跡4-2区全景(南東から)
 2 堀廻道跡4-4区全景(南西から)
 3 1号土坑A-A'セクション(南東から)
 4 2号土坑全景(南東から)
 5 堀廻道跡4-1区旧石器調査状況(北西から)
 6 堀廻道跡4-5区旧石器調査状況(南東から)
 7 堀廻道跡4-3区旧石器調査状況(南東から)
 8 堀廻道跡5-1区全景(東から)
- PL 29 1 堀廻道跡5-2区全景(北西から)
 2 堀廻道跡6-1区全景(北西から)
 3 堀廻道跡6-2区全景(北西から)
 4 堀廻道跡6-3区全景(北西から)
 5 堀廻道跡6-4区全景(北西から)
 6 堀廻道跡6-5区北半部全景(北西から)
 7 堀廻道跡6-5区南半部全景(北西から)
 8 堀廻道跡6-6区全景(北東から)
- PL 30 1 1号溝全景(東から)
- 2 1号溝全景(南東から)
 3 堀廻道跡6-5区中央部旧石器調査状況(北西から)
 4 堀廻道跡6-5区南半部旧石器調査状況(北西から)
 5 天良七堂遺跡5区全景(上が北西)
- PL 31 1 天良七堂遺跡5区全景(西から)
 2 1号溝B-B'セクション(北西から)
 3 硬化面下遺構全景(南から)
 4 硬化面下遺構全景(西から)
- PL 32 笠松道跡3区道構外、4区1号井戸、4区2・4・9・14・15号溝、4区道構外出土遺物
- PL 33 笠松道跡4区14・15号溝、5区1号溝、5区1号落ち込み、5区道構外出土遺物
- PL 34 堀廻道跡3区1号溝、3～6区道構外出土遺物

第1章 調査の経緯・経過・方法

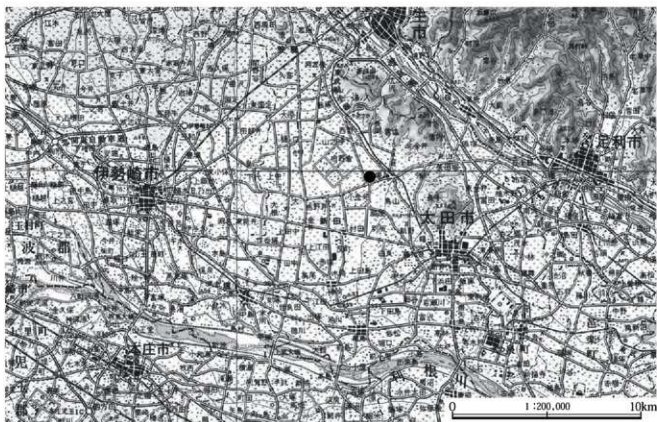
第1節 調査に至る経緯

太田大間々線バイパスは、太田市西北部の交通渋滞緩和を目的として計画された道路である。

この道路建設に関連する発掘調査は、平成12年～14年度に太田市西本町から鳥山町の間の年保遺跡、前沖遺跡、鳥山下遺跡において、当事業団が担当して実施したのが最初である。その調査の成果についてはすでに2冊の報告書として刊行済みである。その後さらに北に向かって工事が計画されるに伴い、試掘調査で遺構が確認された部分は発掘調査が必要となり、それらについても平成21年度以降に当事業団が担当して調査を実施した。そのうち主要地方道足利伊勢崎線以南の部分は、平成23年度に整理事業を行い、『笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡（主）太田大間々線関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』として、その成果を報告してある。

今回報告するのは、主要地方道足利伊勢崎線以北の部分であり、ここについては平成21年7月に群馬県教育委員会文化財保護課が試掘調査を行った。その結果遺構が確認されたことから本調査が行われることとなり、県教育委員会文化財保護課の調整を経て、翌平成22年度に当事業団が担当して実施することになった。調査は、平成21年度(主)太田大間々線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査として、平成22年4月1日～6月30日に堀廻遺跡2～8区で実施した(その後遺跡名・区名は改訂した。次ページ参照)。

さらに用地買収の進展に伴い、平成22年度に調査を行わなかった笠松遺跡4・5区について調査が行われることとなり、平成24年度に当事業団が担当して実施した。調査は平成24年度(主)太田大間々線バイパス地方特定道路整備事業に伴う発掘調査として、平成24年4月1日～7月31日に実施した。



第1図 遺跡の位置(国土地理院20万分の1地勢図「宇都宮」(平成18年4月1日発行)使用)

第2節 調査の方法

今回報告する県道足利伊勢崎線以北の調査区は、平成22年の調査ですべて「堀廻遺跡」と呼んでいたが、その後太田市の遺跡範囲との整合性を図るため、遺跡名称・区名を改訂した。改訂の結果は第2図の通りである。この改訂によって県道北側の調査区は、笠松遺跡、堀廻遺跡、天良七堂遺跡の3遺跡に分かれることになった。

調査範囲は現道によって細かく分断されている。そのため、第2図のように8ヶ所の調査区に分けて調査を行った。さらに笠松遺跡3区、堀廻遺跡3～6区では住民の通路などを確保する都合上、さらにいくつかの調査区に分けざるを得なかったが、本書ではそれらを便宜上3-1区、3-2区などと呼称している。笠松遺跡5区では、平成22年度と24年度とに調査を行ったため3地区に分かれてしまっており、こゝも便宜上5-1区、5-2区、5-3区に呼び分けることにした。

調査に用いたグリッドは5m×5mを基本とした。その名称は本遺跡特有のものを設定することはせず、国土座標IX系(新国土座標系=世界測地系)を用い、X・Y座標について、その下3桁を用いて表すことにした(例：X=36485、Y=-45460の場合、485-460と表す)。地点を細かく表示する場合は、この下3桁の数字をそのまま用いた場合もある(例：5mグリッドにこだわらず、1m単位で486-462と表す場合がある)。

調査方法に特殊なものではなく、ごく標準的な方法を用いた。その概略は以下の通りである。

表土除去は基本的にバックホーを用いたが、面積の狭い調査区については人力で行った。表土除去終了後はジョレンを用いて遺構確認を行い、確認できた遺構について調査を行った。遺構の種類は掘立柱建物のほか、土坑、溝、ピットなどであり、それぞれに適した方法を用いた。

遺構名は調査区ごとの続き番号で表した。そのため、調査区が異なると同じ番号の遺構が存在することになる。本書では、誤解の恐れがある場合は遺構名の前に遺跡名称・区名を付けて、「○○遺跡○区1号溝」というように呼び分けるようにしている。

遺構の測量は測量業者に委託し、平面図・断面図とも

データをデジタル化してその後の整理作業の便を図っている。縮尺は基本的に1/20である。写真撮影はデジタルカメラを主とし、重要な遺構については6×7白黒も撮影した。主な調査区の全景写真は業者に委託し、ラジコンヘリによって空中撮影を行った。

笠松遺跡・堀廻遺跡ではローム層の堆積が良好であったため、ごく狭い調査区を除いて、遺構の調査終了後旧石器時代の調査を行った。調査は2×4mか2×2mの調査坑を設けて行ったが、全地域で遺構・遺物とも見つからなかった。

第3節 調査の経過

調査は平成22年、平成24年の2ヶ年度に行った。以下、それぞれの年度ごとに調査の経過を記す。

平成22年度

平成22年度に調査を行ったのは、笠松遺跡3区、同5-1・5-3区、堀廻遺跡3～6区、天良七堂遺跡5区であり、4月1日～6月30日に実施した。

年度始めの事務処理、準備作業などを行ったのち、現地における調査は4月15日から開始した。以下、調査区毎に経過をまとめる。

○笠松遺跡3区

表土除去は3-2区と3-3区において、5月18日から開始した。この区は狭いので表土は人力で掘削し、その後遺構確認を行った。3-2区で溝1条、土坑2基(うち1基はその後遺構ではないことが判明)が見つかったので、それらを調査した後、26日に全景写真を撮影し、27日から埋め戻しを行った。3-1区の表土除去は27日から行い、28日からは遺構確認を行った。この区では多くの柱穴と、溝1条が見つかり、それらの調査は6月14日まで継続して行った。9日にはラジコンヘリによる空中写真撮影、11・14日には個別写真撮影と実測を行ったのち、15日には埋め戻し、この区の調査は終了した。

○笠松遺跡5区

5-1、5-3区は多くの遺構が予想されたので、最も早く調査を開始した。まず4月15日から重機による表土除去を開始し、翌16日からは遺構確認を始めた。表土除去は27日に終了し、その後重機は堀廻遺跡4区に移動



第2図 調査区位置図

(この地図の作成にあたっては、太田市長の承認を得て、同市発行の2,500分の1地形図(平成23年測図)を使用し複製した)

した。5-3区の遺構調査は26日から、5-1区では5月6日から開始した。この両区では溝9条、土坑2基(1基はのちに井戸であることが判明)が見つかり、12日には全景写真、13日には個別写真を撮影した。その後遺構の調査を継続しながら、14~19日には5-3区で、25~27日には5-1区で旧石器時代の調査を行った。5-3区の埋め戻しは21~27日、5-1区の埋め戻しは6月28・29日に行い、この区の調査は終了した。

○堀廻遺跡3区

表土除去は4月26日に面積の狭い3-2区から開始した。この区は人力で表土を除去し、遺構確認を行ったが、遺構は存在しなかったため5月18日に全景写真を撮影して終了した。

3-1区は25日から表土除去を開始し、6月4日まで継続した。その間遺構確認も並行して実施し、竪穴状遺構1基、土坑4基、溝4条(1条はのちに攪乱であることが判明)を見つけ、7日からその調査に入った。遺構の調査がほぼ終了した17日には空中写真を撮影し、個別写真を撮影した後、翌18日に旧石器時代の調査を開始した。以後、溝の補足調査と旧石器時代の調査を並行して進め、25日に終了、同日から29日まで埋め戻しを行い、この区の調査は終了した。

○堀廻遺跡4区

調査は4月26日に4-4区から開始し、人力で表土除去を30日まで行った。30日からは4-1区、4-3区の表土除去を重機で行い、並行して遺構確認を行った。この区では土坑2基が見つかり、その調査を行った後、12日に高所作業車を用いて全景写真を撮影した。旧石器時代の調査は4-3区で12~19日、4-1区で14~28日に行った。4-2区は6月2日に表土除去を行い、2、3日に遺構確認を行って遺構がないことを確認し、7日に全景写真を撮影した。その後17・18日に旧石器時代の調査を行い、24・25日に埋め戻しを行って、この区の調査を終了した。

○堀廻遺跡5区

5-1区の表土除去を4月28日~5月12日、5-2区は13・14日に行い、同時に遺構確認を行って遺構がないことを確認し、全景写真を18日に撮影した。埋め戻しは人力で31~6月2日に行い、この区の調査を終了した。

○堀廻遺跡6区

この区は調査区が細かく別れ、また排土置き場が限られているので、複雑な調査経過となった。表土除去は5月6日に6-6区から開始し、順次6-1・2区と6-5区の北端部・中央南部も開始した。これらの区の遺構確認は並行して実施し、遺構のないことを確認した後、5月17日に全景写真を撮影した。旧石器の調査は19日~27日まで行い、その間に6-1・6区は人力で埋め戻した。その後6月3日から6-3区と6-5区南部の表土掘削を行い、6-5区では1号溝を見つけて調査した。6-3区の全景写真は6月7日、6-5区南部の全景写真は8日に撮影し、旧石器時代の調査を17・18日に行って、終了後埋め戻しを開始した。同時に6-4区と6-5区の未調査部分の表土除去を行い、それらの遺構確認を行って遺構がないことを確認した後、25日に埋め戻しを行い、この区の調査を終了した。

○天良七堂遺跡5区

表土除去は5月28日~6月2日に行い、終了後遺構確認を行った。調査区の南側に溝が1条かかっており、それは9日に完掘し、即日ラジコンヘリによる空中写真撮影と地上からの写真撮影、実測を行った。10日からは溝北側の硬化面を調査した。それは14日には終了し、15日には埋め戻しを行い、この区の調査を終了した。

平成24年度

笠松遺跡4区と5-2区の調査を行った。両区とも排土置き場の関係で1度に発掘することができず、南北2回に分けて発掘調査を行った。

年度当初の事務処理、準備作業を行った後、現地における発掘調査は4月15日から開始し、まず4区南部において重機による表土除去を行った。この表土除去は24日に終了し、25日には5区北部の表土除去を行った。4区の遺構確認は15日に開始し、順次確認された遺構の調査に入った。この区では事前の想定通り、掘立柱建物とそれを囲む区画溝、推定東山道駅路下新田ルートにつながると見られる溝などの重要な遺構が見つかり、そのため、5月13日に現地説明会を開催した。来場者は330名である。その後掘立柱建物、溝、土坑などの調査を行い、24日にはラジコンヘリによる空中写真を撮影した。その後旧石器時代の調査を遺構調査と並行して行い、それらは6月4日には終了した。埋め戻しは先行して5月30日か

ら開始し、6月5日に終了、即日北部の表土除去に移行した。5区北部は5月に断続的に遺構確認を行い、30日からは遺構の調査に入った。この部分は遺構の数が少なかったため、6月4日には旧石器の調査を開始し、以後遺構調査と並行して進め、7日には作業を終了した。埋め戻しは8日に行った。

4区北部の表土除去は8日には終了したが、遺構確認は先行して7日から行った。翌8日には各遺構の調査に入った。ラジコンヘリによる空中写真は19日に撮影し、翌20日からは旧石器時代の調査も並行して行い、それらは27日に終了、28日からは埋め戻しを行い、7月3日には整地も含めて終了した。

5区南部の表土除去は6月26日から27日にかけて行い、28日からは遺構確認・調査に入った。7月4日からは旧石器時代の調査も並行して行い、それらは10日で終了、11、17日に埋め戻しと整地を行った。その後事務処理、機材撤出・プレハブ撤去などの完了作業を行い、7

月31日に現地における調査を終了した。

第4節 整理事業の概要と遺構名称の改訂

整理事業は平成24年8月1日より平成25年1月31日まで実施した。遺構図面は点検・修正・編集を行い、掲載図面をデジタルデータとして作成した。遺物については接合・復元、写真撮影、実測、トレースののち、トレース原稿をスキャニングしてデジタルデータとした。同時に遺物観察を行い、遺物観察表を作成した。写真は遺構・遺物ともデジタル写真から編集を行った。それらの作業と並行して本文の執筆、土層注記や各種一覧表などを作成し、それらを併せてレイアウトを作成したのちデジタル編集し、報告書原稿を作成した。

なお、整理の過程で、調査時と遺構名称の改訂が生じている。それらは第1表に示したとおりである。

第1表 遺構名称の改訂

区名	調査時の名称	整理時に変更した名称	
笠松3区	1号土坑	欠番	
	2号ピット	2号掘立柱建物P 3	
	3号ピット	1号掘立柱建物P 4	
	5号ピット	1号掘立柱建物P 3	
	6号ピット	2号掘立柱建物P 2	
	7号ピット	1号掘立柱建物P 2	
	8号ピット	2号掘立柱建物P 1	
	9号ピット	1号掘立柱建物P 1	
	14号ピット	3号掘立柱建物P 3	
	16号ピット	3号掘立柱建物P 4	
	17号ピット	欠番	
	18号ピット	3号掘立柱建物P 2	
	19号ピット	3号掘立柱建物P 2	
	23号ピット	欠番	
	28号ピット	3号掘立柱建物P 1	
	笠松4区	1号礎石建物	1号礎石
		2号礎石建物	2号礎石
1号型穴状遺構		17号土坑	
2号土坑		欠番	
3号土坑		欠番	
4号土坑		欠番	
5号土坑		欠番	
6号土坑		欠番	
1号建物		1号方形遺構	
21号溝		14号溝と併せため欠番	
40号溝		欠番	
1号流路		41号溝	
1号掘立柱建物P 5		欠番	
1号掘立柱建物P 6		2号掘立柱建物P 12	
1号掘立柱建物P 7		2号掘立柱建物P 11	
1号掘立柱建物P 8		2号掘立柱建物P 10	
1号掘立柱建物P 9		2号掘立柱建物P 9	
1号掘立柱建物P 10		26号ピット	
1号掘立柱建物P 11		27号ピット	
1号掘立柱建物P 12		28号ピット	
1号掘立柱建物P 13	29号ピット		
2号掘立柱建物P 1	2号掘立柱建物P 5		
2号掘立柱建物P 2	2号掘立柱建物P 6		
2号掘立柱建物P 3	2号掘立柱建物P 7		

区名	調査時の名称	整理時に変更した名称
笠松4区	2号掘立柱建物P 4	2号掘立柱建物P 8
	2号掘立柱建物P 5	2号掘立柱建物P 1
	2号掘立柱建物P 6	2号掘立柱建物P 2
	2号掘立柱建物P 7	2号掘立柱建物P 3
	2号掘立柱建物P 8	2号掘立柱建物P 4
	3号掘立柱建物P 1	3号掘立柱建物P 7、4号掘立柱建物P 6
	3号掘立柱建物P 2	3号掘立柱建物P 8、4号掘立柱建物P 7
	3号掘立柱建物P 3	3号掘立柱建物P 9、4号掘立柱建物P 8
	4号掘立柱建物P 4	4号掘立柱建物P 5
	4号掘立柱建物P 5	4号掘立柱建物P 3
	4号掘立柱建物P 6	4号掘立柱建物P 2
	4号掘立柱建物P 7	4号掘立柱建物P 1
	4号掘立柱建物P 8	4号掘立柱建物P 4
	4号掘立柱建物P 9	欠番
	5号掘立柱建物P 10	5号掘立柱建物P 4
	5号掘立柱建物P 11	5号掘立柱建物P 5
	5号掘立柱建物P 12	5号掘立柱建物P 6
	5号掘立柱建物P 13	5号掘立柱建物P 3
	3号掘立柱建物P 14	3号掘立柱建物P 3
	3号掘立柱建物P 15	3号掘立柱建物P 2
	3号掘立柱建物P 16	3号掘立柱建物P 1
	5号掘立柱建物P 17	5号掘立柱建物P 1
	5号掘立柱建物P 18	5号掘立柱建物P 2
	3号掘立柱建物P 19	3号掘立柱建物P 4
3号掘立柱建物P 20	3号掘立柱建物P 5	
3号掘立柱建物P 21	3号掘立柱建物P 6	
3号掘立柱建物P 22	6号掘立柱建物P 3	
3号掘立柱建物P 23	6号掘立柱建物P 2	
3号掘立柱建物P 24	6号掘立柱建物P 1	
笠松5区	1号土坑	3号井戸
	16号土坑	欠番
	1号流路	5号溝に併せため欠番
	2号流路	欠番
	3号流路	欠番
飯塚3区	4号流路	欠番
	4号溝	欠番

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

本書で報告する笠松遺跡、堀廻遺跡、天良七堂遺跡の3遺跡(以下本章でこの3遺跡を呼ぶ場合は「本遺跡」と略称する)は太田市街地の北西、太田市新田小金井町にあり、東武鉄道伊勢崎線の太田駅からは約6キロ離れている。

本遺跡のある場所は、渡良瀬川が形成した大間々扇状地の末端近くであり、東には八王子丘陵、金山丘陵が北西から南東方向に延びている(第3図)。現在の渡良瀬川はこの丘陵の東側を、やはり北西から南東方向に向かって流れている。

大間々扇状地は、『太田市史・通史編 自然』(太田市1996)によれば、「渡良瀬川が更新世に形成した関東地方有数の大型扇状地」で、谷口の大間々町(現みどり市)から南に向かって発達し、太田市北西部から新田町(現太田市)、境町(現伊勢崎市)を経て伊勢崎市東部に至る海拔50～60m付近を扇端としている。その規模は南北約18km、扇端の幅約13kmという広大なものである。この大間々扇状地の内部は水に乏しい土地で、近世以前には人の居住がほとんど見られず、「笠懸野」と呼ばれる原野であった。そのため遺跡の数も少ない。周辺の遺跡の分布図(第4図)の左上、北西に当たる部分が遺跡の空白地となっているのはそういった理由による。しかし遺跡周辺の扇状地扇端部では、標高60m付近に湧水地があり、そこからあふれ出した水が小河川となって南に流れている。そのため湧水地帯から南には多くの遺跡が分布するようになる。また、扇状地からはずれる東側も、水が豊富で丘陵裾部にかけて遺跡が多い。その状況は第4図にみるとおりである。扇状地の東や南には谷底平野が広がり、そこは現在水田として利用され、その中に砂礫地や埋まりきっていない扇状地があり、そこは周囲より高い土地で、住宅ないしは畑地として利用されている。遺跡が多いのはこのようなやや高い部分である。

本遺跡のある場所は扇状地扇端からやや内部に入ったところで、遺跡分布でも北端に近い。そのため、今回の

調査区でも北に行くほど遺構が少なくなる。遺跡周辺は現在宅地や畑地として利用され、ほぼ平坦な地形である。標高は62～65m程度であり、北西に向かってごく緩やかな登り傾斜となっている。遺跡の東側は浅い谷地形で遺構の少ない地域となり、そのさらに東側はやや高くなってそこに次節で述べる新田郡衙、寺井廃寺が建てられている。

第2節 歴史的環境

太田市周辺は県内でも遺跡の多い地域で、旧石器時代から中近世までの多くの遺跡が知られている。ここでは本遺跡の周辺の遺跡について述べるが、今回報告する調査で見つかった遺構・遺物は、わずかな縄文時代の遺物以外は、属する時代が奈良・平安時代～中近世に限られている。そのため、以下の記述は古墳時代以降を中心とし、それ以外は簡単に触れるにとどめることにする。各遺跡の概要は周辺の遺跡一覧表(第2～4表)を参照していただきたい。

旧石器時代

この時代の遺跡は少なく、成塚住宅団地遺跡群(58、○)内の数字・文字は第4図、第2～4表の遺跡番号と一致する。以下同じ。)ほかの数カ所で石器が見つかった程度である。

縄文時代

本遺跡ではわずかな遺物が出土しているだけだが、八王子丘陵、金山丘陵周辺には多くの遺跡がみられ、本遺跡の南側にも同時代の遺跡が点々と分布する。県道足利伊勢崎線の南側の調査区では、天良七堂遺跡1区で後期の竪穴住居1軒を調査するなど、同時代の遺構・遺物が見られるので、本遺跡の遺物もそれらの中で理解すべきであろう。

弥生時代

太田市域では弥生時代の遺跡は少ないが、周辺地域に

は点在し、特に西長岡東山古墳群(c)では、中期の土器が多数出土している。また、近年行われた北関東自動車道関連の調査では資料が増加している。西野原遺跡(69)では中期後半の竪穴住居11軒が見つかり、この時期の集落としては東毛地区で初めての調査となった。本遺跡では県道足利伊勢崎線の南の調査区も含めて、この時代の遺構・遺物は見つかっていない。

古墳時代

古墳時代になると遺跡の数が増加する。まず墳墓の状況からみると、前期古墳としては、金山丘陵北西に寺山古墳(第4図の範囲外)がある。全長55mの前方後円墳である。八王子丘陵の南端にある成塚向山古墳群(1)の1号墳は1辺21mの方墳で、主体部から銅鏡・鉄剣などが出土した。その他、方形周溝墓は新田東部遺跡群(29)、唐桶田遺跡(31)、堂原遺跡(33)、成塚住宅団地遺跡群(58)等にみられる。中期には本遺跡の南東に墳丘長95mの前方後円墳の鶴山古墳(C)、帆立貝形古墳の可能性のある亀山古墳(D)、墳丘長66mの前方後円墳の鳥宗神社古墳(E)があり、後期には本遺跡の北側に二ツ山古墳1号墳(A)・2号墳(B)という二つの前方後円墳が築かれるなど、地域の首長クラスの墳墓が作られ続けている。このような状況が、7世紀後半以降この地域が新田郡の中心となっていくことの地下となったものと思われる。それ以下の大きさの古墳も分布密度が高く、第4図にみるように、多くの古墳、古墳群があることが知られている。

集落遺跡としては、前期に大鷲遺跡群(59)、新田東部遺跡群(29)、唐桶田遺跡(31)、脇屋深町遺跡(32)、成塚住宅団地遺跡群(58)、西長岡東山古墳群(c)、成塚向山古墳群(1)などが調査され、新田東部遺跡群の中溝・深町遺跡では首長居館が調査されて東史跡に指定されている。中・後期には新田東部遺跡群(29)、堂原遺跡(33)、前沖遺跡(38)、成塚住宅団地遺跡群(58)などがあり、成塚住宅団地遺跡群では居館関連遺構として方形区画がみられる。

また、中後期には八王子丘陵・金山丘陵において須恵器や埴輪の生産が開始され、7世紀後半には西野原遺跡(69)で製鉄炉がみられるようになるなど、この地域とその東側の丘陵にかけての一角は、一大工業地帯へと成長していく。

この時代の遺構・遺物は今回報告する調査区にはほとんど見られなかったが、県道足利伊勢崎線の南では天良七堂遺跡(3)、上根遺跡(5)で竪穴住居が21軒調査されている。

奈良・平安時代

本遺跡の中心となる時代である。

この地域は古代には「新田郡」に属していたが、本遺跡の周辺には重要な遺跡が集中し、まさに郡の中心となっていた地域である。

天良七堂遺跡(3)は第4図にみるように範囲が広いが、本遺跡の東に位置する地域には、この時期新田郡衙が設置されていた。ここでは昭和30(1955)年に群馬大学によって礎石建物が発掘調査されて以来、周辺で多くの建物が確認されていることから、新田郡衙の有力推定地とされてきたが、平成19(2007)年に太田市教育委員会によって郡庁が確認され、ここが新田郡衙であることが確定した。翌平成20年には国史跡に指定され、現在太田市教育委員会による確認調査が継続して実施されている。郡庁跡は1辺約90mと全国最大規模であり、四方を長大な掘立柱建物で囲み、中央に正殿と前殿が建てられている。周辺には数多くの倉庫が建ち並び、それがさらに溝で囲まれて、南側に推定東山道駅路下新田ルートが通過している。

新田郡衙の北東には7世紀後半に創建された寺井廃寺(55)がある。創建期の瓦は群馬県では例の少ない川原寺式のもので、中心部の調査は行われていないものの、大規模な伽藍をもった寺院であったと考えられている。また、本遺跡の西側には、2棟の基壇をもつ瓦葺き総柱建物が調査されている入谷遺跡(7)、唐三彩陶杖が出土した境ヶ谷戸遺跡(12)、規則的な配置の掘立柱建物が調査された揚原遺跡(14)など、注目される遺跡が多くある。

交通路としては先述の推定東山道駅路下新田ルートの南に平行して、推定東山道駅路牛堀矢ノ原ルートが伸びている。この二つのルートは、近年牛堀矢ノ原ルートから下新田ルートへと変遷した可能性が高いと考えられている(小宮俊久『天良七堂遺跡3』太田市教育委員会2012)。さらに新野脇屋遺跡群の堂原遺跡(33)、釣堂遺跡(34)で東山道武蔵路と思われる古代道路跡が確認され、それが本遺跡付近で前述の2つのルートと合流する



第4図 周辺の道跡

(国土地理院2万5千分の1地形図「相生」(平成21年4月1日発行)、上野境(平成22年12月1日発行)を使用)

第2章 遺跡の位置と環境

第2表 周辺の遺跡一覧表(1)

番号	遺跡名	時代					遺跡の概要	文献
		旧石器	縄文	弥生	古墳	中・近		
1	笠松遺跡			○	○	○	溝に囲まれた掘立柱建物群は官衙的な様相をもつ。中世から近世の土坑・溝など。	本書、20、25、42
2	堀廻遺跡		○	○	○	○	古代から近世の土坑・溝など。	本書
3	天良七堂遺跡					○	新田郡部。郡庁を中心に、正倉郡が調査されている。溝で囲まれ、南を推定東山道驛路下新田ルートが通過する。郡庁部分は国指定史跡。	本書、20、22、39、42、49、52、62、67、68、81、83、84
4	寺井本郷遺跡				○	○		85
5	上根遺跡		○	○	○	○	推定東山道驛路牛軋・矢ノ原ルート。5～7世紀の集落。中世の土坑・溝。	20、27、31
6	柳原遺跡				○	○		85
7	入谷遺跡				○	○	区画溝の中に2棟の礎石建ちの礎柱建物。7世紀末～8世紀初頭の成立。	22、33、35、36、48
8	下原宮遺跡				○	○	推定東山道驛路牛軋・矢ノ原ルート。	26
9	上新井遺跡				○	○	石田川式の高坪が表採されている。	25
10	村田・本郷B遺跡				○	○	古墳～平安集落。中世の方形区画。	25、31
11	上野井遺跡				○	○	古墳～平安集落。奈良～平安前期の瓦・瓦塔。墨書土器「大多殿」。中世館。	25、26、27、29、32、38、50、66
12	境ヶ谷戸遺跡				○	○	唐三彩陶杖出土。多数の掘立柱建物。古墳時代後期～平安型穴住居。墨書土器「東殿」「人田」「人」。	25、26、27、28、38、46、65
13	赤城南遺跡				○	○	古墳～平安集落。	25、31、32、34
14	岡原遺跡						奈良・平安の型穴住居と掘立柱建物。掘立柱建物は大規模で規則的配置であり、官衙的様相。	31、45
15	木刈・間々下遺跡				○	○		25
16	石野井・本郷遺跡				○	○	古墳時代集落。中世の土坑・溝。	31、47
17	石塚遺跡				○	○	古墳前期集落。古墳後期～中世の土坑・溝。	40
18	通木遺跡				○	○	古墳後期～平安集落。中世の遺構は通木館(ツ)に関連か。	27、40、43
19	杉ノ前遺跡				○	○	古墳2基。中近世の土坑・溝。	43
20	梅ノ木遺跡				○	○	古墳中期～奈良集落。	41
21	渡吉遺跡				○	○	古墳時代集落。	27、30、67
22	中村田遺跡				○	○	古墳後期～平安集落。中世の遺構は宝蔵寺館(ト)に関連か。	40
23	中塚東遺跡				○	○	古墳前期～平安集落。古墳時代前期の方形周溝墓。中世の溝。	40
24	番場東遺跡				○	○	縄文期穴住居。古墳前期～平安集落。中世ビット・井戸。	37
25	中塚東遺跡				○	○	古墳前期～平安集落。	37
26	村田・本郷遺跡				○	○	古墳～平安集落。中世の方形型穴状遺構・溝。	30、37、65
27	中溝遺跡				○	○	古墳前期～平安集落。中世館跡。	25、37
28	一本杉遺跡				○	○	古墳前期～平安集落。As-B下水田。小型仿製鏡出土。	37
29	新田東部遺跡群(中溝・深町遺跡ほか)		○	○	○	○	中溝・深町遺跡は国指定史跡で、古墳前期首長居館、古墳中～後期集落。一本杉遺跡は古墳前期集落、平安時代掘立柱建物・井戸・土坑・溝。梅花遺跡は縄文期竈形住居。古墳前期集落。	25、44
30	中溝II遺跡				○	○	古墳前期～後期集落。小型銅鐸出土。	37、44
31	唐樋田遺跡				○	○	古墳前期集落・方形周溝墓。	55、80
32	脇塚深町遺跡				○	○	古墳前期集落・方形周溝墓。	59、60、73
33	堂原遺跡		○	○	○	○	縄文中期住居。古墳前期～後期集落。古墳。方形周溝墓。平安時代集落。推定東山道武蔵路。	58、61、62、63、70、71、72、82
34	釣堂遺跡				○	○	縄文中期住居。古墳～平安集落。古墳。釣堂廃寺。推定東山道武蔵路。	52、63、82
35	岡原遺跡				○	○		85
36	脇塚中原遺跡				○	○		85
37	下原遺跡				○	○		85
38	前沖遺跡		○	○	○	○	古墳～平安集落。As-B下水田。	7、54
39	高山下遺跡・前沖遺跡				○	○	古墳前期集落。奈良・平安集落、中近世井戸・土坑。	6、67
40	鳥ヶ谷戸遺跡				○	○		85
41	廻着遺跡				○	○		85
42	高山原東遺跡		○					85
43	中道遺跡				○	○		85
44	上泉開戸遺跡				○	○		85
45	高山寺中道遺跡				○	○		85
46	上道跡				○	○	古墳～平安集落。	65、66
47	久保遺跡				○	○	7世紀後半～10世紀前半集落。	60、68
48	八幡遺跡				○	○	古墳後期～奈良平安集落。	2、23、52
49	久保加遺跡				○	○	推定東山道驛路牛軋矢ノ原ルート	67、68
50	新田前遺跡				○	○		85
51	堀中遺跡				○	○		85

第3表 周辺の道跡一覧表(2)

番号	道跡名	時代					道跡の概要	文献
		旧石器	縄文	弥生	古墳	中・近		
52	寺裏道跡				○		古墳時代後期を中心とした集落。	52
53	鷹ノ宮道跡				○		河川工事中に遺物出土。因分寺系の8世紀後半の瓦、三彩陶器、瓦塔、土器等。	52
54	石橋地蔵久保道跡				○		6世紀前半～9世紀の集落。墨書土器「新田」「入田」。	9、67
55	寺井庵寺跡				○		7世紀後半創建の寺院。川原寺式軒瓦出土。	22、52、60、67、68
56	寺井庵寺東道跡				○			85
57	寺井庵寺北道跡				○			85
58	成塚住吉田道跡群	○	○	○	○		縄文中期集落。古墳～平安の大集落。古墳時代中期階壇、埴輪室、古墳。方形周溝墓。	1、52、53、74～79
59	大鷲道跡群				○		古墳時代型穴状遺構・土坑、As-B下水田。古代～中・近世掘立柱建物等調査。	10
60	成塚道跡群				○		古墳時代土坑・溝、As-B下水田。中近世型穴状遺構等調査。	19
61	駒形神社埴輪室跡				○		埴輪室跡と集積場を調査。6世紀末。	52
62	菅塩田谷道跡	○						85
63	菅塩祝入道跡				○			85
64	菅塩道跡群	○			○		縄文土器・石器多数出土。1字紋を刻んだ岩版。古墳時代前期住居、As-B前後の水田遺跡。中近世以降の掘立柱建物6棟等。	13
65	愛大塚道跡				○			64
66	西野岡宮道跡	○	○	○	○		縄文後期集落、墓坑群、配石遺構。古墳集落。古代～中近世の溝・土坑など。	15、16、63
67	鳥谷戸道跡				○		As-B下水田。古墳～近世の溝。	12
68	愛宕山道跡				○		5世紀前半住居。6世紀後半円墳。平安時代炭窯・小鍛冶工房。	61
69	西野原道跡	○	○	○	○		縄文前・中期、弥生中期、古墳、平安の集落。終末期古墳群。7世紀後半の製鉄炉、鍛冶遺構。中世掘立柱建物。	8、12、14、17、18
70	西野東下道跡	○	○	○	○			85
71	西野東中道跡	○	○	○	○			85
72	西野西道跡	○	○	○	○			85
73	西野東上道跡	○	○	○	○			85
A	ニツ山古墳1号墳				○		墳丘全長約74mの2段築成の前方後円墳。乱石積袖無形横穴式石室。大刀・馬具・武具・金環・円筒埴輪・形象埴輪出土。「綜覧」生品村1号。6世紀。	25、52
B	ニツ山古墳2号墳				○		墳丘全長約45mの前方後円墳。2段築成か。横穴式石室。1号墳に後出。「綜覧」生品村2号。6世紀。	25、28
C	鶴山古墳				○		墳丘全長約95mの前方後円墳。二重円壇。型穴式石室から甲冑類、大刀、矛、鉄鏃、鉄製農具、滑石製模造品等豊富な副葬品が出土。埴輪は出土しない。5世紀。	52、60
D	亀山古墳				○		市史では径約35mの円墳。前方後円墳か帆立貝形古墳の可能性も。埴輪散布。5世紀。	52
E	島崇神社古墳				○		全長約66mの前方後円墳。	52、58
F	天良蛇塚古墳				○		径約30mの円墳。2段築成か。横穴式石室。埴輪なし。7世紀前半。「綜覧」生品村3号。	25
G	新生期古墳				○			85
H	堀廻古墳				○		「綜覧」生品村5号か。径約24mの円墳。	25
I	寺井塚古墳				○			85
J	松尾神社古墳				○		ほぼ削平。前方後円墳か。「綜覧」では生品村9号で長さ約120m。大刀・金具・鉄鏃・金環等出土と伝えるが既に散逸。	25
K	笠松古墳				○			85
L	入谷古墳				○			85
M	四軒北古墳				○		既に削平。前方後円墳だと伝える。円筒埴輪・馬形埴輪出土。	25
N	藤塚ノ幡古墳				○		既に削平。「綜覧」では生品村6号で径約90mの円墳。金環・大刀出土との記録あり。前方後円墳の可能性も。円筒・人物埴輪出土。6世紀後半か。	25
O	下原前2号古墳				○		「綜覧」生品村10号か。円形で、東西約18m、南北約14.4mと記録されている。	25
P	下原前1号古墳				○		「綜覧」生品村11号か。円形で、東西約12.6m、南北約16.8mと記録されている。	25
Q	福蔵院古墳				○		現状で径11mの円形。埴輪は出土しない。	25
R	愛宕古墳				○		「綜覧」生品村7号か。円形で、径約23.5m。葺石ありと記録されている。	25
S	八幡古墳				○			85
T	高木神社跡古墳				○			85
U	通木1号墳				○		文献40のX区1号古墳か。円墳の東半分を調査している。	40
V	通木2号墳				○		文献40のY区1号古墳か。不整形円形で、東西・南北とも約6.8m。	40
W	杉ノ前1号墳				○		径約18mの円墳か。円筒埴輪、馬・人物埴輪出土。6世紀前半か。	43
X	杉ノ前2号墳				○		帆立貝形古墳らしい。径約15m。円筒埴輪、馬・人物埴輪出土。6世紀前半か。	43
Y	金山古墳				○		現状はわずかに高まりがあるのみ。円筒埴輪片が散布。6世紀代か。	25
Z	オクマン山古墳				○		径35mの円墳。3段築成か。袖無形の横穴式石室で金銅製耳環・琥珀製遺玉・鉄鏃等が出土。円筒埴輪の内側に形象埴輪が並ぶ。鷹匠埴輪が出土したことで有名。6世紀末か。	52、70
a	西長岡天神山古墳群				○		10基内外の円墳。	52

第2章 遺跡の位置と環境

第4表 周辺の遺跡一覧表(3)

番号	遺跡名	時代					遺跡の概要	文献
		旧石器	縄文	弥生	古墳	中・近		
b	西長岡古墳群				○		ほとんど削平され2基が現存。	52
c	西長岡東山古墳群			○	○		6世紀後半～7世紀前半の古墳15基を調査。弥生後期～古墳前期の住居や方形周溝墓も。	52, 60, 61
d	菅塩西山古墳群				○		西長岡東山古墳群の延長部か。	52
e	菅塩祝人古墳群				○		谷部奥の小規模な古墳群。	52
f	西高坪古墳群				○			85
g	北金井山古墳群				○			85
h	北金井川古墳群				○			85
i	菅塩山崎古墳群				○		ほとんど削平され、残存するのは少数。	52
j	御嶺山古墳群				○		市史によれば41基からなり、うち7世紀代の6基を調査。	52
k	大鷲山古墳群				○		『総覧』では字梅山の範囲に15基の古墳が分布。	52
l	成塚山古墳群	○	○	○	○		1号墳(前期の方墳・一辺21m、銅鏡・鉄剣・重櫛文鏡等)、2号墳(後期の円墳・径18m、横六式石室、鉄鏡、ガラス小玉、円筒・形象埴輪等)。1号墳墳上中より旧石器～弥生の遺物。古墳時代前期型穴住居17軒。平安型穴住居2軒。	11, 56
m	西長岡横塚古墳群				○		市史では合計23基からなる6世紀中頃～7世紀の古墳群。円墳3基と竪立貝形古墳1基を調査。文献4・5ではそれ以外の古墳15基のほか、古墳前期の住居も調査。	4, 5, 52, 54, 68
n	葉平塚古墳群			○	○		成塚古墳群の一支部か。	85
o	成塚古墳群	○			○		成塚稲荷塚古墳等、多数の古墳からなる。市史によれば四回も含め、方形・円形周溝墓、円墳、前方後円墳等総計73基で、うち後期の古墳は62基。縄文・古墳～平安住居も調査。	3, 4, 52, 53
p	成塚街道北古墳群				○		5世紀末～6世紀中葉の円墳8基を調査。3点の埴輪埴輪出土。	4, 64
q	寺井古墳群				○			85
r	鶴生田古墳群				○		25基以上の円墳からなる6世紀を中心とした古墳群。	52
s	脇屋古墳群	○			○		オケナ山古墳を含む古墳群。多数の円墳、方形周溝墓を調査。推定東山道武蔵路が通過。	52, 58, 82
t	新野古墳群				○		削平。	63, 67
u	上野井古墳群				○		8基を調査。5～6世紀代の比較的古い古墳群。2基で石櫛を確認。	45, 50
ア	長岡城跡				○		堀。益田氏。	24
イ	大光寺跡				○			85
ウ	鳥山塚遺構群				○		鳥山城、鳥山館、鳥山屋敷など。堀。鳥山氏。	24
エ	小金井馬場北館跡				○		東西100m、南北150m。堀。土塁。小金井氏。	25
オ	小金井馬場南館跡				○		東西70m、南北70m。堀。	25
カ	上野井館跡				○		東西100m、南北120m。堀。土塁。	25
キ	生品神社境内				○		新田荘遺跡。国指定史跡。	25
ク	生品神社南中世墓群				○		昭和54年板碑15面、常滑磁器器、五輪塔などが出土。	25
ケ	本郷A館跡				○		東西75m、南北80m。堀。土塁。広瀬氏。	25
コ	本郷B館跡				○		東西70m、南北75～80m。堀。渡来銭出土。中近世陶磁器散布。	25
サ	本郷C館跡				○		東西65～70m、南北70m。堀。土塁。	25
シ	本郷D館跡				○		東西50～60m、南北85m。堀。土塁。	25
ス	本郷D付属館跡				○		規模不明。本郷D館の北東に堀、土塁がある。土塁上に五輪塔。	25
セ	本郷E館跡				○		東西70m、南北60～70m。堀。土塁。高木氏。16世紀か。	25
ソ	本郷F1館跡				○		東西40m、南北60m。堀。	25
タ	本郷F2館跡				○		東西50m、南北60m。土塁。	25
チ	石塚館跡				○		東西100m、南北150m。堀。	25, 30
ツ	通木館跡				○		15世紀を中心とした2時期の方形の館を調査。井戸、溝、ビット多数。	40
テ	杉館跡				○		東西90～90m、南北70m。現存遺構なし。	25
ト	宝蔵寺館跡				○		東西120m、南北170m。堀。土塁。方形の溝とその外周の不整形の溝を調査。	25, 40
ナ	大島館跡				○		東西80m、南北100m。堀。土塁。戦国未か。	25
ニ	村田本郷館跡				○		東西120m、南北100m。堀。土塁が比較的良好に残る。	25
ヌ	反町館跡				○		国指定史跡。鎌倉～戦国。三重堀。	25, 26, 31, 32, 51
ネ	観音免遺跡(脇屋義助館跡)				○			85

参考文献

- 1 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988 『成塚石橋遺跡』
- 2 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990 『太田市八幡遺跡』
- 3 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991 『成塚石橋遺跡Ⅱ』
- 4 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996 『西長岡南遺跡・菅塩西内台遺跡・成塚永昌寺遺跡・成塚石橋遺跡Ⅲ』
- 5 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997 『西長岡南遺跡Ⅱ・Ⅲ』
- 6 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003 『年保遺跡・島山下遺跡』
- 7 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004 『前沖遺跡』
- 8 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006 『西野原遺跡(1)・(2)』
- 9 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 『石橋城久保遺跡』
- 10 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 『大鷲遺跡』
- 11 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008 『成塚山古墳群』
- 12 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008 『西野原遺跡(3)・(4)・馬谷ノ遺跡』
- 13 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008 『菅塩遺跡群』
- 14 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009 『西野原遺跡(5)・(7)第1分冊縄文・弥生時代編』
- 15 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010 『西長岡南遺跡(1)弥生時代以降編』
- 16 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010 『西長岡南遺跡(2)縄文時代編』
- 17 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010 『西野原遺跡(5)・(7)第2分冊飛鳥・平安時代以降編』
- 18 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010 『西野原遺跡(5)・(7)第3分冊古墳時代編』
- 19 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010 『成塚遺跡群』
- 20 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012 『笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡』
- 21 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2011 『年報30』
- 22 群馬県 1986 『群馬県史 資料編2』
- 23 群馬県教育委員会 1974 『太田市八幡遺跡発掘調査報告』
- 24 群馬県教育委員会 1989 『群馬県史の甲斐館跡』
- 25 新田町誌刊行委員会・新田町 1987 『新田町誌・第2巻(資料編(上))』
- 26 新田町教育委員会 1999 『新田町内遺跡Ⅰ』
- 27 新田町教育委員会 2000 『新田町内遺跡Ⅱ』
- 28 新田町教育委員会 2001 『新田町内遺跡Ⅲ』
- 29 新田町教育委員会 2002 『新田町内遺跡Ⅳ』
- 30 新田町教育委員会 2003 『新田町内遺跡Ⅴ』
- 31 新田町教育委員会 2004 『新田町内遺跡Ⅵ』
- 32 新田町教育委員会 2005 『新田町内遺跡Ⅶ』
- 33 新田町教育委員会 1981 『入谷遺跡』
- 34 新田町教育委員会 1984 『上野井赤城南遺跡』
- 35 新田町教育委員会 1985 『入谷遺跡Ⅱ 第2次・第3次(範囲確認)調査報告』
- 36 新田町教育委員会 1987 『入谷遺跡Ⅲ』
- 37 新田町教育委員会 1993 『新田東部遺跡群』
- 38 新田町教育委員会 1994 『境ヶ谷ノ・原宿・上野井Ⅱ遺跡』
- 39 新田町教育委員会 1997 『天良七堂遺跡(第5次調査)』
- 40 新田町教育委員会 1997 『中屋敷・中村田遺跡』
- 41 新田町教育委員会 1999 『松ノ木・梅ノ木・狐矢遺跡』
- 42 新田町教育委員会 1999 『天良七堂遺跡・笠松遺跡』
- 43 新田町教育委員会 2000 『通木遺跡・杉ノ前遺跡』
- 44 新田町教育委員会 2000 『新田東部遺跡群Ⅱ』
- 45 新田町教育委員会 2001 『上野井古墳群・堀原遺跡・中江田A遺跡』
- 46 新田町教育委員会 2001 『境ヶ谷ノ遺跡Ⅱ』
- 47 新田町教育委員会 2002 『市野井・本郷遺跡』
- 48 新田町教育委員会 2002 『入谷遺跡Ⅱ』
- 49 新田町教育委員会 2004 『天良七堂遺跡Ⅱ』
- 50 新田町教育委員会 2005 『上野井遺跡(6・7・10次調査)』
- 51 新田町教育委員会 2005 『反町船跡』
- 52 太田市 1996 『太田市史通史編 原始古代』
- 53 太田市教育委員会 1985 『市内遺跡Ⅱ』
- 54 太田市教育委員会 1994 『市内遺跡Ⅲ』
- 55 太田市教育委員会 1995 『市内遺跡Ⅳ』
- 56 太田市教育委員会 2000 『市内遺跡ⅤⅥ』
- 57 太田市教育委員会 2001 『市内遺跡ⅦⅧ』
- 58 太田市教育委員会 2002 『市内遺跡ⅨⅩ』
- 59 太田市教育委員会 2003 『市内遺跡ⅪⅫ』
- 60 太田市教育委員会 1991 『埋蔵文化財発掘調査年報1』
- 61 太田市教育委員会 1992 『埋蔵文化財発掘調査年報2』
- 62 太田市教育委員会 1993 『埋蔵文化財発掘調査年報3』
- 63 太田市教育委員会 1994 『埋蔵文化財発掘調査年報4』
- 64 太田市教育委員会 1996 『埋蔵文化財発掘調査年報6』
- 65 太田市教育委員会 2008 『太田市内遺跡3』
- 66 太田市教育委員会 2009 『太田市内遺跡4』
- 67 太田市教育委員会 2010 『太田市内遺跡5』
- 68 太田市教育委員会 2011 『太田市内遺跡6』
- 69 太田市教育委員会 2012 『太田市内遺跡7』
- 70 太田市教育委員会 1973 『オクマン山古墳・堂原遺跡E地点緊急発掘調査概報』
- 71 太田市教育委員会 1973 『群馬県大田市堂原遺跡発掘調査報告書』
- 72 太田市教育委員会 1985 『堂原遺跡発掘調査概報』
- 73 太田市教育委員会 1990 『脇屋深町遺跡発掘調査概報』
- 74 太田市教育委員会 1990 『成塚住宅団地遺跡Ⅰ』
- 75 太田市教育委員会 1991 『成塚住宅団地遺跡Ⅱ-1』
- 76 太田市教育委員会 1991 『成塚住宅団地遺跡Ⅱ-2』
- 77 太田市教育委員会 1993 『成塚住宅団地遺跡Ⅱ-3』
- 78 太田市教育委員会 1993 『成塚住宅団地遺跡Ⅱ-4』
- 79 太田市教育委員会 1993 『成塚住宅団地遺跡Ⅲ』
- 80 太田市教育委員会 1999 『唐橋田遺跡発掘調査報告書』
- 81 太田市教育委員会 2008 『天良七堂遺跡』
- 82 太田市教育委員会 2010 『新野脇屋遺跡群発掘調査報告書』
- 83 太田市教育委員会 2010 『天良七堂遺跡2』
- 84 太田市教育委員会 2012 『天良七堂遺跡3』
- 85 群馬県文化財情報システムWE B版

とみられていて、この付近は交通の要衝でもあった。

以上のように本遺跡の周辺は、古代新田郡を理解する上で非常に重要な遺跡が集中している。それらと本遺跡の関連・評価については第7章の総括に譲るが、本遺跡では下新田ルート側溝の延長部と推定される溝と、溝に囲まれた古代の建物群が調査されているのが特に目を引く。なかでも建物群については、郡衙近傍に位置するという環境の中で、どのような性格の施設なのかが目目されるものである。

周辺にはこの時代の集落遺跡も非常に多くみられ、村田・本郷B遺跡(10)、上野井遺跡(11)、中溝遺跡(27)、成塚住宅団地遺跡群(58)など、枚挙に遑がない。それらの中には掘立柱建物が多く存在したり、墨書土器や瓦が

出土する遺跡もあり、郡の中心にふさわしい内容もあって注目される。また、古墳時代に始まった須臾器や鉄生産は、八王子丘陵、金山丘陵の周辺で、この時代にも継続して行われていたことが知られている。

中近世

天仁元(1108)年の浅間山大噴火とAs-B降下後、この地域でも荘園化が進み、有名な新田荘の中心地となった。また、鎌倉時代末には新田義貞の根拠地として知られている。第4図の範囲内でも、多くの館跡や新田義貞挙兵の地とされる生品神社(キ)など、関連遺跡が多く存在し、そのうち生品神社、反町城館跡(ヌ)は国史跡に指定されている。その後室町時代には金山に金山城が築かれ、そ

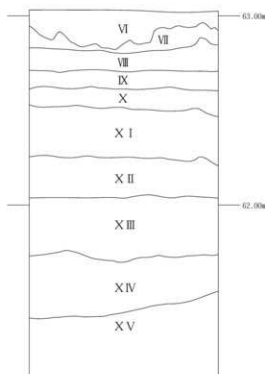
の関連と思われる城館もこの地域に数多く設けられている。

本遺跡と郡庁跡周辺の天良七堂遺跡(3)では、中世にも大規模な溝が掘られているなど、何らかの施設が存在していたようである。それがどのようなものかは今後の調査で解明すべき問題であるが、この付近が中世においても重要な地であったことは間違いない。

第3節 基本土層

基本土層は、今回の調査区のほぼ中央に当たる、笠松遺跡5-2区の北部で実測したものをあげた(第5図)。実測した地点は第2図と第62図に示したとおりである。今回報告する調査区は全域が大開々扇状地内であり、地形的に変化がない。そのため、どの地点でも基本的に同じ土層であるので、この1地点だけを代表してあげたものである。ここでは表土を除去したのちの、ローム漸移層以下の層を示しているが、この上に堆積する層は、大部分の場所では表土と旧耕作土のみみられるだけであり、その間の層が削平されている。もちろん遺構によってはその間の層が削平されずに残っているので、それらをまとめてみると、表土からVI層の間には以下の層があったことが判明する。

- I層 黒褐色土(7.5YR3/2) 現表土。客土、耕作土。
 - II層 黒褐色土(10YR3/2) 砂質。褐色土塊を斑状に含む。近世以後の旧耕作土。
 - III層 暗褐色土(10YR3/3) As-B混土層。中世。
 - IV層 暗褐色砂質土(10YR3/3) As-B堆積層。
 - V a層 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロックを少量含む。粘性、締りあり。古代。
 - V b層 黒褐色土(10YR3/1) 砂質。ロームブロックを僅かに含む。
 - V c層 黒褐色土(10YR3/1) 灰白色シルト質土を斑に含む。
- これらを含めたI~XV層が本調査区の基本土層である。



- 基本土層
- VI層 濃い黄褐色土(10YR5/4) ローム漸移層。黒色土塊を含む。
 - VII層 浅黄褐色粘質土(2.5Y7/4) シルト質土。黒褐色土粒を少量含む。
 - VIII層 明黄褐色粘質土(2.5Y6/6) 粘粒。VII層より粘性あり。As-YP
 - IX層 淡黄褐色粘質土(2.5Y8/3) シルト質土。細粒。粘性強い。
 - X層 明黄褐色粘質土(2.5Y7/6) シルト質土。
 - XI層 灰白色粘質土(2.5Y7/1) 暗褐色土塊を斑に含む。
 - XII層 灰黄白色砂(2.5YR7/2) 細粒砂。火山灰質。
 - XIII層 浅黄褐色土(2.5Y7/3) シルト質土。黒褐色土、小礫を含む。
 - XIV層 濃い黄褐色土(10YR5/3) 砂粒とXIII層の混土。白色粒1% 黄色~黄白色軽石1%以下。
 - XV層 灰白色粘質土(5Y7/1) 礫を多量に含む。

第5図 基本土層

第3章 笠松遺跡の調査の成果

第1節 成果の概要

太田大間々線バイパスの整備事業の関連で調査が行われた笠松遺跡は、県道足利伊勢崎線の南北にまたがり、南に1・2区、北に3～5区がある。そのうち南の1・2区の調査成果は、昨年度に『笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡』として報告済みである。1区の北端では溝に囲まれた掘立柱建物群と基礎状遺構が見つかり、何らかの官衙であると考えられるが、今回報告する3・4区で見ついている溝と掘立柱建物は、その北側部分に相当するものである。

笠松遺跡3～5区で調査した遺構は、掘立柱建物が9棟(ただしこれは建物として把握できた棟数であり、実際にはさらに多かったはずである)、建物として把握できなかったピット74基、礎石の根石と思われるもの2ヶ所、方形の性格不明の遺構(「方形遺構」と呼称した)1基、土坑29基、井戸6基、溝51条、性格不明の落ち込み1ヶ所であり、竪穴住居は見つかっていない。

笠松遺跡3区は狭い調査区であるが、西側に掘立柱建物群の柱穴多数と区画溝の延長部が見つかった。その東側はトレンチ状に細く、土坑1基のみがみられたのみである。柱穴は数多く見つかったものの調査区が狭く、中央に中世の溝が通過しているため、建物として把握できたものは3棟だけであり、その3棟にしても確実性はやや乏しい。ほかに柱穴が数多く存在するので、ここには少なくとも5、6棟の建物が建てられていたらしい。出土遺物は少ないが、柱穴の形状・規模からみても古代のものである。区画溝は笠松遺跡1区で10号溝として調査されたものの延長部であり、これがこの区画の東辺である。

笠松遺跡4区は多くの遺構がある。調査したのは掘立柱建物6棟、ピット29基、礎石の根石と思われるもの2ヶ所、方形遺構1基、土坑13基、井戸3基、溝39条である。掘立柱建物は調査区の南東で見つかり、その回りを4号溝がL字形に廻っていた。この溝がこの区画の北辺、西辺となる。掘立柱建物は北側に2棟、南側に4棟あり、北側は重複がないものの、南側はほぼ同じ位置に4棟が

重複している。1号掘立柱建物は西辺のみの調査なので詳細は不明であるが、西側の2号と並んで建てられており、両方とも総柱建物であると思われる。2号掘立柱建物は2間×3間の総柱建物である。南側の建物は3～6号の4棟が重複している。6号掘立柱建物は柱穴3基しか見つかっておらず、目隠し塀のような施設の可能性がある。3～5号掘立柱建物は位置を変えながら建てられており、3号は2間×2間の総柱建物、4号は2間×2間かそれ以上のいわゆる側柱建物、5号は2間×1間分しか調査区にかからないが、総柱建物であると思われる。3号掘立柱建物の柱穴から土師器の小破片が出土している以外に遺物はないので、詳細な時期は不明であるが、柱穴の規模等から古代のものであることは間違いない。これらの建物が笠松1区で見つかった、溝で囲まれる建物群の北延長部であり、その性格が注目される。

礎石の根石と思われるものは2基で、これが建物の礎石とすれば1棟の建物と思われる。東側が調査区外となって詳細不明であり、また、石の据え方が簡便であって近世以降のものである可能性も考えられる。

溝は数多く調査された。そのうち注目されるのは1号溝と9号溝で、これが推定東山道駅路下新田ルートの南北側溝の延長線上に相当する。ただし、埋土に含まれている火山灰を分析した結果、これらの溝の掘削はAs-降下後であることが判明している。この部分では中世に駅路側溝を掘り直して古代のものを破壊しているらしい。なお、路面は全く残っていないかった。このように、4・5区には中世の遺構が多く存在する。

5区では土坑14基、井戸3基、溝10条、落ち込み1ヶ所、ピット30基を調査した。遺物の出土が少ないので時期を特定できるものはほとんどないが、確実に古代に溯るものは少なく、大部分は中世以降のものである。ピットも中世以降の建物に関わるものと思われる。

なお4区と5区では遺構の調査が終了したのちに旧石器時代の調査を行ったが、いずれの区でも遺構・建物とも見つからなかった。

第2節 笠松遺跡3区

笠松遺跡3区は今回報告する調査区の中では南東隅に位置し、県道足利伊勢崎線に沿って東に長くのびている。調査区は、第6図のように3-1区から3-3区に分けられる。調査した遺構は掘立柱建物3棟、土坑2基、溝2条である。

1 掘立柱建物とピット

3区の調査では、調査区の幅が広がる3-1区で多くのピットを発見した。それらは形状から古代の建物の柱穴と思われるが、調査区が狭いために建物として把握することは困難であった。以下では調査時点で建物として認定した3棟を報告するが、これらも確実に組み合うと断定することはできない。今後隣接地で発掘が行われた際に、再検討が必要である。

1号掘立柱建物(第7図、第5表、PL. 3-1~3)

3-1区の中央付近にある。2号掘立柱建物とは重複関係にあるが、柱穴は直接切り合っていないので、新旧は不明である。P1~4の4基のピットがL字状に並んでいるので建物と考えたが、北側に2号溝が重複している上、調査区が狭いので、全体の形状は不明であり、総柱建物か、いわゆる側柱建物かも分からない。

柱間は柱痕の心一線で計測してP1-P2が1.82m、P2-P3が1.87m、P3-P4が2.00mであり、本来

はP1-P3の辺が6尺等間、P3-P4の辺はやや長く6.5尺で設計されていたものと思われる。建物の方向は、P1-P3を主軸方位として計測するとN-48°-Eである。

柱穴形状はいろいろなものが見られるが、P2のように方形に近いものがあり、これが本来の形状なのではないだろうか。長径が1mを超えるものが多く、かなり大型の柱穴である。いずれも柱痕は明瞭に残っていたが、断面を見ると上部にいくに従って広がる形状のものが多く、柱は抜き取っているらしい。柱痕の径は底部付近で計測して20~30cmである。

遺物はP4から土師器杯椀類の小破片1点が出土しているだけである。

2号掘立柱建物(第7・8図、第6表、PL. 3-1~3)

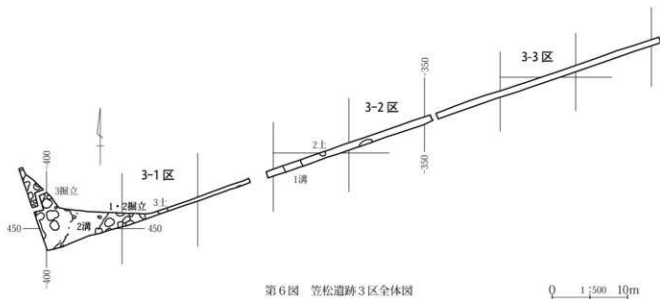
3-1区の中央付近にある。1号掘立柱建物とは重複関係にあるが、柱穴は直接切り合っていないので、新旧は不明である。1号掘立柱建物と同様、P1~P4の4基のピットがL字状に並んでいるのが把握できたが、調

第5表 1号掘立柱建物ピット一覧表(単位はm)

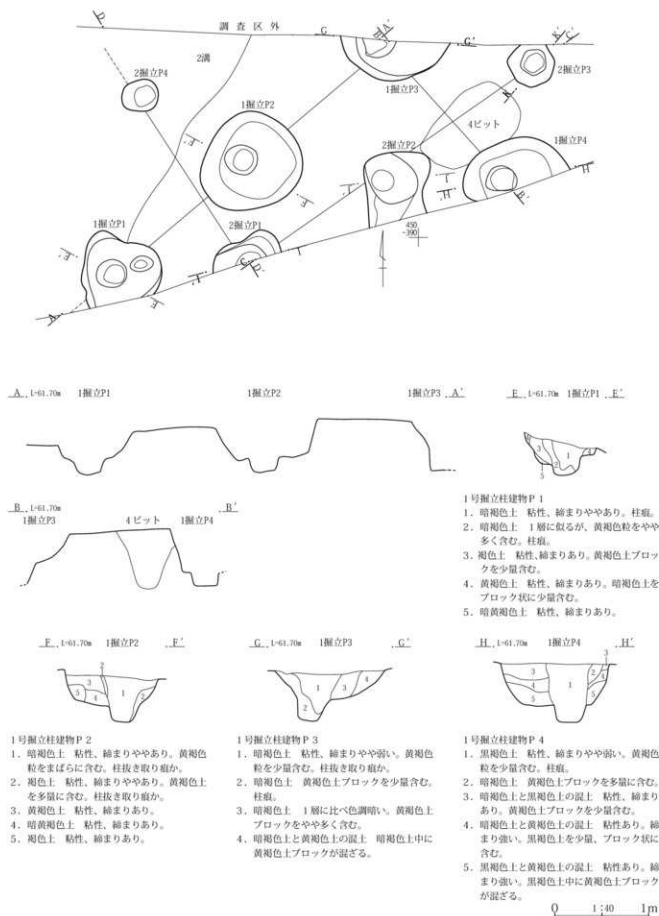
番号	形状	長径×短径	深さ
P1	不整形	0.85×[0.67]	0.49
P2	方形か	1.10×0.98	0.59
P3	円形	1.03×[0.42]	0.58
P4	楕円形	1.12×[0.54]	0.63

第6表 2号掘立柱建物ピット一覧表(単位はm)

番号	形状	長径×短径	深さ
P1	不整形	0.76×[0.23]	0.48
P2	不整形	[0.72]×0.59	0.73
P3	円形	0.50×0.46	0.49
P4	円形	0.40×0.34	0.32

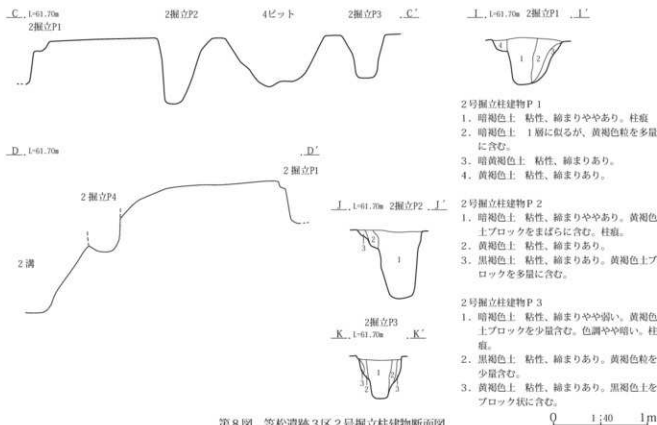


第6図 笠松遺跡3区全体図



第7図 笠松遺跡3区1・2号掘立柱建物平面図、1号掘立柱建物断面図

第3章 笠松遺跡の調査の成果



第8図 笠松遺跡3区2号独立柱建物断面図

査区が狭く2号溝とも重複しているので、全体形状などは不明である。

柱通りはやや悪く、P1-P3の辺は一直線にならない。柱間は柱痕の心-心で計測して、P1-P2が1.65m、P2-P3が2.04m、P1-P4が2.08mなので、ややズレが大きい。P1-P3が5.5尺+7尺、P1-P4が7尺で設計されていたと考えられる。建物の方位は、P1-P3を計測して、N-55°-Eである。

柱穴形状は一定しないが、本来はP3のような円形に近い形状だったと考えられる。P2が南側に広がった形状なのは、何らかの掘り込みが重複しているのではないだろうか。

遺物の出土はない。

3号独立柱建物(第9図、第7表、PL. 3-4~6)

3-1区西端部にある。この建物もP1-P4の4基のピットがL字状に並んでいるが把握できたものであるが、やはり調査区外に延びることと2号溝に重複することなどで全体の形状は不明である。P1-P3の南延長部には、2号溝に重複してピットのような遺構があるが、柱筋からややはずれるため、この建物の柱穴ではないと

判断した。P1には25号ピットが重複するが、新旧関係は不明である。

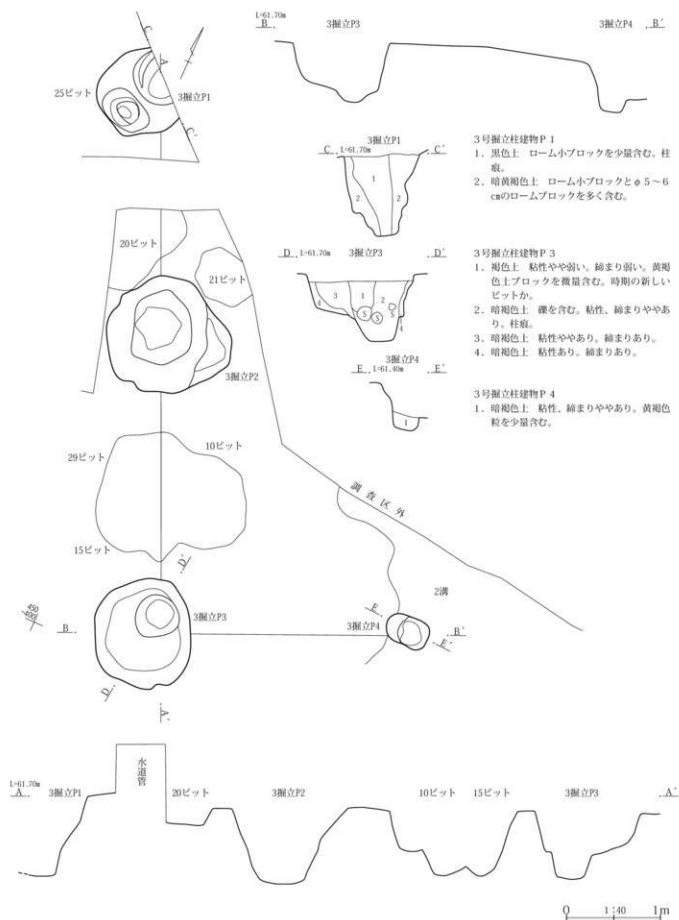
柱間は柱痕の心-心で計測してP1-P2が2.55m、P2-P3が3.03m、P3-P4が2.66mなので、P1-P3の辺は8.5尺+10尺、P3-P4は9尺で設計されていたと考えられる。かなり柱間が広い建物である。建物の方位はP1-P3で計測してN-24°-Wである。

柱穴形状は不揃いであるが、P3のように方形に近いものが本来の形状であったと考えられる。2号溝と重複するP4を除いて径が1m前後の大きな柱穴であり、柱間の広さと共に、かなり大規模な建物であったことを窺わせる。

遺物はP2から土師器の小破片(器種不明)2点、須恵器杯碗類の小破片3点が出土しているだけである。

第7表 3号独立柱建物ピット一覧表(単位はm)

番号	形状	長径×短径	深さ
P1	円形	0.92×(0.74)	0.87
P2	不物円形	1.35×1.22	0.82
P3	方形	1.16×1.01	0.73
P4	楕円形	0.47×0.30	0.51



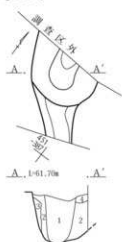
第9図 笠松遺跡3区3号掘立柱建物平面図

第3章 笠松遺跡の調査の成果

3区には、掘立柱建物として把握できたもののほかにも、ピットが多数存在する。それらも形状・大きさからみてすべて古代の柱穴と考えられるが、調査区が狭いこともあり、今回は無理に組み合わせることは控えた。ただし調査区西辺に沿って並ぶピット、すなわち、11・12・22・24・26・27の5基のピットは、西半部が調査区

外となるので全形が不明ではあるものの、ほぼ直線的に並ぶので、組み合わせものである可能性が高いが、それぞれの柱穴の間隔が狭いので、複数の建物が重複しているものと考えられる。柱穴が並ぶ方向が3号掘立柱建物の方向と近いのは注目すべき点である。3号掘立柱建物との距離が近いので、これらの建物と3号掘立柱建物と同

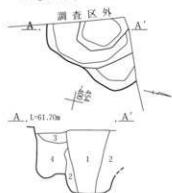
1号ピット



1号ピット

1. 黒褐色土 粘性、締まりやや弱い。黄褐色粒を少量含む。柱痕。
2. 黒褐色土 粘性強い。締まりあり。黄褐色土ブロックを多量に含む。
3. 暗黄褐色土 粘性強い。締まりあり。黒褐色土をブロック状に含む。
4. 黄褐色土 粘性、締まりあり。

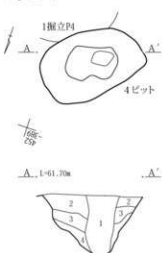
20号ピット



20号ピット

1. 黒褐色土 粘性、締まりややあり。黄褐色粒を少量含む。柱痕。
2. 黒褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色土ブロックをやや多く含む。
3. 黒褐色土と黄褐色土の混土 粘性、締まりあり。
4. 黒褐色土と黄褐色土の混土 3層に似るが黄褐色土の割合が多い。

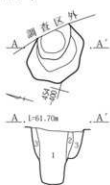
4号ピット



4号ピット

1. 暗褐色土 粘性、締まりややあり。黄褐色粒を微量含む。柱痕。
2. 褐色土 粘性、締まりややあり。黄褐色土ブロックを少量含む。
3. 暗褐色土 粘性、締まりややあり。黄褐色土ブロックを少量含む。
4. 暗褐色土 粘性、締まりあり。色調が全体的に暗い。

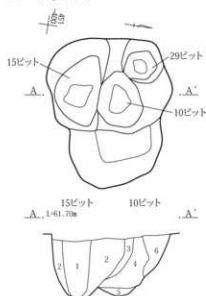
21号ピット



21号ピット

1. 黒褐色土 粘性、締まりややあり。黄褐色粒を少量含む。柱痕。
2. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりあり。
3. 暗褐色土と黄褐色土の混土 粘性、締まりあり。

10・15号ピット



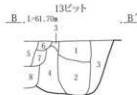
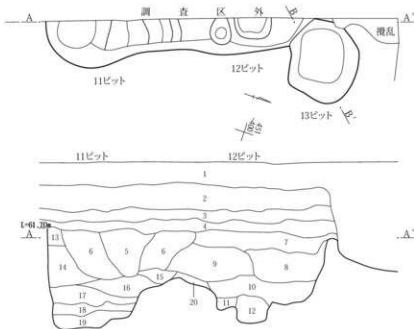
10・15号ピット

1. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりやや弱い。黄褐色粒を微量含む。15号ピット柱痕。
2. 暗褐色土 粘性、締まりややあり。黄褐色粒を少量含む。15号ピット。
3. 暗褐色土 2層に似るが、締まりあり。15号ピット。
4. 暗黄褐色土 大量のロームブロックを含む。10号ピット柱抜き取り痕。
5. 黒褐色土 締まりあり。ロームブロックを少量含む。10号ピット。
6. 黒褐色土 黒色土を基本とし、φ2~3cmのロームブロックを少量含む。



第10図 笠松遺跡3区1・4・10・15・20・21号ピット平面断面図

11～13号ピット



13号ピット

1. 黄褐色土 粘性ややあり。締まりあり。柱痕。
2. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりあり。柱痕。
3. 暗褐色土 粘性。締まりあり。
4. 暗黄褐色土 ローム土をわずかに含む。
5. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりあり。φ5 cmのロームブロックを含む。12号ピットの上層のピット。
6. 暗褐色土 粘性。締まりあり。12号ピットより新しいピット。
7. 暗褐色土 6層に似るが、黄褐色土を含む。12号ピットより新しいピット。
8. 黄褐色土と黒褐色土の混土。12号ピット。

11・12号ピット

1. 表土 砕石層。
2. 暗褐色土 現代の掘乱層。ビニール片を含む。
3. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりあり。
4. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりあり。黄褐色粒を少量含む。3層より色調明るい。
5. 暗褐色土 粘性あり。締まりやや弱い。黄褐色粒を少量含む。11号ピットより新しいピットの柱痕。
6. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりあり。黄褐色土ブロックを多量、黒色土をブロック状に少量含む。11号ピットより新しいピット。
7. 暗褐色土 粘性。締まりややあり。黄褐色粒を含む。12号ピットよりも新しいピット。
8. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりあり。φ5 cmのロームブロックを含む。12号ピットより新しいピット。
9. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりあり。黄褐色粒を少量、黒褐色土をブロック状に含む。色調暗い。12号ピット。

10. 黄褐色土と黒褐色土の混土。12号ピット。
11. 暗黄褐色土 粘性。締まりあり。黒褐色土をブロック状に含む。12号ピット。
12. 暗褐色土 粘性。締まりあり。色調は全体的に暗い。12号ピット柱痕か。
13. 暗褐色土 湿りけが少ない。11号ピット。
14. 暗黄褐色土 黒色土ブロック、黄褐色土ブロックを含む。11号ピット。
15. 黄色ローム土 地山のロームの崩れた土。11号ピット。
16. 暗褐色土 粘性。締まりあり。黒褐色土をブロック状にまばらに含む。11号ピット。
17. 暗黄褐色土 粘性。締まりあり。黄褐色土ブロックをまばらに含む。11号ピット。
18. 黒褐色土 粘性。締まりあり。層状に堆積している。11号ピット。
19. 暗黄褐色土 粘性。締まりあり。黄褐色土ブロックを多量に含む。11号ピット。
20. 黄褐色ローム土

0 1:40 1m

第11図 笠松遺跡3区11～13号ピット平面図

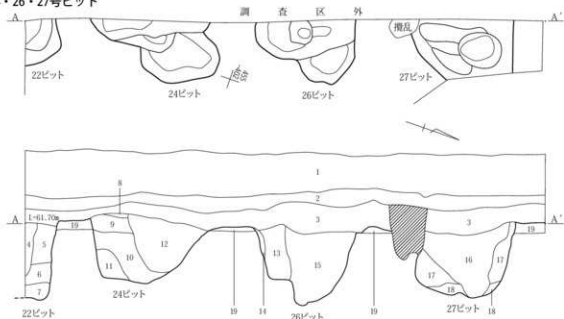
時存在とは思えないし、11号ピットと12号ピットのように新旧関係にあるものもあり、さらに11・12号ピットに重複して、より浅いピットが2時期分あることが判明している(第11図断面図参照)。これらを総合すると、この付近では少なくとも5時期の建物が存在することになる。つまり3区西端付近では、主軸方位がほぼ共通する建物が、少しずつ位置を変えながら建てられ続けたのである。ピットのうち重複関係にあるのは、10・15号(15号が新しい)、10・29号(図示していないが、10号が新しい)、11・12号(12号が新しい)、12・13号(12号が新しい)であり、25号は3号掘立柱建物P1と重複するもの新旧不明である。

各ピットの規模は第8表のとおりである。形状には

第8表 笠松遺跡3区ピット一覧表(単位はm)

番号	形状	長径×短径	深さ
1	楕円形	0.51×0.73	0.61
4	楕円形	1.08×0.67	0.67
10	不明	1.02×0.79	0.70
11	楕円形	1.36×0.50	1.01
12	方形か	1.68×0.37	0.77
13	方形か	0.90×0.71	0.67
15	不明	0.98×0.87	0.70
20	不整形	0.87×0.77	0.67
21	不整形	0.67×0.51	0.62
22	不整形	0.47×0.32	0.83
24	不整形	1.37×0.65	0.73
25	楕円形か	0.77×-	0.46
26	不整形	1.05×0.66	0.83
27	不整形	1.08×0.62	0.96
29	不明	-	0.54

22・24・26・27号ピット



22・24・26・27号ピット

1. 表土 暗褐色土。
2. 暗褐色土 粘性やや弱い。締まりあり。全体的に黒みがかかる。
3. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりあり。黄褐色粒を少量含む。
4. 暗褐色土 粘性。締まりややあり。22号ピット柱痕。
5. 暗褐色土 粘性。締まりあり。黄褐色土ブロックを少量含む。22号ピット。
6. 褐色土 粘性。締まりあり。22号ピット。
7. 黒褐色土 粘性。締まりあり。22号ピット。
8. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりあり。色調の明るい黄褐色土を少量含む。24号ピット。
9. 暗黄褐色土 粘性ややあり。締まりあり。暗褐色土を少量含む。24号ピット。
10. 暗褐色土 粘性。締まりあり。黄褐色土ブロックを微量含む。24号ピット。

11. 暗褐色土 10層に似るが黄褐色土ブロックをより多く含む。24号ピット。
12. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりあり。黄褐色土ブロックを少量含む。24号ピットより新しいピットか。
13. 黒褐色土 粘性。締まりあり。上部に黄褐色土ブロックを多く含む。26号ピット。
14. 暗黄褐色土 粘性。締まりあり。26号ピット。
15. 暗褐色土 粘性。締まりあり。黄褐色土ブロックを少量含む。26号ピット柱抜き取り前か。
16. 暗褐色土 粘性。締まりあり。黄褐色土ブロックを少量含む。27号ピット柱抜き取り前か。
17. 暗褐色土 粘性。締まりあり。黄褐色土ブロックをやや多く含む。27号ピット。
18. 暗褐色土 17層に似るが、黄褐色土ブロックをより多く含む。27号ピット。
19. 褐色土 地山。

0 1:40 1m

第12図 笠松遺跡3区22・24・26・27号ピット平断面図

様々なものがあり、一定しないが、大きさは径1m前後のものも多く、1～3号掘立柱建物と同様、かなり大規模な建物に伴うものと思われる。

断面図に見るように、柱痕は大部分の柱穴で観察することができる。抜き取りを確認できるものは少ないが、26号、27号は柱痕が太く、上にいくに従って広がっているので、抜き取り痕と考えられる。

出土遺物はほとんどなく、土器・瓦の小破片がわずかに見られるだけである。遺物が出土したピットは、12号(土師器杯椀類1点、瓦1点)、14号(土師器杯椀類1点、同表類2点)、15号(土師器杯椀類1点、須恵器杯椀類2点)、21号(土師器器種不明1点)、25号(土師器杯椀類2点、同器種不明1点)である。

2 土坑

3区で調査した土坑は2基である(1号土坑は攪乱であることが判明したため欠番)。いずれも調査区境にかり、調査区外になる部分が多い。

2号土坑(第13図、Pl. 3-7)

3-2区の西半部にあり、北半部が調査区外となる。平面形は不整な楕円形と考えられ、規模は長径0.57m以上、短径0.73m、深さは0.22mである。出土遺物はなく、土層にも特徴的なものがないので、時期・用途とも不明である。

3号土坑(第13図、PL. 3-8)

3-1区中央付近にあるが、この部分は調査区の幅が狭く、南北両端が調査区外となる。平面形は不整な円形と考えられ、規模は調査区にかかる部分の最大径が1.10m、深さは0.51mである。土師器類の小破片1点が出土しているのみで時期は不明である。埋土にも特徴的なものはなく、用途も明らかではない。

3 溝

溝は2条調査したが、いずれもわずかな長さが調査区にかかっているだけである。

1号溝(第14図、PL. 4-1・2)

3-2区西端付近にある。この付近は調査区が狭いので、わずか0.95m分が調査できたにすぎないが、県道足利伊勢崎線の南側で調査した笠松遺跡1区10号溝の延長線上にあり、同一の溝と考えられる。この溝は掘立柱建物群の四圍を囲む区画溝のうちの東辺に当たると思われるので、本遺跡の性格を考える上できわめて重要な遺構である。

上幅は2.38～2.59m、底面幅は0.72～1.00m、深さは最も深いところで0.87mである。走行方向は、今回調

査した部分のみでは狭いので、県道南の部分も含めて計測すると、N-28°-Wである。

溝の断面形は逆台形形で、3～5層は掘り直しの可能性が考えられ、また、上層にはAs-B(4層)が1次堆積している。これらの特徴は笠松遺跡1区10号溝と共通し、これも本溝が10号溝の延長部と考える根拠である。

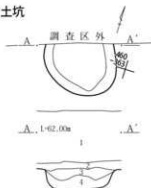
出土遺物は土師器類の小破片が1点出土しているだけであるが、笠松遺跡1区では8世紀後半～9世紀の土器が出土しており、これが本溝の機能していた時期を示すと思われる。

2号溝(第14図、PL. 4-3・4)

3-1区の西半部にある。この部分は3区の中でも広い部分に当たるので、約6m分を調査することができた。県道南で調査した笠松遺跡2区1号溝の延長線上にあり、規模・土層が似ているので、その延長部分と考えられ、さらに太田市教育委員会が調査した、H22-14トレンチの22号溝ともつながるものと思われる(太田市教育委員会『天良七堂遺跡3』2012)。

上幅は別の遺構が入っているために不明な部分が多いが、北半部で計測して3.92mである。底面は湧水のため北端部のみトレンチ状に掘り下げたが、この部分で幅を

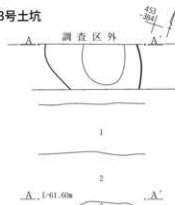
2号土坑



2号土坑

1. 表土 耕作土、暗褐色土。
2. 暗褐色土 粘性、締まりややあり。
3. 暗褐色土と黄褐色土の混土 粘性、締まりあり。
4. 黄褐色土 暗褐色土をブロック状に少量含む。粘性、締まりあり。

3号土坑



3号土坑

1. 碎石層
2. 攪乱土 暗褐色土。ビニール片を含む。
3. 暗褐色土 粘性、締まりあり。
4. 黒褐色土 粘性、締まりあり。
5. 黒褐色土 暗褐色土をブロック状に少量含む。粘性、締まりあり。

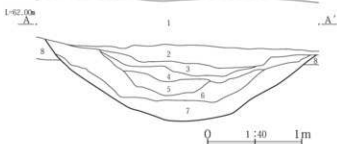
第13図 笠松遺跡3区2・3号土坑平面図

1号溝



1号溝

1. 表土 耕作土。暗褐色土。
2. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりやや強い。1層よりも色調暗い。
3. 暗褐色土 As-B混土層。
4. As-B
5. 黒褐色土 粘性。締まりややあり。黄褐色粒を微量含む。
6. 暗褐色土 粘性。締まりややあり。
7. 暗黄褐色土 粘性。締まりあり。
8. 地山

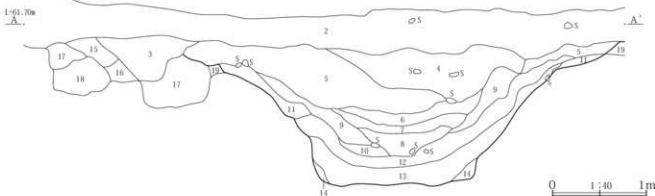


2号溝



2号溝平面図

0 1:100 5m



2号溝

1. 碎石層
2. 現代攪乱土 暗褐色土。ビニール片を含む。
3. 現代攪乱土 暗褐色土。
4. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりあり。ややザラつきあり。φ1~20cmの川原石を大量に含む。
5. 暗褐色土 粘性。締まりあり。ザラつきは4層より強い。礫は1層より少ない。
6. 暗褐色土 粘性。締まりあり。ザラつき強い。
7. 暗灰褐色土 粘性やや強い。締まりあり。
8. 暗灰褐色土 7層に似るが色調暗い。黄褐色粒を微量含む。
9. 暗褐色土 6層に比べ色調暗い。粘性ややあり。締まりあり。黄褐色粒を少量含む。

10. 暗褐色土 9層に似る。黄褐色土ブロックを多量に含む。
11. 褐色土 粘性。締まりあり。黄褐色土ブロックを多量に含む。
12. 褐色土 11層に似るが、黄褐色土ブロックを含み、黄褐色粒を少量含む。
13. 暗褐色土 粘性強い。締まりややあり。
14. 暗灰褐色土 粘性強い。締まりあり。
15. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりあり。黄褐色粒を多量に含む。
16. 暗黄褐色土 粘性ややあり。締まりあり。黄褐色粒を多量に含む。
17. 黒褐色土 粘性。締まりあり。黄褐色粒を少量含む。
18. 黒褐色土 17層に似るが、黄褐色土ブロックを少量含む。
19. 地山

第14図 笠松遺跡3区1・2号溝断面図



第15図 笠松遺跡3区遺構外出土の遺物

復元すると1.35mである。深さは北端のセクションを計測した部分で1.54mである。走行方向は、県道南の部分も含めて計測すると $N-26^{\circ}-E$ であり、直線的に伸びている。

断面形状は逆台形で、土層をみると笠松遺跡2区の部分と同様、2回の掘り直しが認められる。9～14層が埋まったあと、6～8層の掘り直しがあり、さらにその後4・5層の浅い掘り直しがある。

遺物はいずれも小破片で、須恵器甕類1点、近現代の土器類2点が出土したのみであり、時期を明確に示すようなものはなかった。笠松遺跡2区の部分では江戸時代の皿、焙烙のほか、古代の瓦、土器の小破片が出土していて、中世～近世の溝と考えられているので、本溝もそれと同様と考えられる。今回の調査で出土した近現代の遺物は混入であろう。

4 遺構外出土の遺物

遺構外出土の遺物として掲載したのは砥石1点である。その他小破片として、土師器杯碗類7点、同表壺類5点、同器種不明19点、須恵器杯碗類33点、同表壺類15点、中世在地系土器1点、近世国産施釉陶器1点、縄文時代の砥石1点が出土している。

第3節 笠松遺跡4区

笠松遺跡4区は県道足利伊勢崎線のすぐ北側に位置する。平成21年度に県道南で行われた調査(笠松1区)によって溝に囲まれた古代の建物群が発見され、その北側部分が本調査区内に伸びていると想定されること、推定東山道駅路下新田ルートの延長線上に本調査区が位置していることなどで、重要な遺構が存在するものと予想されていた。発掘調査では予想に違わず多くの遺構が見つかっている。

1 掘立柱建物とピット

調査区の南東部で多くの柱穴が見つかり、調査の結果以下の6棟の建物を把握することができた。建物の時期は出土遺物がほとんどないので特定できないが、県道南の笠松遺跡1区の掘立柱建物と同様、8～9世紀を中心とした古代のものと思われる。また、これらの掘立柱建物以外に、29基のピットが見つかっていて、それらは古代から中世の掘立柱建物のものと思われるため、続けて報告する。

1号掘立柱建物(第16図、第9表、PL. 8-1・2)

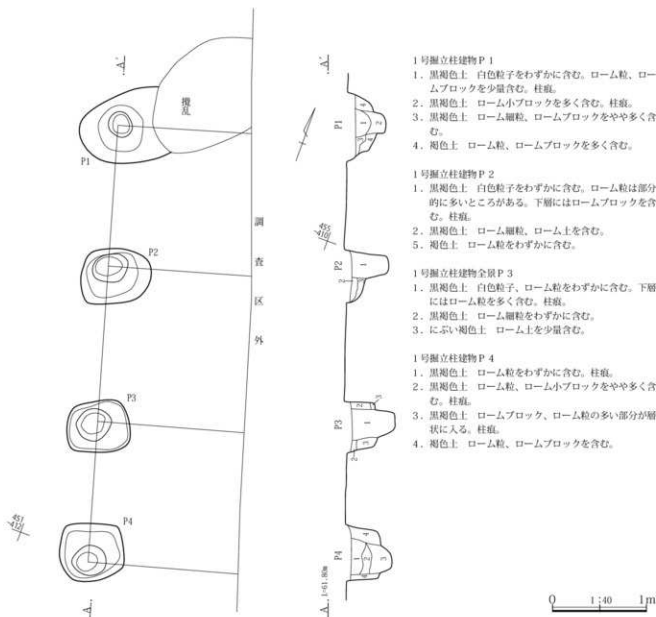
4区の調査区東辺近くにある。P1～4の4基の柱穴が直線に並んでいることから、第16図のように、これが建物の西辺であると判断したものである。

P1～P4の長さは柱痕の心一線で計測して4.65mである。柱間はP1～P2が1.52m、P2～P3が1.66m、P3～P4が1.47mであり、中央間がやや広い。5尺+5.5尺+5尺で設計されていたと思われる。東側の柱穴は調査区内で見つからないので、この方向の柱間はさらに広いものと思われる。東西方向の柱間が広いのは、西隣で見ついている2号掘立柱建物も同様である。建物の方位は $N-16^{\circ}-W$ である。

柱穴の形状はP1を除いて方形あるいは方形に近い

第9表 1号掘立柱建物ピット一覧表(単位はm)

番号	形状	長径×短径	深さ
P1	楕円形	[0.79]×0.72	0.41
P2	方形か	0.75×0.58	0.47
P3	方形	0.67×0.54	0.51
P4	方形	0.68×0.61	0.47



第16図 笠松遺跡4区1号掘立柱建物平面図

形である。建て替えなどの痕跡は認められなかった。P1が楕円形なのは、攪乱と重複して壊されてしまったからであろう。各柱穴はさほど深くないが、柱痕は明瞭である。明らかな抜き取り痕は見られなかった。柱痕は円形で、直径は底部近くで計測して34～39cmである。柱の通りはよい。

西隣の2号掘立柱建物とは主軸方向が近く、南辺、北辺の柱筋をほぼ揃えて平行して建てられている。さらに、南北に比べて東西の柱間が広いという特徴も共通する。中央間が広いという点は相違するが、以上の共通点からみて建物の構造はほぼ同じである可能性が高い。とすれば、桁行3間、梁行2間の総柱の南北棟になるものと思

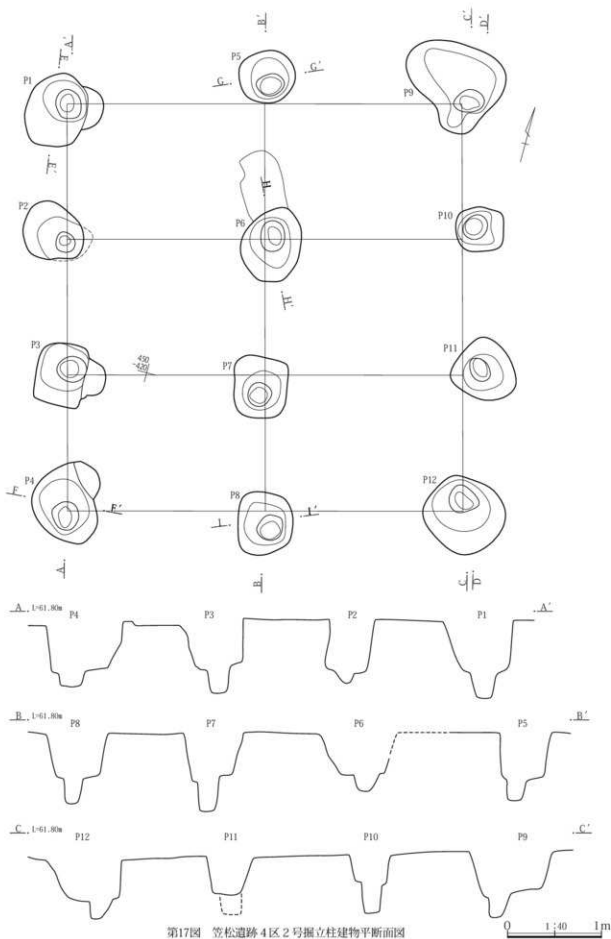
われ、同時期かきわめて近い時期のものであろう。

遺物の出土はない。

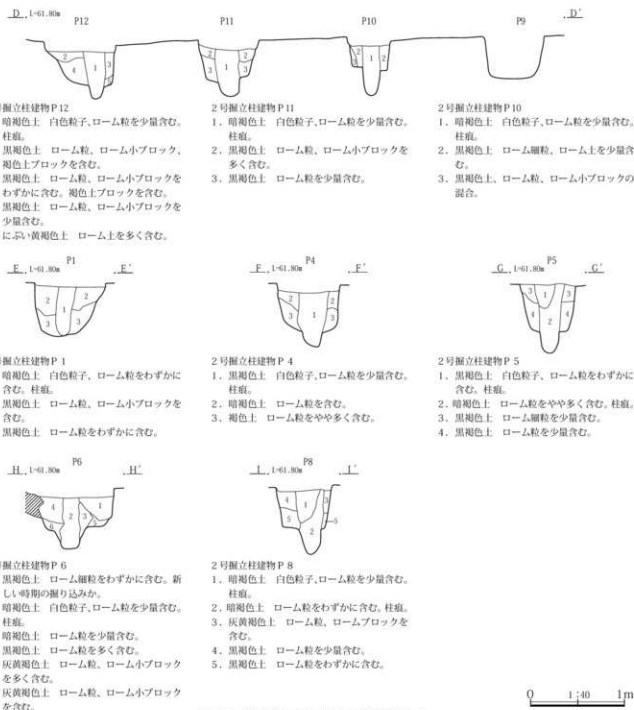
2号掘立柱建物(第17・18図、第10表、PL. 8-3・4)

先述のように1号掘立柱建物の西側にある。桁行3間、梁行2間の総柱の南北棟である。柱の通りがやや悪いが、第17図のような建物を想定した。桁行は4.8尺等間で4.32m、梁行は7尺等間で4.20mであり、平面形は正方形に近い建物となる。南北の妻の中央の柱がやや外側にはみ出すのが特徴的である。主軸方向はN-15°-Wであり、1号掘立柱建物に近い。

柱穴は深く、柱痕も非常に明瞭である。各柱穴の形状



第3章 笠松遺跡の調査成果



第18図 笠松遺跡4区2号掘立柱建物断面図

は、不整形のものもあるが本来は方形であったと考えられる。柱痕は円形で、径は20～33cmである。断面を実測した面でははっきりしなかったが、P1・3・4の3基では東側に抜き取り痕と思われる膨らみが見られるので、西の側柱は東に向かって柱を抜き取った可能性が高い。その他の柱穴では抜き取り痕を確認できなかった。

いずれの柱穴でも建て替えの痕跡は確認できないので、1時期のものであると思われる。

先述のように建物の規模や方位に共通点が見られ、位

第10表 2号掘立柱建物ビット一覧表(単位はm)

番号	形状	長径×短径	深さ
P1	方形か	0.79×0.79	0.85
P2	不整形円形	0.70×0.59	0.70
P3	方形	0.73×0.65	0.75
P4	方形か	0.81×0.79	0.69
P5	円形	0.60×0.57	0.73
P6	不整形	0.80×0.63	0.68
P7	方形	0.66×0.57	0.85
P8	方形	0.67×0.59	0.76
P9	不整形	1.08×0.90	0.73
P10	方形	0.51×0.47	0.62
P11	不整形	0.67×0.61	0.62
P12	方形か	0.80×0.77	0.64

置も揃っていることから、1号掘立柱建物と同時期かきわめて近い時期のものであると思われる。

出土遺物はない。

3号掘立柱建物(第19～21図、第11表、PL. 8-5・6)

3～6号の4棟の掘立柱建物は、4区南東隅で重複して見つかったものである。この場所では多くの柱穴が見られ、複数の時期の掘立柱建物が重複しているものと思われたが、調査時には各建物を明確に確認することができず、重複関係も把握することができなかった。以下に報告する3～6号各掘立柱建物は、整理作業の過程で平面図から復元したものである。そのため、新旧関係も明示することができなかった。

3号掘立柱建物は第19図に太線で示したものである。調査区内では9基の柱穴が見られ、2間×2間の総柱の建物に復元できるが、さらに東側に延びる可能性も当然考えられる。柱穴は、南北方向の3基ずつが、布掘り状の浅い掘り込みでつながっている形状である。柱穴それぞれの形状は不明確なものが多いが、P3のように明らかに方形のものがあるので、本来は方形の柱穴を南北方向の浅い布掘りでつないだ形態であったと思われる。ただし東側の3基については、次に述べる4号掘立柱建物の柱穴と重複してしまっているので、現在みることでできる柱穴がそのどちらのものなのかは不明であり、この点で注意が必要である。

建物の規模は柱の通りがやや悪いので不正確ではあるが、南北3.60m、東西4.80mからそれ以上の東西棟と思われる。柱間は、桁行は西側から8.5尺+7.5尺、梁行は北から6.7尺+5.3尺で設計されていたと思われるが、特に梁行に端数が出ている(合計すると12尺の完数となる)のでやや疑問があり、断定はできない。梁行の柱間で北側が広くなっているのは、以下に述べる4、5号掘立柱建物でも同様であり、この復元が正しいとすれば、これがこの位置に建てられる建物の特徴であると思われる。建物の方位はN-70°-Eである。

各柱穴は深く、底面に明瞭な柱痕が残っている。柱痕は円形で、径はP9を除いて24～40cmである。P9は柱痕の径が大きいが、これはやや掘り過ぎか、あるいは4号掘立柱建物と重複しているために大きくなってしまったものと考えられ、これは除外して考えた方がよい

であろう。

出土遺物は土師器杯椀類が1点出土しているが、小破片のため掲載しておらず、また、これのみでは時期の特定はできない。

4号掘立柱建物(第19～21図、第11表、PL. 8-5・6)

第19図に細線で示したもので、3号掘立柱建物の内側にある。先述のように東辺が3号掘立柱建物と重複している。調査区内では2間×2間のいわゆる側柱建物に復元できるが、東側にさらに延びている可能性もある。その場合はP7と想定している柱穴はなかったことになるであろう。

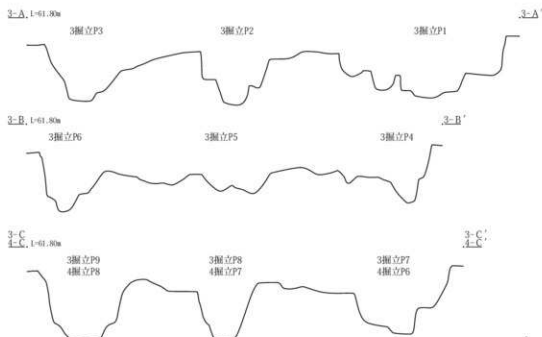
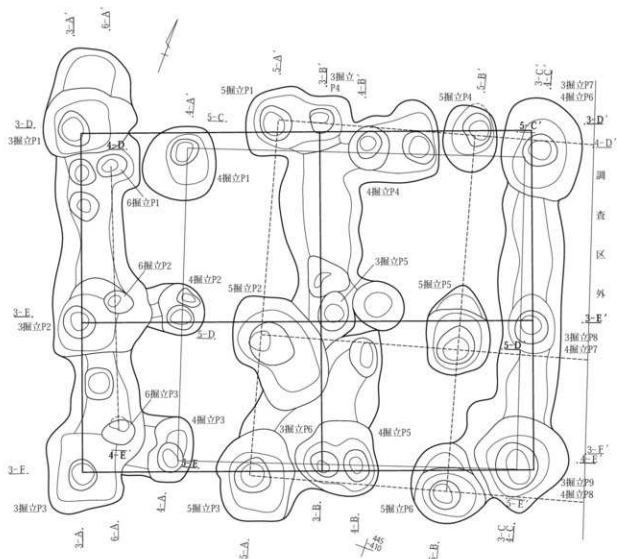
建物の規模は南北3.30m、東西3.60mのやや正方形に近い東西棟に復元できる。柱間は桁行は6尺等間、梁行は北から6尺+5尺で設計されていたと復元でき、先述の通り北側が広いのが特徴である。建物の方位はN-71°-Eである。

各柱穴の形状はやや不整形が多いが、他の柱穴との重複のために形が崩れてしまった可能性があり、本来は方形であったと思われる。いずれも深く、底面の柱痕は明瞭である。柱痕は円形で、径はP8(3号掘立柱建物のP9)を除いて25～37cmである。

出土遺物はない。

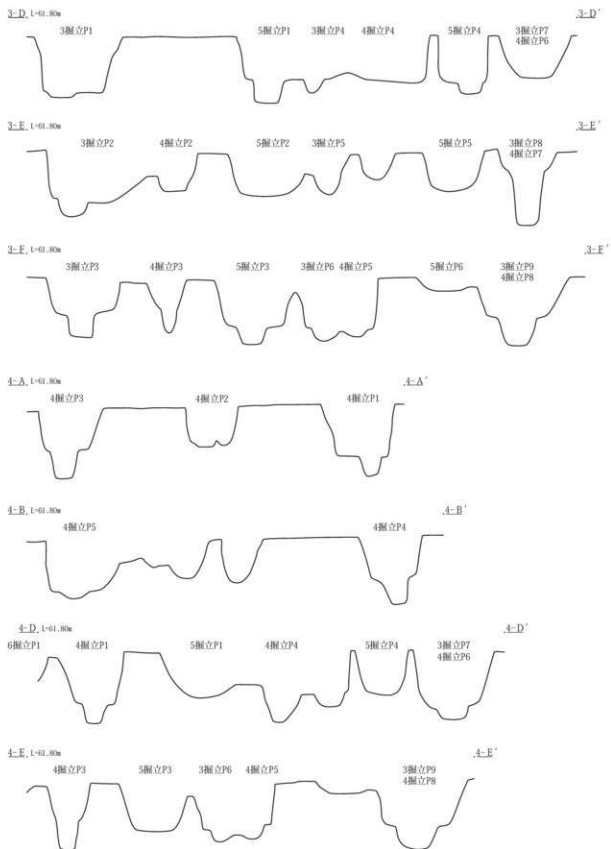
第11表 3～6号掘立柱建物ビット一覧表(単位はm)

番号	形状	長径×短径	深さ
3掘立P1	方形か	1.00×[0.69]	0.62
3掘立P2	方形か	[1.06]×[0.80]	0.66
3掘立P3	方形	[0.86]×[0.78]	0.64
3掘立P4	方形か	-×[0.60]	0.60
3掘立P5	不明	-	0.50
3掘立P6	不明	-×[0.74]	0.61
3掘立P7	方形か	[1.04]×0.86	0.72
4掘立P7	不明	[0.62]×0.64	0.77
3掘立P9	方形か	[1.04]×[0.95]	0.73
4掘立P8	不明	-	-
4掘立P1	方形か	0.80×0.78	0.74
4掘立P2	円形	0.56×[0.46]	0.41
4掘立P3	方形か	0.70×[0.46]	0.71
4掘立P4	方形か	0.69×-	0.70
4掘立P5	方形か	[0.80]×-	0.61
5掘立P1	方形	0.70×-	0.72
5掘立P2	不整形	[1.31]×[0.84]	1.07
5掘立P3	方形	[0.98]×[0.84]	0.68
5掘立P4	楕円形	0.70×0.58	0.63
5掘立P5	方形	0.96×0.68	0.55
5掘立P6	円形	0.85×[0.72]	0.56
6掘立P1	方形か	-	0.46
6掘立P2	不明	-	0.76
6掘立P3	不明	-	0.64



第19図 笠松道跡4区3～6号掘立柱建物断面図

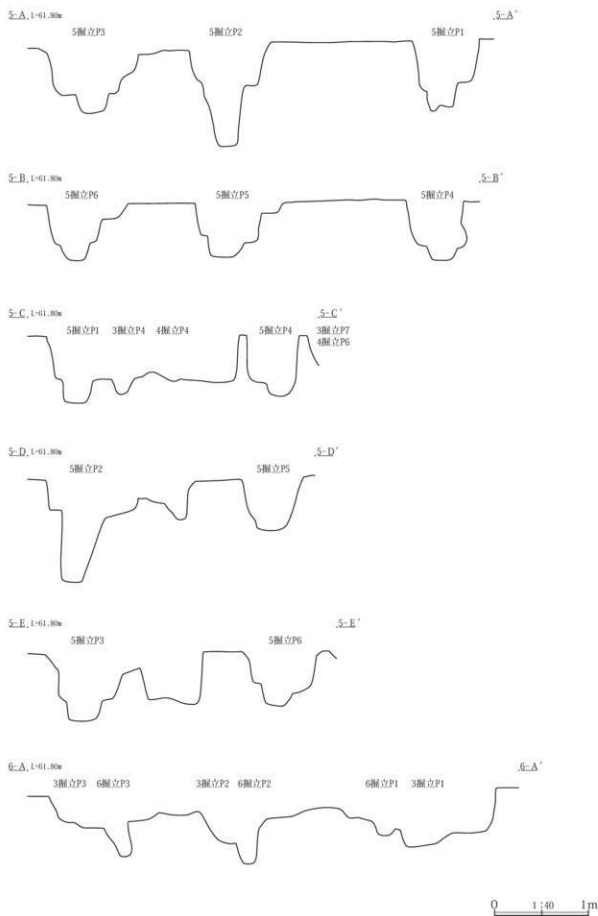
0 1:40 1m



第20図 笠松遺跡4区3～6号掘立柱建物断面図

0 1:40 1m

第3章 笠松遺跡の調査の成果



第21図 笠松遺跡4区3～6号掘立柱建物断面図

5号掘立柱建物(第19～21図、第11表、PL. 8-5・6)

第19図に破線で示したものである。調査区内では6基の柱穴で南北2間、東西1間分しかないが、東側は調査区外へと延びていると思われ、3号掘立柱建物と同様、総柱の東西棟になるものと推定される。建物の規模は南北(この方向を梁行と推定)3.78m、東西(同じく桁行と推定)3.56m以上である。柱の通りはよく、柱間は桁行が7尺、梁行が北から7.6尺+5尺で設計されていたと復元でき、やはり北側が広い。建物の方位はN-75°-Eである。

各柱穴の形状は、円形のものもあるが方形に近いものが大部分であり、本来方形であったものと考えられる。いずれも深く、底面に明瞭な柱痕が残っている。柱痕の径は28～50cmである。P5とP6の柱穴には、北側に広がったような跡があり、あるいは柱を北側に倒して抜き取っているのかもしれない。

出土遺物はない。

6号掘立柱建物(第19～21図、第11表、PL. 8-5・6)

第19図に一点鎖線で示したものである。3号掘立柱建物P1～P3の布掘りの中に、柱痕と思われる3基のピットが、一列に並んでいることから建物と認定したものであるが、それ以外の柱穴が見つからないため、建物と断定するには疑問があり、目隠し堀のようなものの可能性の方が高いと思われる。

P1からP3の長さは2.80mであり、4.7尺+4.7尺で設計されていたと推定される。方向はN-22°-Wである。

柱穴の形状は、3号掘立柱建物との重複のためはっきりしないが、P1の周囲に方形の痕跡が見えるので、本来は方形であったものと思われる。規模は、やはり重複のために不明である。

柱痕は3本ともに見られるが、P2とP3は非常に明瞭である。P3はかなり傾いているので、これは抜き取りの際に曲がったものかもしれない。とすればこの柱穴では柱を南側に抜き取っていることになる。

出土遺物はない。

1～29号ピット(第22～24図、第12表、PL. 9-1～15, 10-1～9, 11-1)

以上の掘立柱建物以外に、4区では合計29基のピットが見つまっている。各ピットの規模などは第12表に上げたとおりである。

それらのうち、1・2号ピットは単独で存在するので用途不明であるが、3～21号ピットは調査区の北西部に、22～25号ピットは調査区の中央西側に集中するため、それらは建物の柱穴である可能性が考えられる。後者のピットは前者よりも全体に径が大きい傾向がある。ピットの中には、断面で柱痕と思われる土層が観察できるものが多いので、やはり柱穴と判断して良いであろう。しかし残念ながら、明確に建物として把握できるものはなかった。26～29号ピットは1号掘立柱建物と2号掘立柱建物の間にあり、これらは掘立柱建物群に関連する施設の柱穴と思われるが、他に組み合うものが見られないので、性格不明である。

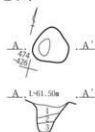
出土遺物がないので時期を特定することはできないが、3～25号ピットは、その形態・大きさから、掘立柱建物とすれば中世のものとするのが妥当であろう。26～29号ピットは周囲の建物同様、古代のものと考えてよいと思われる。

第12表 笠松遺跡4区ピット一覧表

番号	グリッド	大きさ(m)		備考
		長さ	幅	
1	470-425	0.37×0.29	0.34	9号溝と重複。
2	465-445	0.55×0.40	0.36	16号溝と重複。
3	510-490	0.38×0.30	0.45	41号溝と重複。
4	510-490	0.35×0.29	0.36	
5	510-490	0.26×0.24	0.34	41号溝と重複。
6	510-490	0.26×0.20	0.26	41号溝と重複。
7	510-490	0.32×0.27	0.30	41号溝と重複。
8	510-490	0.39×0.34	0.31	41号溝と重複。
9	515-485	0.32×0.25	0.31	
10	510-490	0.40×0.32	0.39	
11	510-490	0.40×0.31	0.26	28号溝と重複。
12	510-490	0.46×0.37	0.36	28号溝と重複。
13	510-490	0.43×0.38	0.58	
14	510-490	0.39×0.28	0.39	
15	515-490	0.31×0.25	0.40	28号溝と重複。
16	515-490	0.21×0.20	0.22	28号溝と重複。
17	515-490	0.37×0.32	0.35	
18	515-485	0.27×0.17	0.28	29号溝と重複。
19	515-485	0.28×0.22	0.30	29号溝と重複。
20	510-485	0.27×0.25	0.38	41号溝と重複。
21	510-490	0.44×0.38	0.35	28号溝と重複。
22	480-465	0.58×0.39	0.47	
23	480-465	0.39×0.35	0.61	
24	485-460	0.64×0.41	0.39	
25	480-465	0.75×0.45	0.56	
26	450-410	1.14×0.56	0.39	
27	450-410	0.46×0.45	0.45	28号ピットより古い。
28	450-410	0.26×0.24	0.56	27号ピットより新しい。
29	450-410	0.51×0.48	0.38	

第3章 笠松遺跡の調査の成果

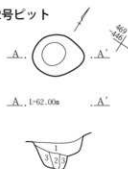
1号ビット



1号ビット

1. 黒褐色土 ローム小ブロックをわずかに含む。
2. 褐色土 ローム小ブロック、ローム細粒を少量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

2号ビット



2号ビット

1. 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む。
2. 灰黄褐色土 ローム細粒を多く含む。柱痕か。
3. 暗褐色土 黒褐色土、ローム土、ローム細粒を少量含む。

3号ビット



3号ビット

1. 黒褐色土 ローム土をやや多く含む。柱痕か。
2. 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを少量含む。
3. 明黄褐色土、黒褐色土、褐色土を含む。
4. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。

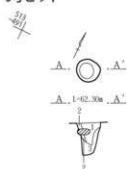
4号ビット



4号ビット

1. 黒褐色土 ローム土を少量含む。柱痕。
2. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
3. ロードと暗褐色土の混土

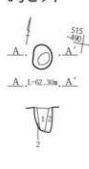
5号ビット



5号ビット

1. 褐灰色土 ローム土を少量含む。柱痕か。
2. 灰黄褐色土 ローム粒を多く含む。
3. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックをやや多く含む。

6号ビット



6号ビット

1. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックをやや多く含む。柱痕。
2. 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。

7号ビット



7号ビット

1. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。柱痕。
2. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。

8号ビット



8号ビット

1. 灰黄褐色土 ローム粒を多く含む。
2. 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを多く含む。
3. 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。
4. 灰黄褐色土 ローム粒をわずかに含む。
5. 灰黄褐色土 ローム粒、ロームブロックを多く含む。

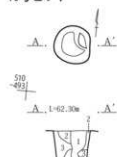
9号ビット



9号ビット

1. 黒褐色土 ローム土少含。柱痕
2. 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。
3. 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む。
4. にぶい黄褐色土 ローム土を多く含む。

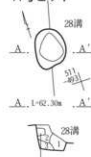
10号ビット



10号ビット

1. 褐灰色土 ローム粒をやや多く含む。柱痕
2. 灰黄褐色土 ローム粒、黒色土ブロックを少量含む。
3. 明黄褐色土、黒色土ブロックをわずかに含む。
4. にぶい黄褐色土 ローム粒を含む。

11号ビット



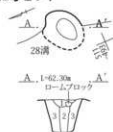
11号ビット

1. 褐灰色土 ロームブロックを含む。
2. 黒褐色土 ロームブロック、ローム粒を少量含む。
3. にぶい黄褐色土 ローム土を多く含む。

第22図 笠松遺跡4区1～11号ビット平面図

0 1:40 1m

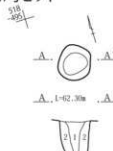
12号ピット



12号ピット

1. 黒褐色土 にぶい黄褐色土、ロームブロックを含む。
2. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を少量含む。柱痕。
3. 暗褐色土 ローム粒をやや多く、ロームブロックを少量含む。

17号ピット



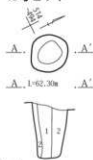
17号ピット

1. 褐灰色土 ローム粒を少量含む。柱痕。
2. 褐灰色土 ローム粒、ロームブロック、黒色土小ブロックを含む。

21号ピット



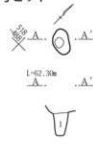
13号ピット



13号ピット

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム小ブロック、黒褐色土を多く含む。柱痕。
2. 暗褐色土 ローム細粒をやや多く含む。

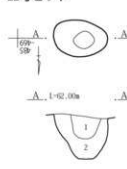
18号ピット



18号ピット

1. 褐灰色土 ローム土を多く含む。

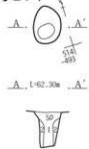
22号ピット



22号ピット

1. 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
2. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。

14号ピット



14号ピット

1. 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックをやや多く含む。
2. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。

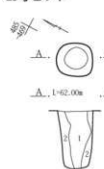
19号ピット



19号ピット

1. 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを多く含む。
2. 灰黄褐色土とローム土との混土

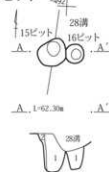
23号ピット



23号ピット

1. 黒褐色土 ローム土を少量含む。柱痕。
2. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックをやや多く含む。

15・16号ピット



15号ピット

1. 暗褐色土 褐色土、ローム粒を少量含む。
2. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。

16号ピット

1. 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを多く含む。

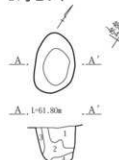
20号ピット



20号ピット

1. 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。柱痕。
2. 暗褐色土 黒色土、ローム粒を多く含む。

24号ピット

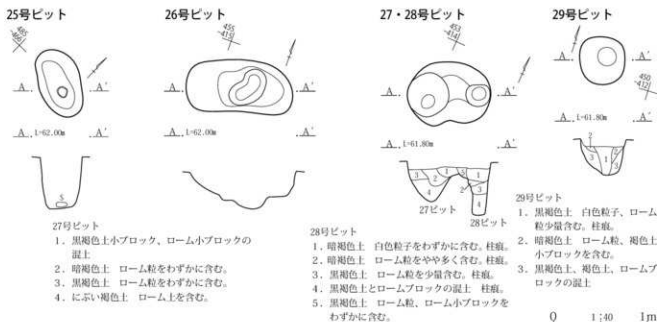


24号ピット

1. 灰黄褐色土 ローム粒を少量含む。
2. 褐色土 黒色土小ブロック、ローム粒、ローム小ブロックを含む。
3. 灰黄褐色土 ローム粒、ロームブロックを多く含む。
4. にぶい黄褐色土 ローム土を多く含む。



第23図 笠松遺跡4区12～24号ピット平面図



第24図 笠松遺跡4区25～29号ピット平面図

2 礎石

調査区南南部の東側、調査区境に近いところで、礫が狭い範囲に集まっているところが2箇所あり、これを「礎石」と名付けて調査した。ただし、それが礎石であったとしても、礎石そのものはすでになくなっており、残っている石はいわゆる「根石」である。

1号礎石(第25図、PL. 8-7)

2基の礎石のうち、南側に位置するものである。径1.2mほどの範囲に20個以上の石が集まっている。石の大きさは最大で長さ55cm、幅38cm、厚さ13cmで、その回りに小さな石が密に配置されている。その形態から、これらは礎石を支える根石だと思われる。石の下には深さ10cm程度の掘方がある。この掘方は1.35×1.10mの不整形で、底面には凹凸が見られる。中の土は版築状に突き固められていた。

2号礎石との距離は、両者の最大の石の心-心で計測して3.95mであり、約13尺ある。柱間としてはかなり広いが、礎石建物である可能性は強い。距離を計測したラインで方位を計測すると、N-20°-Wであり、南側の3号掘立柱建物とは直交する方向となる。

遺物は全く出土しておらず、時期は明確ではない。た

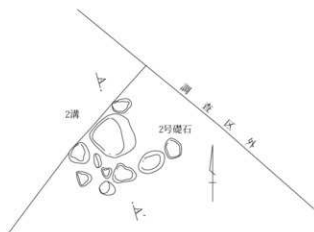
だし、地業が根石を据える掘方部分しか行われておらず、古代の建物と断定することは難しいと思われる。建物の方向は南にある3号掘立柱建物と直交するので、その点では注意が必要であるが、根石の据え方が簡便であり、近世以降のものである可能性も否定できないからである。残念ながら礎石は2基しか見つからないので、建物の全体が分からず、それ以上の詳細は明らかにしがたい。

2号礎石(第25図、PL. 8-8)

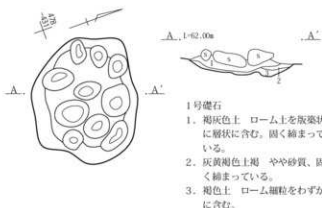
2基の礎石のうち北側に位置するもので、北西部に2号溝が重複するが、その新旧関係は不明である。1号礎石と同様、径1.2mほどの範囲に石が集まっている。最大の石は長さ45cm、幅40cm、厚さ35cmで、掘方の中に上面が水平になるように据えられ、その回りに石が入れられていた。これらも礎石の根石であると思われる。

掘方は南半部を壊してしまっただが、1.35×1.05mの卵形で、深さは0.45mある。やはり中の土は突き固めたように固くなっており、礎石として考えても不思議ではない。

遺物は全く出土しておらず、時期は明確ではない。



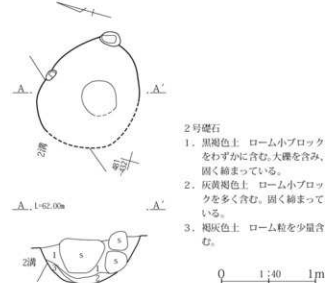
1号礎石掘方



1号礎石

1. 褐灰色土 ローム土を板築状に層状に含む。固く締まっている。
2. 灰黄褐色土層 やや砂質、固く締まっている。
3. 褐色土 ローム細粒をわずかに含む。

2号礎石掘方



2号礎石

1. 黒褐色土 ローム小ブロックをわずかに含む。大礫を含み、固く締まっている。
2. 灰黄褐色土 ローム小ブロックを多く含む。固く締まっている。
3. 褐灰色土 ローム粒を少量含む。



第25図 笠松遺跡4区1・2号礎石平面図

3 方形遺構

「方形遺構」と名付けたのは、「日」字型にめぐる方形の溝である。調査時点では「1号建物」という名称を付したが、建物と判断する根拠はなく性格不明なので、整理時に「方形遺構」という名称に改めた。

1号方形遺構(第26図、Pl. 11-2)

調査区中央東寄りにある。南東部に大きな攪乱が重複し、そのために溝が途切れているが、おそらくこの部分にも溝がめぐっていたものと考えられ、全体として「日」の字型に溝がめぐっている遺構であると思われる。

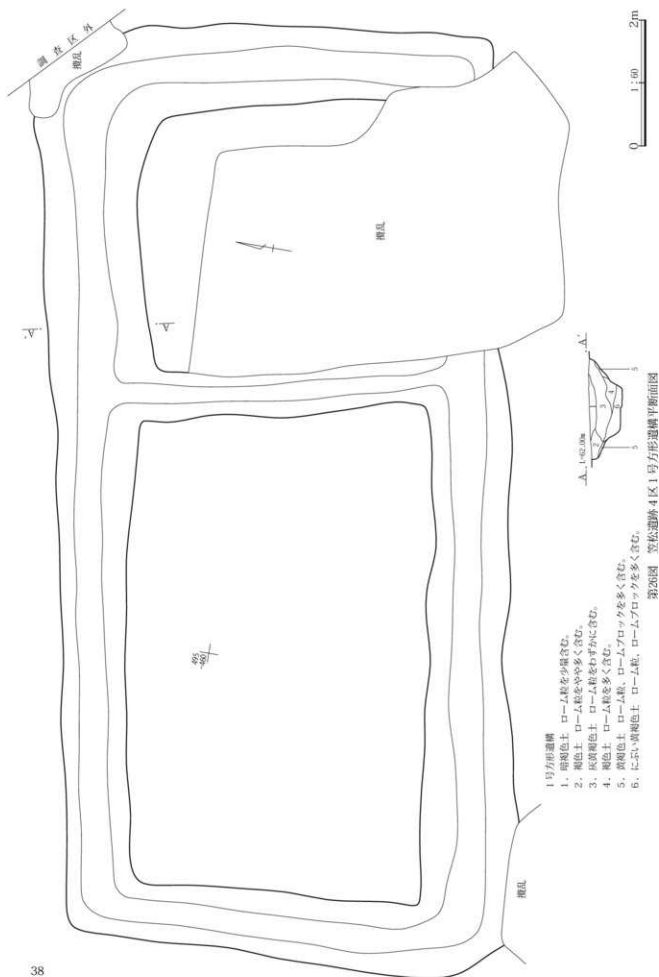
規模は溝の外周で計測して、長さ15.15m、幅7.28mである。外周の溝は上幅0.90～1.48m、下幅0.36～0.64m、深さ0.39～0.53mである。内側の溝は上幅0.82m、下幅0.20～0.31m、深さ0.28～0.34mであり、やや幅

が狭く浅い。方位は長軸方向で計測して $N-82^{\circ}-E$ である。

各溝は直線的に掘られ、断面は途中に段があるがほぼ逆台形で、底面は平坦である。断面図では、埋土が両側から流れ込んだように見え、やや不自然なので人為的に埋められたものと思われる。

出土遺物は少なく、掲載できるものはない。小破片として土師器杯碗類3点、同費壺類1点、同器種不明1点があるにすぎない。そのため、本遺構の時期を明らかにすることはできないが、中世以降の遺物が出土していないので、古代まで遡る可能性を否定することもできない。

この遺構の性格は、遺物が少なく、また、溝そのものに特徴がないので明らかにするのは困難である。当初想定した「建物」とすることも、根拠がないと言えよう。現時点では性格不明とせざるを得ない遺構である。



1号方形遺構

1. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
2. 褐色土 ローム粒を中や多く含む。
3. 灰褐色土 ローム粒をわずかに含む。
4. 暗色土 ローム粒を多く含む。
5. 黄褐色土 ローム粒、ロームブロックを多く含む。
6. 濃い黄褐色土 ローム粒、ロームブロックを多く含む。

第26図 笠松遺跡4区1号方形遺構平面図

4 土坑

土坑は1・7～18号の合計13基を調査した。2～6号土坑は、調査途中で風倒木であることが確認されたので欠番とした。それぞれの土坑の規模等は第13表に記したとおりである。

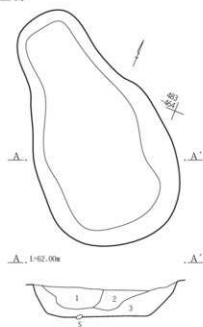
土坑の分布にはやや偏りがある。18号土坑のみは南西部の東側にあるが、中央の西寄りに1号と13～15・17号の5基、北西部に7～12・16号の7基が集まっている。これらのうち、特に北西部には長方形の土坑ばかりが集中しているのが注目される。このような土坑は近世以降の畝に掘られたいわゆるイモ穴である場合が多く、これらもそのような用途が考えられるが、それを直接示す痕跡はない。遺物は8号土坑のみで出土しているが、小破片ばかりで掲載できるものはない。その内訳は土師器甕壺類2点、須恵器杯碗類1点、同器壺類1点である。

中央西寄りの5基は平面形に様々なものが見られ、それぞれ用途が異なる可能性がある。1号土坑(第27図、PL. 10-10)はひょうたん型、13号土坑(第28図、PL. 11-4)と14号土坑(第28図、PL. 11-5)は楕円形、15号

土坑(第28図、PL. 11-5)は長楕円形である。いずれも土層に特徴的な点はなく、遺物も全く出土していないので、時期・用途は明らかではない。

17号土坑(第29図、第17表、PL. 11-7・8)は大きな長方形の土坑である。29号溝とはほぼ方位を同じくし、それを塞ぐような形で掘られている。調査当時はその大きさから「竪穴状遺構」という名称を付けていたが、形状が長方形であり、「竪穴状」という名称にふさわしくないので、整理時に「土坑」に変更した。北側では29号溝と同時に発掘してしまっただが、南側では重複関係を確認でき、29号溝が古いことが判明している。29号溝と方向を同じくしているので平面図では関連があるように見えるが、断面では新旧関係が確認できているので、両者が無関係であることは確実である。埋土は自然堆積と考えられ、石を多く含んでいる。遺物は掲載した須恵器杯1点の他は小破片ばかりであるが、比較的多く出土している。その内訳は、土師器甕壺類73点、同器種不明13点、須恵器杯碗類10点である。小破片とはいえ古代のものばかりであり、中世以降のものを含んでいないが、より古い29号溝が中世のものなので、それ以降のものである。ただし、

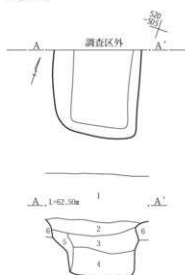
1号土坑



1号土坑

1. 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む。
2. 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。
3. 褐色土 ローム土を少量含む。

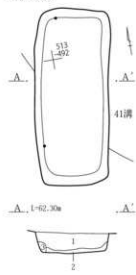
7号土坑



7号土坑

1. 褐色土 表土。
2. 暗褐色土 白色粒子、ローム粒をわずかに含む。
3. 褐色土 ローム粒を少量含む。
4. 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
5. 黄褐色土 ローム土を少量含む。
6. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを少量含む。

8号土坑



8号土坑

1. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
2. 黒褐色土とローム土の混上。
3. ロームブロック



第27図 笠松遺跡4区1・7・8号土坑平面図

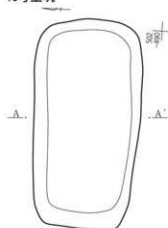
9号土坑



9号土坑

1. 褐色土 黒褐色土ブロック、ロームブロックを少量含む。ローム粒を多く含む。

10号土坑



A., 1:62.30m

10号土坑

1. 褐色土 黒褐色土ブロックをわずかに含む。ロームブロックを少量含む。
2. にぶい黄褐色土 ローム土を多く含む。

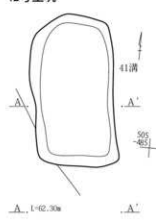
11号土坑



11号土坑

1. 黒褐色土 ローム土を少量含む。

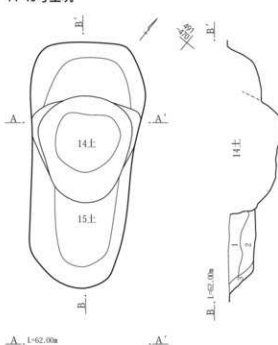
12号土坑



12号土坑

1. 黒褐色土 ローム土を少量含む。

14・15号土坑



A., 1:62.00m

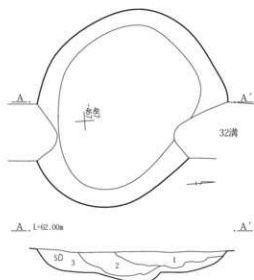
14号土坑

1. 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む。
2. にぶい黄褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
3. にぶい黄褐色土 ローム小ブロックをわずかに含む。
4. 明黄褐色ローム土 崩れたローム土。にぶい黄褐色土を含む。
5. 灰黄褐色土 ローム粒を少量含む。
6. にぶい黄褐色土 ローム粒を多く含む。

15号土坑

1. 褐色土 ローム粒を少量含む。
2. 灰黄褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを含む。
3. にぶい黄褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを多く含む。

13号土坑



A., 1:62.00m

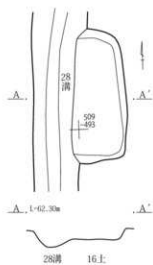
13号土坑

1. 黒褐色土 白色粒子、ローム粒わずかに含む。
2. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
3. にぶい黄褐色土 ローム土を多く含む。

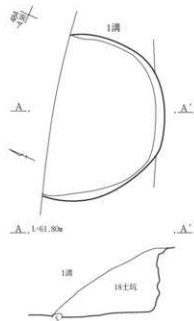
0 1:40 1m

第28図 笠松遺跡4区9～15号土坑平面図

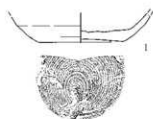
16号土坑



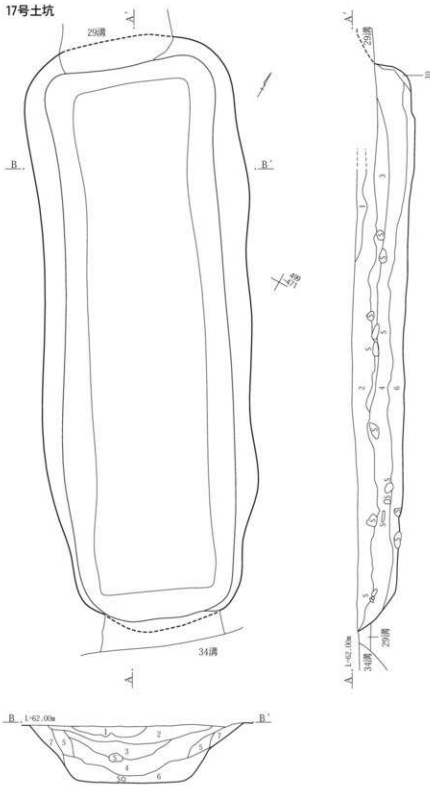
18号土坑



17号土坑出土遺物

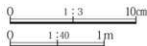


17号土坑



17号土坑

1. 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む。
2. 褐灰色土 ローム粒をわずかに含む。
3. にふい・黄褐色土 ローム粒、ローム上をやや多く含む。
4. 灰黄褐色土 ローム粒を少量含む。
5. にふい・黄褐色土 ローム粒を少量含む。
6. にふい・黄褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを多く含む。
7. 明黄褐色土 ロームの崩れた上。



第29図 笠松遺跡4区16～18号土坑平断面図、17号土坑出土遺物

第3章 笠松遺跡の調査の成果

第13表 笠松遺跡4区土坑一覧表

番号	所在グリッド	主軸方位	大きさ(m)		備考 ()内は小破片のため未掲載の遺物数
			長辺×短辺×深さ		
1	480-460	N-45°-W	2.60×1.47×0.37		
7	515-500	N-18°-W	[0.95]×0.93×0.49		
8	510-490	N-10°-E	1.87×0.79×0.23	41溝と重複。新旧不明。(土師器甕壺類2点、須恵器杯椀類1点、同表壺類1点)	
9	510-490	N-2°-E	1.45×0.78×0.15		
10	500-490	N-89°-E	2.22×1.10×0.19		
11	505-485	N-9°-W	1.08×0.75×0.11	41溝と重複。新旧不明。	
12	500-485	N-5°-W	1.60×0.90×0.12	41溝と重複。新旧不明。	
13	485-465	N-44°-W	2.19×1.80×0.38	32溝より古。	
14	485-465	N-38°-W	[1.14]×1.18×0.58	15土より新。	
15	485-465	N-38°-W	2.60×1.23×0.37	14土より古。	
16	505-490	N-5°-E	1.43×[0.58]×0.11	28溝より古。	
17	495-470	N-34°-W	(6.28)×2.22×0.64	29溝より新。須恵器杯1点。(土師器甕壺類73点、同器種不明13点、須恵器杯椀類10点)	
18	480-435	-	1.72×[1.20]×0.75	1溝より古。	

用途を示すようなものは出土しておらず、埋土や形態にも特別な点はないので用途は特定できない。

18号土坑(第29図)は1号溝の南壁に重複しているものである。1号溝に北半分を壊されているが、南半分が整った半円形なので、本来は円形の土坑であったと思われる。1号溝がAs-II以降の中世のものであり、18号土坑はそれを測るものであるが、どこまで測るかは明らかでなく、用途も不明である。

5 井戸

井戸は合計3基を調査した。いずれも調査区の北西部にある。深さが比較的浅いのは、この地が大間々扇状地の末端に近く地下水位が高いことを示している。

1号井戸(第30図、第17表、PL. 12-1, 32)

調査区北西部にあり、2号井戸と並んだような位置である。確認面ではやや歪んだ円形で、素掘りの井戸である。確認面では長径2.77m、短径2.45mであるが、徐々に狭まった後、深さ0.90m付近から大きくえぐれ、最大径の部分では長径3.28m、短径2.85mになってしまっている。おそらくこの深さの層から盛んな湧水があったのであろう。深さは2.58mであり、底面は長径1.32m、短径1.28mである。底面の標高は59.63mである。土層断面を見ると、南東の方向から土が流れ込んでおり、この方向から人為的に埋めたようである。

遺物は比較的多く出土している。掲載したのは丸瓦1点、尾張陶器の片口鉢2点、砥石1点である。丸瓦は凹面に模様の側板痕跡を残している。近傍にある寺井庵寺の創建期軒丸瓦の丸瓦部には側板痕跡が見られることが須田氏によって指摘されており(須田茂「寺井庵寺」『群

馬県史・資料編2』群馬県 1986)、この瓦も寺井庵寺創建期のものである可能性が高い。とすれば7世紀末頃のものである。尾張陶器片口鉢2点は同一個体の可能性があるもので、13世紀第3四半期のものである。この他小破片として、須恵器甕壺類1点、古代の瓦2点、中世国産焼締陶器3点がある。近世以降の遺物が出土していないので、この井戸が埋没したのは中世であろう。

2号井戸(第31図、第18表、PL. 12-2)

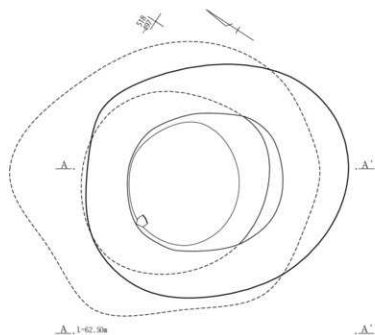
調査区北西部にあり、1号井戸と並んでいる。確認面ではほぼ円形で、素掘りの井戸である。長径2.69m、短径2.45mで、深さ0.5～0.9mまでは急激に狭まり、その後は緩やかに狭まって、底面は長径1.30m、短径1.16mとなる。壁は湧水で崩れなかったようで、えぐれているところはない。深さは2.61mで、底面の標高は59.58mであり、1号井戸とほぼ同じである。

掲載した遺物は常滑陶器の甕と思われる破片で、中世のものである。その他小破片として土師器器種不明2点、須恵器杯椀類2点、同表壺類1点が出土している。近世以降の遺物が出土しないので、この井戸の埋没年代も1号井戸同様中世と考えられる。

3号井戸(第31図、PL. 12-3)

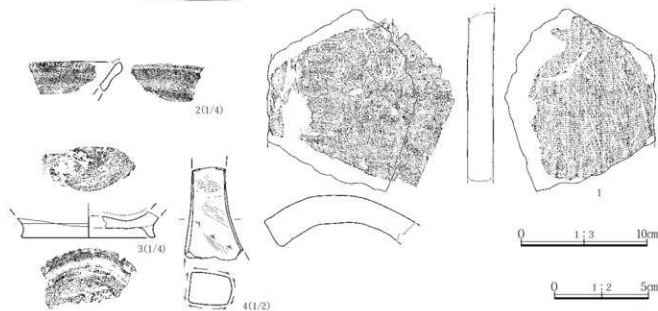
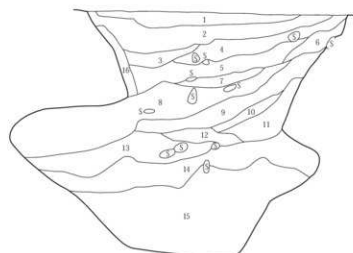
調査区北西部にある。確認面ではほぼ円形で、やや小型の素掘りの井戸である。長径1.64m、短径1.46mで深さ0.9～1.0m付近まで徐々に狭まった後壁がえぐれて広がる。この付近に湧水があったものと思われる。底面は長径0.81m、短径0.64mで、深さは1.99m、底面の標高は60.10mで1、2号井戸よりもやや高い。

遺物の出土はなく、時期は明らかではない。



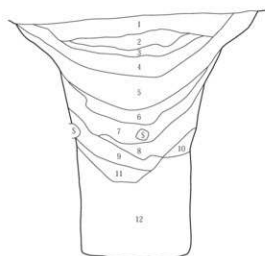
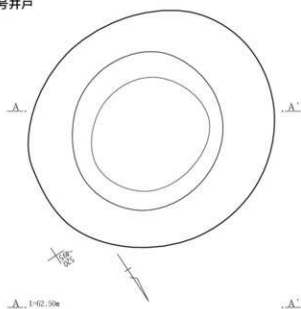
- 1号井戸
1. 暗褐色土 黄褐色砂、小礫をわずかに含む。
 2. 褐灰色土 黄褐色砂、礫を少量、ローム土をわずかに含む。
 3. 暗褐色土 褐色土粒を少量、ローム粒をわずかに含む。
 4. 灰黄褐色土 砂質、礫を多く、ローム土をわずかに含む。
 5. 灰黄褐色土 砂礫多い、ローム土をわずかに含む。
 6. 濃い黄褐色土 ローム土を少量、黒色土粒をわずかに含む。
 7. 暗褐色土 砂粒を少量、ローム粒をわずかに含む。
 8. 褐色土 大型礫と砂粒を多く、ローム土を少量、黒色土粒をわずかに含む。
 9. 黄褐色土 ローム土主体。
 10. 濃い黄褐色土 ローム土を少量含む。
 11. 褐色土 ローム粒をわずかに含む。
 12. 褐灰色土 砂礫を少量、ローム土を多く含む。
 13. 暗褐色土 礫を多く、ローム土を少量含む。
 14. 褐色土 砂礫を多く、ローム土を少量含む。
 15. 褐灰色土 砂礫、ローム土を多く含む。
 16. 暗褐色土 ロームを少量含む。

0 1:40 1m



第30図 笠松遺跡4区1号井戸断面図・出土遺物

2号井戸

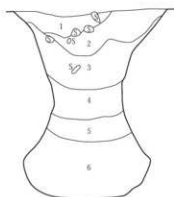
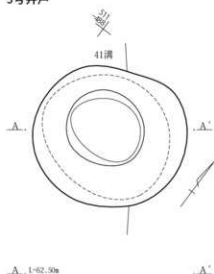


2号井戸

1. 褐灰色砂礫 黒褐色砂質土、ローム土を少量含む。ローム細粒をわずかに含む。
2. にぶい黄褐色土 ローム土を多く、礫を少量含む。
3. 黄褐色ローム土 YF粒を少量、黒褐色土ブロックをわずかに含む。
4. 黄褐色ローム土 黒褐色土ブロックをわずかに含む。
5. 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む。
6. 黄褐色土 ローム土を多く含む。
7. 黒褐色土 ローム細粒をわずかに含む。
8. 黄褐色ロームと黒褐色土の互層
9. 灰黄褐色土 黒褐色土、ロームブロック、灰白色シルトブロックを含む。
10. 黒褐色土 ロームブロックを含む。
11. 黒褐色土 ロームブロック、灰黄褐色土ブロックを多く含む。
12. 灰黄褐色土 ローム土、ロームブロックを含む。砂礫を少量含む。



3号井戸



3号井戸

1. 褐色土 砂礫を多く含む。黒褐色土を少量、ローム細粒をわずかに含む。
2. 暗褐色土 礫を少量、ローム細粒をわずかに含む。
3. 黒褐色土 礫をわずかに含む。ロームブロック、ローム粒を少量含む。
4. 暗褐色土 礫を多く、ローム土を少量含む。
5. 褐色土 砂礫、ローム細粒を少量含む。
6. 暗褐色土 砂礫を少量含む。ローム上の多い層と少ない層が互層になっている。



第31図 笠松遺跡4区2・3号井戸平面図、2号井戸出土遺物

6 溝

溝は合計39条調査した。21号溝は14号溝と同一と思われるのでこれに合わせ、40号溝は攪乱と思われるので欠番とした。

1号溝(第32・33図、PL. 12-4・5, 13, 14-1)

調査区中央部やや南寄りを東西に横断する大きな溝であり、その位置から推定東山道駅路(下新田ルート)の北側溝であると思われるものである。18号土坑、11、12、19、23、32号溝と重複する。本溝は18号土坑より新しいことは確認できたが、それ以外の溝とは新旧関係を確認できなかった。

調査区内では長さ38.0m分を調査できたが、両端はさらに延びている。幅は3.70～5.58m、深さは0.60～0.79mである。ほぼ直線的に延び、方向はN-77°-Eである。断面形は途中で段があるもののほぼ逆台形で、底面はほぼ平坦になっている。A-A'セクションをみると、少なくとも1回の掘り直し(1～4層)が認められる。底面の標高は西端で61.16m、東端で60.86mであり、その差は0.30mで水が流れていたとすれば西から東の方向であるが、埋土には砂等を含んでいないので、豊富な流水があったとは思えない。

規模が大きい割に出土遺物は少なく、掲載できるものはない。小破片として、土師器甕壺類19点、同器種不明7点、須恵器甕壺類2点がある他、近現代の遺物も少量あるが、近現代のものは混入であろう。

埋没土中には、肉眼では火山灰などが含まれていることは確認できなかったが、火山灰分析の結果、上層から下層までのすべての層からAs-Bが検出された(分析結果の詳細は第6章参照)。そのため、この溝の埋没年代はAs-B降下時よりも新しいことになり、東山道駅路の年代とは大きく隔たることになる。溝の位置は古代の推定東山道駅路下新田ルート北側溝に相当するが、駅路側溝としては異常に幅広い溝なので、いつの時期かに掘り広げられ、最終的には中世以降にまで使用され続けて埋没したのだと推定される。東山道駅路との関連については第7章総括で再論する。

2号溝(第32・33図、第18表、PL. 12-5, 13, 14-2・

3, 32)

調査区中央やや南寄りを北東-南西方向に横断する大きな溝である。推定東山道駅路の路面を斜めに横切る位置である。9～12、20、22～24号溝と重複するが、それらとの新旧関係は不明である。

調査区内では長さ30.10m分を調査できたが、両端はさらに延びている。幅は2.23～3.67m、深さは0.85～1.46mである。ほぼ直線的に延び、方向はN-56°-Eであるが、東端部ではやや北に曲がっているように見える。断面形は途中で段があるがほぼ逆台形である。A-A'セクションをみると、細かい単位で埋没しているが、明らかな掘り直しは確認できなかった。底面の標高は南西端で60.39m、北東端で60.38mであり、差はほとんどない。埋土には砂等を含んでいないので、豊富な流水があったとは思えない。

出土遺物は少なく、掲載できたのは龍泉窯系青磁碗1点である。これは13世紀中頃～14世紀初頭前後のものと考えられる。その他小破片として、土師器甕壺類4点、須恵器甕壺類1点、近世国産磁器1点、同在地系土器皿2点が出土している。

埋没土中には、肉眼では火山灰などが含まれていることは確認できなかったが、この溝においても火山灰分析の結果、上層から下層までの層からAs-Bが検出されている。そのため、埋没年代はAs-B降下よりも新しいことになる。出土遺物に近世のものが含まれていることを重視すれば、最終的に埋没したのは近世にまで下る可能性もある。

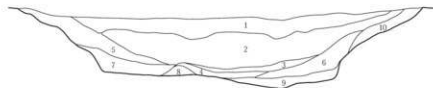
3号溝(第38図)

調査区南部にある南北方向の溝である。4、13号溝よりも新しく、17号溝とは新旧不明である。調査区南壁から緩やかに湾曲しながら北に延びるが、北端部は攪乱で途切れている。さらに北側にある11号溝とは方向が近いので、これは本来一連のものであろう。

長さは両端を直線的に結んで計測すると30.68m、幅は0.90～3.16m、深さは0.08～0.55mで、南側に行くに従って広く深くなる。方向は南半部ではN-4°-Wで、北半部では西にわずかに曲がり、N-15°-Wとなる。断面形は皿状で浅い。底面の標高は北端で61.69m、南端で61.30mであり、その差は0.39mであるが、埋土に

第3章 笠松遺跡の調査の成果

1-A, 1-62.00m



1号溝 A-A'

1. 褐灰色土 黄褐色土粒をわずかに含む。やや砂質。
2. 黒褐色土 砂粒、ローム細粒をわずかに含む。
3. 黒褐色土 粘性強く、硬く締まっている。
4. 褐灰色土 ローム細粒をわずかに含む。硬く締まっている。
5. 褐灰色土 ローム細粒をわずかに含む。
6. 灰黄褐色土 ローム粒を多く含む。
7. に深い黄褐色土 ローム粒を多く含む。
8. 灰黄褐色土 ローム粒をわずかに含む。
9. 灰黄褐色土 ロームブロック、ローム粒を多く含む。白色軽石を含む。
10. に深い黄褐色土 ローム土を多く含む。

上A

9・16-A, 1-62.00m



9・16号溝 A-A'

1. 褐灰色土 砂粒を含む。9号溝。
2. 黒褐色土 黄色ロームブロックを含む。9号溝。
3. 灰黄褐色土 16号溝。

10・20-A, 1-62.00m

10・20-A'



10・20号溝 A-A'

1. 褐灰色土 やや砂質。10号溝。
2. 灰黄褐色土 10号溝。
3. 黒褐色土 ローム粒、礫を含む。10号溝。
4. 褐灰色土 ローム粒、ローム小ブロックを含む。20号溝。

11-A, 1-62.00m

11-A'



11号溝 A-A'

1. 黒褐色土 白色粒子、ローム粒をわずかに含む。上部に礫を多く含む。
2. に深い黄褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを多く含む。
3. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
4. 灰黄褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを少量含む。

12-A, 1-62.00m

12-A'



12号溝 A-A'

1. 褐灰色土 やや砂質。ローム細粒をわずかに含む。
2. 灰黄褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを含む。
3. 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。礫を含む。

16-A, 1-62.00m

16-A'



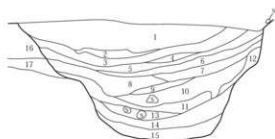
16号溝 A-A'

1. 褐灰色土
2. 灰黄褐色土 ローム粒を少量含む。
3. 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックをわずかに含む。
4. に深い黄褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを含む。

0 1:40 1m

2-A, 1-62.00m

2-A'

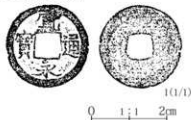
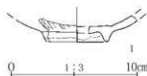


2号溝 A-A'

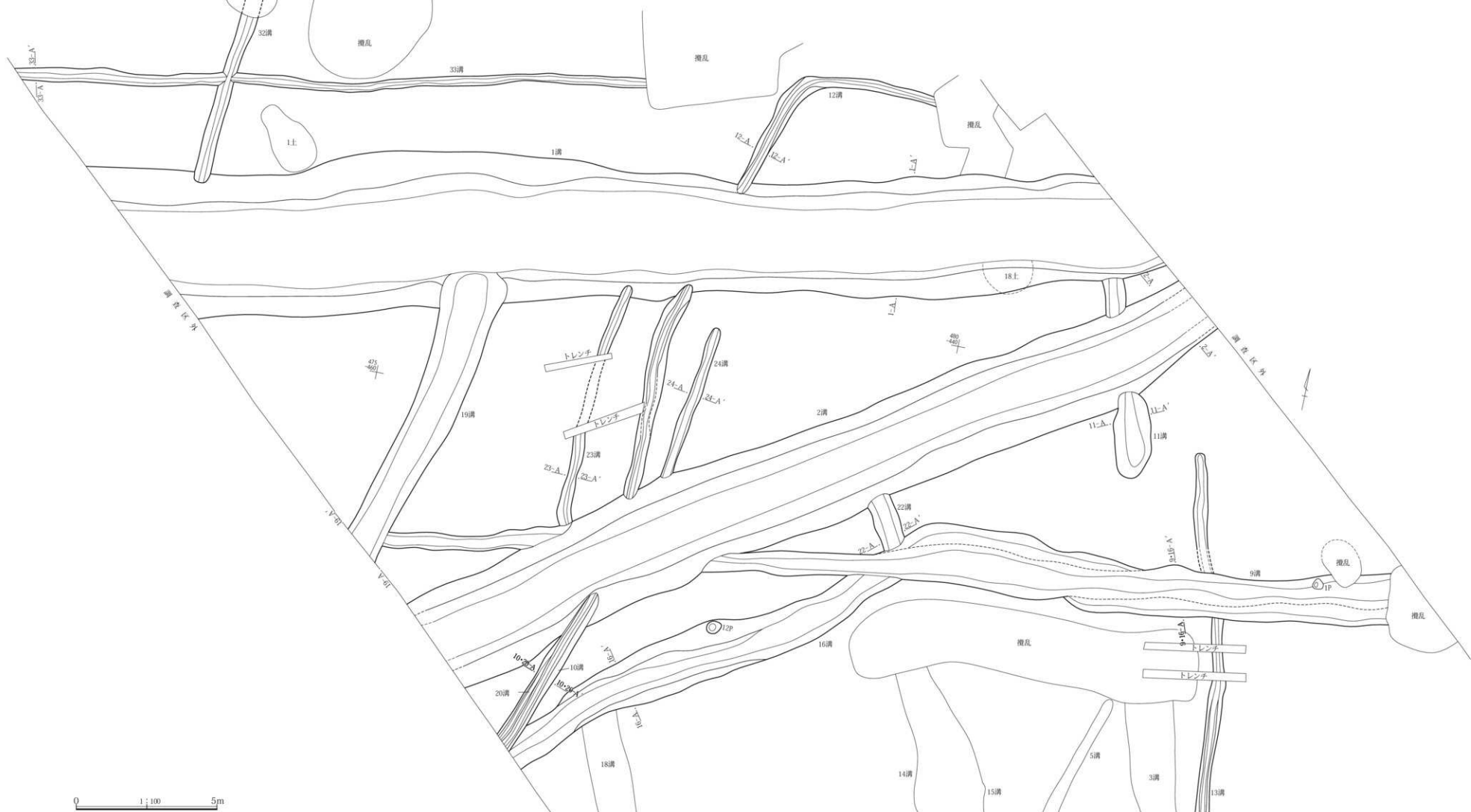
1. 褐灰色土 やや砂質。
2. 黒褐色土 砂質。ローム粒をわずかに含む。
3. 褐灰色土 粘性強く、締まっている。
4. 灰黄褐色土 やや砂質。黄褐色ローム粒をわずかに含む。
5. 褐灰色土 砂質。ローム粒をわずかに含む。
6. 灰黄褐色土 砂質。
7. 褐灰色土 ローム粒を含む。
8. 褐灰色土 小礫を少量含む。
9. 褐灰色土 ロームブロックを含む。
10. 灰黄褐色土 礫、ローム土を含む。
11. 褐灰色土 ロームブロックを多く含む。礫を含む。
12. 灰黄褐色土 ローム粒、ロームブロックを含む。
13. 灰黄褐色土 ロームブロックをやや多く含む。礫を多く含む。
14. 明黄褐色土ロームブロックを主体とした層 褐灰色土ブロックを少量含む。
15. 褐灰色土 砂質。ロームブロックを含む。
16. 褐灰色土 ローム粒をわずかに含む。
17. 灰黄褐色土 ローム粒、ローム土を少量含む。

2号溝出土遺物

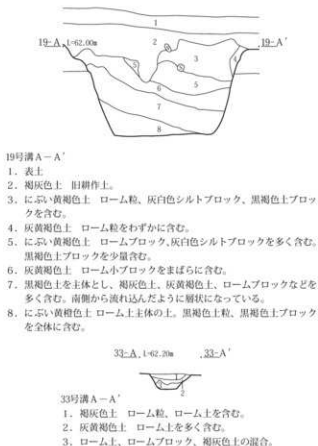
9号溝出土遺物



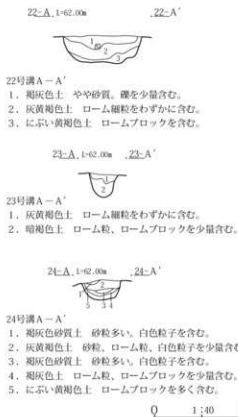
第32図 笠松遺跡4区1・2・9・10～12・16・20号溝断面図、2・9号溝出土遺物



第33図 笠松遺跡4区推定東山道駅路付近平面図(1・2・9~12・16・19・20・22~24・32・33号溝)



第34図 笠松遺跡4区19・22～24・33号溝断面図



は砂等を含んでおらず水が流れていた痕跡はない。

遺物は少なく、掲載できるものはない。小破片の土師器器種不明1点、須恵器杯椀類1点が出土しているだけである。このため時期を特定することはできないが、As-Bが上層に堆積する4号溝よりも新しいので、中世以降のものであることは確実である。

4号溝(第35～37図、第18表、PL. 7-2, 14-4～6, 32)

調査区南部にあるL字形の溝である。その位置、規模、出土遺物からみて、県道南で調査した笠松1区10号溝と本章第2節で報告した笠松3区1号溝と一連となり、掘立柱建物群を囲む溝になるものと思われる。3、5、6、13、14号溝と重複し、本溝は3、5、6、13号溝よりも古い。14号溝とは新旧不明である。

L字形の溝であるが、コーナーは丸くなっている。溝が直線的に接合するとして計測すると、西側の南北部分の長さは約21m、東側の東西部分の長さは約24mである。幅はほぼ一定で、2.84～3.66m、深さは0.91～1.15

mである。方向は南北部分でN-29°-W、東西部分ではN-71°-Eである。断面形は逆台形であり、底面はほぼ平坦で整った形態をしている。土層を見ると上層にAs-Bの一次堆積が見られ、笠松1区10号溝、笠松3区1号溝と共通する。底面の標高は北東端で60.66m、屈曲部で60.73m、南西端で60.62mであり、その差はわずかである。埋土には水が流れた、あるいは溜まっていたことを示すような痕跡は認められない。

遺物は数多く出土している。掲載したのは土師器杯1点、須恵器杯11点、同椀4点、同皿3点、同盤1点という古代の土器の他、近世の天目碗1点、焙烙1点である。上層にAs-Bが堆積していることから見て、近世の遺物は混入であろう。その他小破片として、土師器杯椀類6点、同壺甕類2点、同器種不明5点、須恵器杯椀類13点、同壺甕類28点、近世焼締陶器1点、阿在地系土器皿2点、近現代陶磁器3点がある。やはり近世以降のものは混入であると思われる。

古代の土器の年代は、3・4・5・7・12・13・20は8世紀中頃、1・2・6は8世紀後半、8～11・14～

第3章 笠松遺跡の調査の成果

19は9世紀後半である。この時期が溝に閉まれた建物群が機能していた時期だと思われる。溝自体はその後埋没し、As-B降下時にはわずかな凹みになっていた。

5号溝(第38図、PL. 14-7・8、15-1)

調査区南部にある南北方向の溝である。調査区南端から緩やかに蛇行しながら北に延び、北端は攪乱の部分で途切れる。4、14号溝と重複し、本溝が新しい。

長さは南端と北端を直線的に計測して31.80m、幅は0.35～0.98m、深さは0.06～0.38mである。方向は南部で $N-13^{\circ}-W$ で、以北では蛇行し、北部では $N-2^{\circ}-W$ から $N-15^{\circ}-E$ となる。断面形は椀型である。底面の標高は北端で61.76m、南端で61.23mであり、その差は0.53mであるが、埋土には砂を含まず流水の痕跡はない。

遺物の出土はなく、その点では時期を把握できないが、4号溝の上層にはAs-Bが堆積し、また、14号溝が近世以降のものである可能性が強いことから、本溝も近世以降であると思われる。

6号溝(第40図、第18表、PL. 15-2・3)

調査区南東部にある南北方向の溝である。2号掘立柱建物、4、17号溝と重複し、本溝は2号掘立柱建物、4号溝よりも新しいが、17号溝とは新旧不明である。南壁から北に直線的に延び、4号溝の北で途切れる。

長さは21.98mで南側は調査区外に延びる。幅は1.43～1.94m、深さは0.11～0.43mである。方向は $N-8^{\circ}-W$ である。断面形はごく浅い逆台形である。A-A'セクションをみると、上層にAs-Bと思われる軽石が含まれている。底面の標高は北端で61.63m、南端で61.49mであり、その差は0.14mである。

出土遺物は少ないが、中国産青白磁1点を掲載した。器種は梅瓶であると思われる、13～14世紀のものである。その他小破片として土師器杯椀類3点、同器種不明7点、須恵器杯椀類1点、同器種不明3点、灰土陶器瓶類1点、近世国産磁器1点、同施軸陶器2点、同在地系土器焙烙銅類1点、近現代陶磁器2点がある。埋没年代は近世以降であろう。

7号溝(PL. 15-4)

調査区南西隅にわずかにかかる北西-南東方向の溝である。他の遺構との重複はない。

調査区にかかっている長さは2.40mで、両端はさらに延びている。幅は0.47～0.69m、深さは0.10～0.12mである。方向は $N-36^{\circ}-W$ である。

遺物の出土はない。

8号溝(PL. 15-4)

調査区南西隅にごくわずかにかかる北西-南東方向の溝である。他の遺構との重複はない。

調査区にかかっている長さは1.20mで、両端はさらに延びている。幅は1.32m、深さは0.10mと浅い。方向は $N-31^{\circ}-W$ である。断面形は浅い皿状である。

遺物の出土はない。

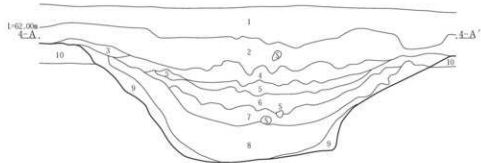
9号溝(第32・33図、第18表、PL. 12-5、13、15-5・6、32)

調査区中央やや南を東西に横断する溝である。その位置、方向からみて推定東山道駅路下新田ルートの南側溝に当たるとと思われるものである。2、13、16、19号溝と重複し、本溝は16号溝よりも新しく、19号溝より古い、それ以外の溝とは新旧不明である。

東端は攪乱、西端は19号溝と重複するが、その間の長さは35.65mであり、両端はさらに調査区外へ延びる。幅は0.48～1.49m、深さは0.12～0.45mである。方向は両端を結んで計測すると $N-82^{\circ}-E$ であり、北側溝と想定される1号溝とは 5° ほど異なっている。断面形は不整な台形か三角形で、さほどしっかりとしたものではない。底面の標高は西端で61.59m、東端で61.37mであり、その差は0.22mである。埋土の上層には砂粒を含むが、水が流れた痕跡はない。

掲載した遺物は寛永通宝1点である。その他小破片として、土師器甕壺類3点、同器種不明1点、近世国産磁器1点、同国産施軸陶器1点出土している。近世の遺物が複数出土していることから、最終埋没年代は近世以降と考えられる。

埋没土中には、肉眼では火山灰などが含まれていることは確認できなかったが、火山灰分析の結果、下層からもAs-Bが検出された。そのため、この溝の埋没年代はAs-B降下時よりも新しいことになり、1号溝同様、東山



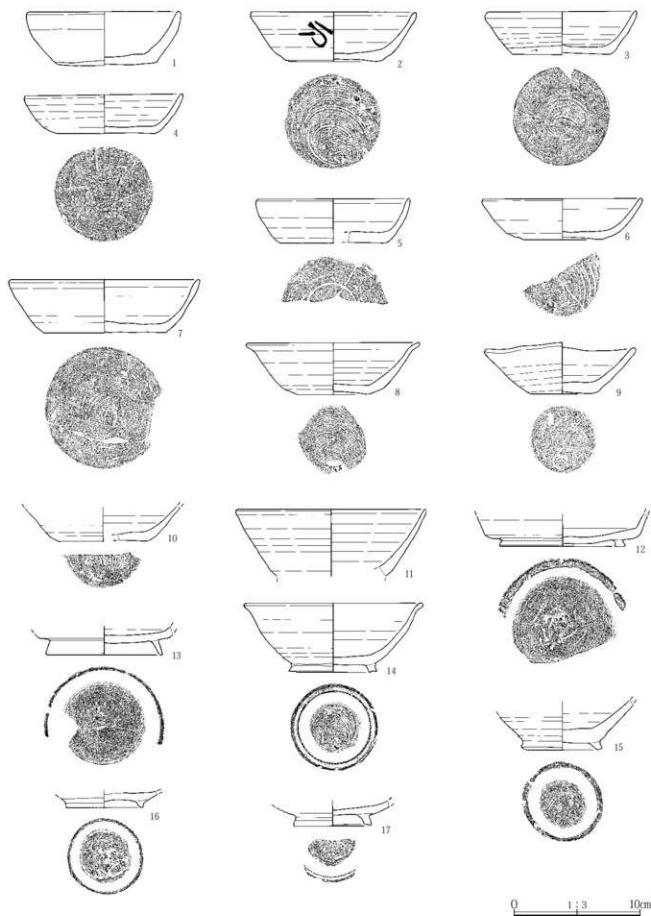
4号溝A-A'

1. 表土 碎石の部分が多い。
2. 褐色土 旧耕作土。
3. 褐色土
4. 黒褐色砂質土 基底付近に灰褐色砂質土を含む。
5. As-B
6. 褐色土 灰黄褐色上のブロックをまばらに含む。
7. 灰黄褐色土 白色の細粒軽石を含む。
8. 灰黄褐色土 白色の細粒軽石を含む。礫をわずかに含む。
9. に近い黄褐色土 ローム粒、ローム小ブロックをやや多く含む。
10. に近い黄褐色土 地山。

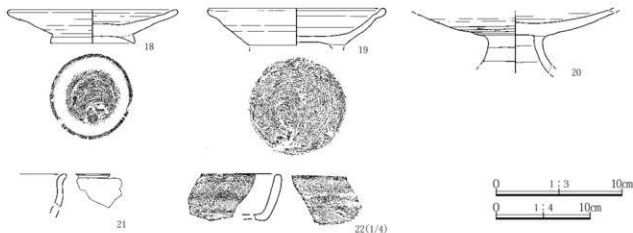
0 1:30 1m



第35図 笠松遺跡4区4号溝平面断面図



第36図 笠松遺跡4区4号溝出土遺物(1)



第37図 笠松遺跡4区4号溝出土遺物(2)

道駅路の年代とは大きく隔たることになる。溝の位置としては古代の推定東山道駅路下新田ルート南側溝に相当するが、その後同位置で掘り直されたと思われる。ただし1号溝とは異なって、掘り広げられることはなく、最終的には近世まで使用され続けて埋没したのだと推定される。この問題については第7章総括で再論する。

10号溝(第32・33図, PL. 15-7)

調査区中央南寄りの西端にある南西-北東方向の溝である。2、16、20号溝と重複し、本溝は20号溝より新しく、16号溝よりも古い。

西側にはほぼ同じ方向の20号溝が重複している。両溝とも南西方向は調査区外となり、北東部は2号溝で途切れている。2号溝の北側は、調査時には両溝とも不明であったが、断面形状から見ると12号溝が10号溝の、24号溝が20号溝の延長部なのではないだろうか。

長さは6.25m、幅は0.32～0.55m、深さは0.43～0.48mで、方向はN-20°-Eである。断面形は深い逆台形である。

遺物は少なく小破片ばかりで、土師器甕壺類1点、陶器種不明3点、古代瓦1点であり、時期は特定できない。

11号溝(第32・33図, PL. 15-8)

調査区中央やや南の東側にある南北方向の溝である。1・2号溝と重複するが、新旧は不明である。先述したように3号溝の北延長部であると思われる。

2号溝によって南北に分断されているが、両端を結んで計測して長さは7.10m、幅は0.73～1.32m、深さは

0.13～0.52mであり、方向も両端を結んだ線で計測するとN-17°-Wである。断面形はほぼ逆台形で、底面近くで傾斜がきつくなる。

出土遺物はない。

12号溝(第32・33図, PL. 16-1～3)

調査区中央にあるL字形の溝である。南端は2号溝と重複し、中央は1号溝と重複するが新旧は不明である。先述のように10号溝と断面形が似ており、両者は本来一連のものと思われる。

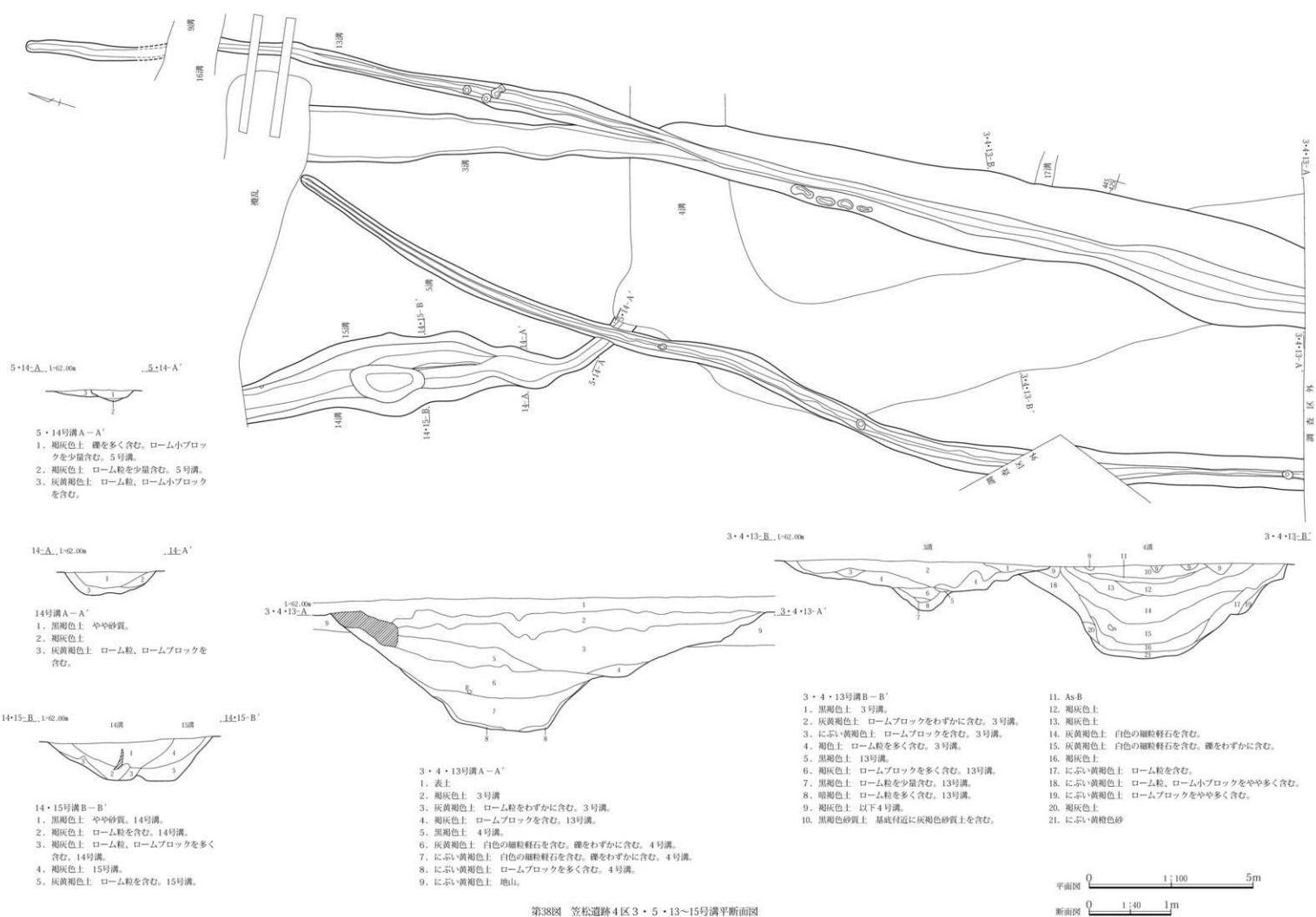
長さは南端からL字形に屈曲するところまでが16.30m、そこから攪乱に分断されるまでが5.00mである。幅は0.34～0.70m、深さは0.16～0.49mである。方向は2号溝の北側ではほぼ真南北方向に一致し、北側でN-18°-Eに方向を変え、1号溝を越えて大きくN-89°-Eに変える。断面形は深い逆三角形ないし逆台形で、10号溝に似ており、土層もほぼ共通する。底面の標高は北東端で61.52m、南端で61.49mであり、その差はほとんどない。

出土遺物はない。

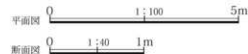
13号溝(第38図, PL. 16-4・5)

調査区南部にある南北方向の溝である。3・4・9・16号溝と重複し、本溝は4号溝より新しく、3号溝より古い。

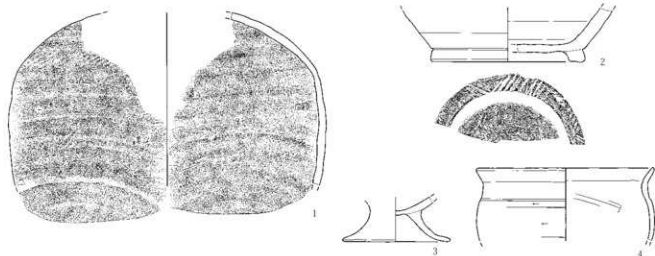
長さは両端を直線的に結ぶと39.60m、幅は0.35～1.08m、深さは北半部では0.06～0.18mである。方向は南側の大部分は直線的でN-3°-Wであり、北端近



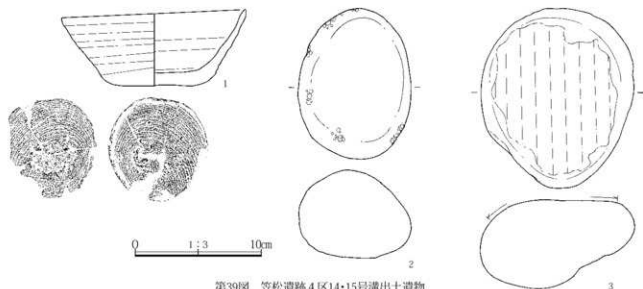
第38図 笠松道跡4区3・5・13～15号溝平面断面図



14号溝出土遺物



14・15号溝出土遺物



第39図 笠松遺跡4区14・15号溝出土遺物

くで西に傾き $N-16^{\circ}-W$ となる。断面形は逆三角形ないし逆台形である。底面の標高は北端で61.74m、南端で61.25mであり、その差は0.49mあるが、埋土には砂を含まず、水が流れていた痕跡は認められない。

遺物は少なく小破片ばかりで、土師器器種不明6点、須恵器甕壺類1点が出土しているだけである。

14号溝(第38・39図、第18・19表、PL. 16-6, 32, 33)

調査区南部中央にある北西-南東方向の不整形の溝である。北西端は攪乱、南東端は4、5、15号溝と重複する。本溝は5号溝より古く15号溝より新しいが、4号溝との重複部分にはちょうど風倒木がかかり、新旧を確認できなかった。攪乱より北側では途切れるが、方向から見て22号溝がその延長部である可能性が高い。

細かく蛇行する溝で、南端部は幅が狭く、大きく曲がっている。長さは北端と南端を直線的に計測すると12.23m、幅は北側では15号溝と重複するので不明であるが、南側は細くなり0.50m、深さは0.12~0.52mであり、中央部に深さ0.73mの深い部分がある。方向は南端部は $N-72^{\circ}-W$ から $N-51^{\circ}-W$ で、北側の大部分は $N-6^{\circ}-W$ から $N-29^{\circ}-W$ の間で蛇行する。断面形は逆台形である。底面の標高は北端で61.26m、南端で61.63mであり、周囲の傾斜と異なって北側が低くなる。

遺物は比較的多く出土しているが、調査の際に次の15号溝と同時に発掘してしまったため、どちらに帰属するのか分からない遺物が生じてしまった。掲載したのは14号溝出土の須恵器甕2点、土師器台付甕1点、甕壺1点と、14・15号溝出土の須恵器杯1点、敲石1点、磨石1

第3章 笠松遺跡の調査の成果

点である。その他小破片として、14号溝出土には土師器甕壺類1点、須恵器器種不明1点、14・15号溝出土には須恵器杯椀類1点、同甕壺類1点が出土している。

出土遺物に中世以降のものはないが、後述するように古い15号溝から近世の遺物が出土しているの、それを重視すれば近世以降のものである。

15号溝(第38・39図、PL. 16-6)

14号溝と重複し、その東側にわずかに見えている溝である。本溝が古い。

長さは7.80m分を確認した。幅は14号溝と重複するので不明であるが、深さは0.53mである。方向はやや不明確だがN-28°-Wである。断面形は逆台形である。

遺物は14・15号溝出土は前項で述べたとおりであり、その他に15号溝出土の小破片として土師器器種不明2点、須恵器杯椀類3点、同甕壺類2点、同器種不明1点、近世在地系土器焙烙鍋類1点が出土している。

出土遺物が小破片ばかりなので断定するのは躊躇するが、近世の遺物が出土していることを重視すれば、この溝の埋没時期は近世以降ということになる。

16号溝(第32・33図、PL. 15-5)

調査区中央南寄りを東西に横断する、くの字型の溝である。9、10、13、18、20、22号溝と重複し、本溝は10、20号溝よりも新しく、9号溝より古い。

東西両端が調査区外に延びるが、中央付近で屈曲して全体としてのくの字型をしている。長さはいずれも直線で計測して、西端から屈曲部の中心点までが16.90m、そこから東端までが16.00mである。幅、深さ、底面の標高は、東半部は9号溝との重複のため不明であり、西半部しか計測できない。その西半部で計測して、幅は0.96～1.96m、深さは0.17～0.34mである。底面の標高は61.54～61.59mで、どちらかに傾いているということはない。方向は蛇行があるが両端を結んで、西半部はN-53°-E、東半部はN-87°-Eである。断面形は一定しないが、逆台形の部分が多い。

出土遺物はない。

17号溝(第40図)

調査区南端近くにある東西方向の溝である。3号溝と

6号溝とをつなぐ位置にあるが、新旧関係は不明である。

長さは9.00m、幅は0.25～0.50m、深さは0.03～0.11mで、方向はN-89°-Wである。断面形は浅い椀型である。底面の標高は西端で61.63m、東端で61.58mであり、その差は5cmだが、底面にはその程度の凹凸はあり、どちらが低いとは言えない。

出土遺物はない。

18号溝(第40図)

調査区南部西側にある北西-南東方向の溝である。北西端は16号溝と重複するが、新旧は不明である。

北西端は16号溝で途切れ、南東端は調査区外となる。調査区内では長さ10.72m分が調査できた。幅は1.14～1.44m、深さはごく浅く、最も深いところでも0.10mであり、不明瞭な溝である。方向はN-26°-Wである。底面の標高は北西端で61.73m、南東端で61.61mであり、その差は0.12mである。

出土遺物はない。

19号溝(第33・34図、PL. 16-7)

調査区中央南寄りの西端近くにある南北方向の溝であり、推定東山道駅路の路面を横切る位置にある。北端は1号溝と重複し、南端は9号溝と重複する。本溝は9号溝より新しいが、1号溝との新旧は不明である。ただし、非常に深くしっかりした溝であり、それが1号溝以北に延びていないのは不審なので、1号溝と同時存在である可能性が高いと考えられる。

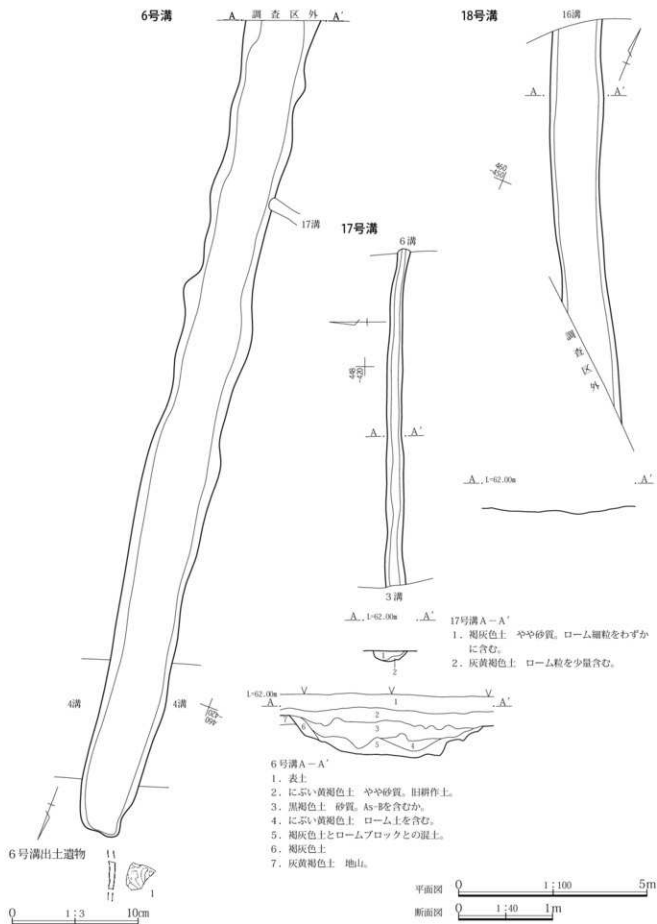
長さは11.10m、幅は1.30～2.12m、深さは0.63～0.80mである。方向は南部はN-18°-Eだが、北部はN-4°-Eに変わる。断面形は逆台形で、底面は平坦であり、きわめてしっかりとした形状である。土層を見ると埋土は南側から流れ込んでおり、人為的に埋められたらしい。底面の標高は北端で61.08m、南端で61.07mであり、差はほとんどない。

出土遺物はない。

遺物がないので時期を確定できないが、1号溝と同時期であれば、中世以降のものとなる可能性が高い。

20号溝(第32・33図、PL. 15-7)

調査区南寄りの西端にあり、10号溝の西側に重複して



第40図 笠松遺跡4区6・17・18号溝平面図、6号溝出土遺物

第3章 笠松遺跡の調査の成果

いる溝である。10号溝の項で述べたように、本来は24号溝と一連のものと考えられる。10号溝よりも古い。

長さはわずか4.20mが見えるにすぎない。幅も10号溝に壊され残存値で0.38m、深さは0.17mであり、方向は $N-21^{\circ}-E$ である。断面形は逆台形であるらしい。

出土遺物はない。

22号溝(第33・34図)

調査区中央南寄り、2号溝と16号溝の間をつなぐ位置にある短い溝で、両者との新旧は不明である。

長さはわずか1.92m、幅は0.87～0.94m、深さは0.16～0.24mで、方向は $N-32^{\circ}-W$ である。断面形は椀形ないし逆台形で、短いが比較的しっかりした溝である。

出土遺物はない。

23号溝(第33・34図、PL. 16-8)

調査区中央南寄りの西側にある南北方向の溝である。北端は1号溝、南端は9号溝と重複して途切れる。両者との新旧は不明である。

両端を結んだ長さは8.73m、幅は0.35～0.50m、深さは0.23～0.37mである。方向はやや湾曲し、中央部も途切れるが、両端の中央を結んだ線で計測して、 $N-4^{\circ}-E$ である。断面形はU字状で深い。底面の標高は北端で61.49m、南端で61.61mであり、南が高い。

出土遺物はない。

24号溝(第33・34図、PL. 16-3)

調査区中央南寄りにある南北方向の溝である。先述の通り20号溝の北延長部であると思われる。南端は2号溝と重複するが、新旧は不明である。

長さは5.62m、幅は0.34～0.48m、深さは0.06～0.22mで、方向は $N-7^{\circ}-E$ である。断面形は椀形か逆台形である。底面の標高は両端とも61.77mで差がない。

出土遺物はない。

25号溝(第41図、PL. 17-1)

調査区北端部の東側にある東西方向の溝である。北側に平行して古い溝が重複し、これは30号溝と名付けた。この付近では25、26、30、31号と4条の溝が並行している。西端で35号溝と重複するが、新旧は不明である。

長さは11.55mで両端は調査区外となる。幅は30号溝との重複で不明だが、残存するのは0.64～0.83m、深さは0.17～0.22mで、方向は $N-83^{\circ}-E$ である。断面形は浅いU字形である。底面の標高は東端で61.97m、西端で62.01mであり、その差はほとんどない。

遺物は小破片のみで、須恵器杯椀類1点、同表蓋類1点が出土している。

26号溝(第41図、PL. 17-1)

調査区北端部の東側にある東西方向の溝である。28、35号溝より古く、29号溝とは新旧不明である。

長さは24.68mで両端は調査区外に延びる。幅は0.50～0.90m、深さは0.08～0.90mで、方向は東側の大部分で $N-82^{\circ}-E$ であり、西端近くは $N-86^{\circ}-E$ となる。断面形は浅い逆台形である。底面の標高は西端で62.11m、東端で62.02mであり、その差は0.09mと小さい。

遺物は小破片のみで、須恵器杯椀類1点、同表蓋類1点が出土している。

27号溝(第41図、PL. 17-2・3)

調査区北端の西側近くにある南北方向の溝である。他の遺構との重複はない。

長さは10.14mで両端は調査区外に延びる。幅は1.01～1.19m、深さは0.39～0.44mで、方向は $N-4^{\circ}-W$ である。断面形は逆台形である。底面は緩やかな凹凸があり、どちらかに傾くということはない。

遺物は小破片のみで、土師器杯椀類3点、同器種不明1点、須恵器杯椀類1点、同器種不明1点、中世在地系土器皿2点、近世国産施軸陶器1点が出土している。近世の遺物が出土していることを重複すれば、この溝の埋没年代は近世以降ということになる。

28号溝(第41図、第19表)

調査区北部の西寄りにある南北方向の溝で、16号土坑、26、29、31号溝より新しく、36、41号溝とは新旧不明である。

緩やかに蛇行するが、両端を直線的に結ぶと長さは22.20mで、さらに両端は調査区外に延びる。幅は0.26～0.72m、深さは0.09～0.33mである。方向は $N-5^{\circ}-W$ から $N-16^{\circ}-E$ の間で蛇行する。断面形は逆

台形である。底面の標高は北端で61.95m、南端で61.92mであり、差はほとんどない。

出土遺物は中世から近世の焙烙と思われる在り系土器を1点掲載した。それ以外の遺物は出土していない。

29号溝(第42図、PL. 17-4)

調査区北部中央にある北西-南東方向の溝である。17号土坑、28、31、34、35号溝よりも古く、26号溝とは新旧不明である。

緩やかに蛇行するが、35号溝までを直線的に計測すると長さは36.85mである。北側はさらに調査区外に延びる。幅は0.98~1.22m、深さは0.09~0.21mで、方向はN-43°-WからN-30°-Wの間を蛇行する。断面形は浅い逆台形である。底面の標高は北端で62.04m、南端で61.72mであり、その差は0.32mであるが、埋土には水が流れたような形跡はない。

遺物は小破片のみで、土師器器種不明4点、須恵器杯椀類1点、同器種不明3点、中世国産焼締陶器1点、同在り系土器鉢類1点が出土している。埋没年代は中世以降と思われる。

30号溝(第41図、PL. 17-1)

調査区北端の東側にある東西方向の溝である。南側に同じ方向の25号溝が重複し、北壁がわずかに見えるにすぎない。

長さは8.60m分が見えるだけで両端は調査区外となる。幅は残存値で0.18~0.30m、深さはセクション図を実測したところで0.08mである。方向はN-83°-Eで25号溝と同じである。断面形は不明だが浅い。

出土遺物はない。

31号溝(第41図、PL. 17-1)

調査区北端の東側にある東西方向の溝である。西端で28、29、35号溝と重複し、本溝は29号溝より新しく、28号溝よりも古い。

長さは14.83mで両端は調査区外に延びる。幅は0.24~0.36m、深さは0.03~0.11mで、方向はN-83°-Eである。断面形は逆台形である。底面の標高は西端で62.14m、東端で62.16mであり、差はほとんどない。

遺物は須恵器甕壺類の小破片が1点出土しているだけ

である。

32号溝(第42図、PL. 17-5・6)

調査区中央やや北側にある南北方向の溝である。13号土坑、1、33、34号溝と重複し、本溝は13号土坑、33、34号溝より新しいが、1号溝とは新旧不明である。

緩やかに蛇行するが、両端を直線的に計測すると長さ30.18mであり、北端は調査区外に延びる。幅は0.38~0.80m、深さは0.06~0.46mである。方向はN-3°-EからN-21°-Eの間を蛇行する。断面形は逆台形である。底面の標高は北端で61.95m、南端で61.57mであり、その差は0.38mであるが、埋土には水が流れたような形跡はない。

出土遺物はない。

33号溝(第33・34図、PL. 18-1・2)

調査区中央にある東西方向の溝である。32号溝と重複し本溝が古い。

長さは22.35mで西端は調査区外に延び、東端は攪乱で途切れている。幅は0.23~0.54m、深さは0.09~0.18mで、方向は両端を結ぶとN-80°-Eである。断面形は逆台形である。底面の標高は西端で61.86m、東端で61.69mであり、その差は0.17mである。埋土には水が流れたような形跡はない。

出土遺物はない。

34号溝(第42図、PL. 18-3・4)

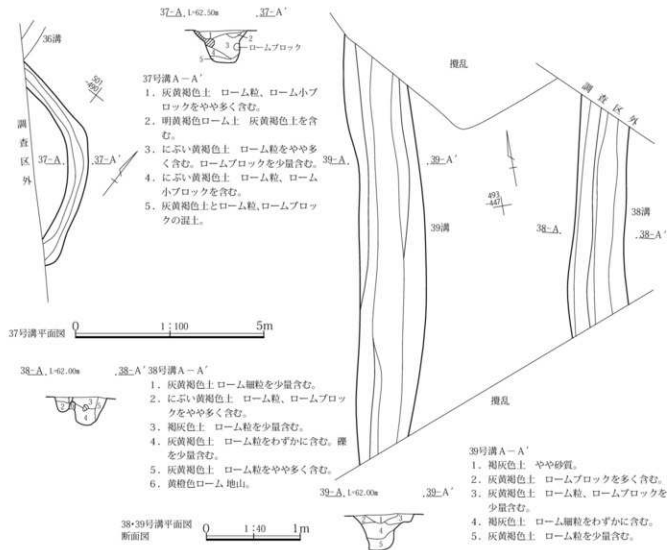
調査区中央やや北寄りや北東-南西方向に横切る大きな溝である。29、32、41号溝と重複し、本溝は29号溝より新しく、32、41号溝より古い。

長さは28.03mで両端は調査区外へ延びる。上幅は2.33~2.93m、底面幅は0.31~0.55m、深さは1.03~1.26mであり、方向はN-47°-Eで直線的に延びている。断面形は逆台形で全体に整った形態の溝である。土層を見ると少なくとも1回の掘り直しが認められる。底面の標高は北東端で60.93m、南西端で60.79mであり、その差は0.14mである。底面に砂を含む層が堆積しているが、豊富な水量があったような形跡はないので、水路的な役割をもっていたかどうかは不明である。

遺物は少なくいずれも小破片で、土師器甕壺類2点、

37号溝

38・39号溝



第43図 笠松遺跡4区37～39号溝平面断面図

同器種不明1点があるにすぎない。

中世の遺物が出土する29号溝よりも新しいので、この溝も中世以降のものと考えられる。

35号溝(第42図)

調査区北端の中央にある南北溝である。北半で25、26、29、31号溝と重複し、本溝は26、29号溝より新しい。

長さは13.92mで北端は調査区外に延びる。幅は0.34～0.67m、深さは0.07～0.23mで、方向はN-2°-EからN-20°-Wの間を緩やかに蛇行する。断面形は浅い椀形である。底面の標高は北端で62.14m、南端で61.96mであり、その差は0.18mである。埋土には水が流れたような痕跡はない。

出土遺物はない。

36号溝(第41図)

調査区北部の西側にある南北方向の溝である。28号溝から分岐している形であり、新旧関係は不明である。

長さは6.85mで南端は調査区外へ延びる。幅は0.26～0.47m、深さは0.03～0.18mで、方向はN-8°-Wである。断面形は逆台形の部分が多い。

出土遺物はない。

37号溝(第43図, PL. 18-5)

調査区北部の西側にあり、調査区内には三日月形にかけ両端は調査区外となる。他の遺構との重複はない。

長さは両端を直線的に計測して5.42m、幅は0.38～0.59m、深さは0.15～0.34mである。断面形は逆台形である。底面の標高は北西端で61.92m、南東端で61.73

第3章 笠松遺跡の調査の成果

mであり、その差は0.19mであるが、埋土には水が流れたような形跡はない。

出土遺物はない。

38号溝(第43図、PL. 18-6)

38、39号溝は調査区中央東側にある、平行する溝である。両端は攪乱と区境にかかり、わずかな長さしか調査できなかった。いずれも他の遺構との重複はない。

長さはわずかに2.57m分がみえるだけであり、幅は0.52～0.64m、深さは0.29～0.43mで、方向はN-13°-Eである。断面からみると2条の溝が重複しているらしい。底面の標高は北端で61.49m、南端で61.25mであり、その差は0.24mでほかの溝に比べてやや傾斜が強い。

出土遺物はない。

39号溝(第43図、PL. 18-7)

38号溝の西側に平行している南北方向の溝である。

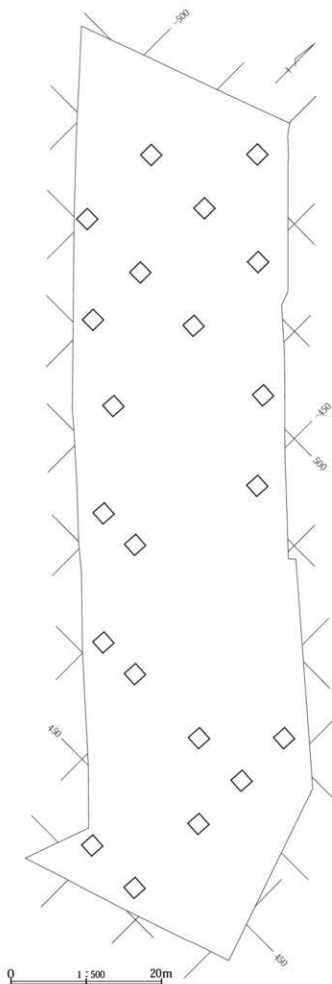
長さは4.54m、幅は0.54～0.70m、深さは0.32～0.38mで、方向はN-10°-Eである。断面形はやや不整な逆台形である。底面の標高は北端で61.43m、南端で61.44mであり、差はほとんどない。

出土遺物はない。

41号溝(第42図、PL. 18-8)

調査区北部の西寄りにある北西-南東方向の溝である。調査時に「1号流路」と呼称していたことから分かるように、浅く不明瞭な形態であり、人為的なものかどうか疑問がもたれたが、ほぼ直線的に延びていることから溝の底部がわずかに残ったものと判断し、「41号溝」と改称して報告する。8、11、12号土坑、28、34号溝、3、8、20号ピットと重複し、34号溝よりも新しいが、その他の遺構との新旧は不明である。

長さは30.42mで、両端は溝によって切られており、それより延びているかどうかは不明である。幅は2.23～2.84m、深さは0.05～0.21mである。方向はN-37°-Wでほぼ直線的に延びている。断面形は浅い皿状で、全体に浅く掘り込みは不明瞭である。底面の標高は北西端で62.05m、南東端で61.86mであり、その差は0.19mである。



第44図 笠松遺跡4区旧石器調査ピット配置図

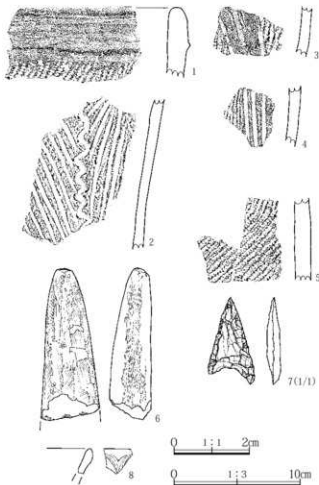
遺物はいずれも小破片で、土師器器種不明3点、須恵器杯碗類8点、同表甕類1点が出土している。

7 旧石器時代の調査

旧石器時代の調査は2m×2mの調査ピットを、第44図のような位置に設定して行った。空白の部分があるのは、遺構を避けたためである。ピットは合計21ヶ所であり、調査した面積は84㎡となる。調査の結果、いずれのピットからも遺構、遺物とも出土しなかった。

8 遺構外出土の遺物

遺構外から出土した遺物もあまり多くはない。ここでは縄文土器5点と石器2点、龍泉窯系青磁1点を掲載した。その他小破片として、土師器杯碗類2点、同表甕類4点、同器種不明18点、須恵器杯碗類13点、同表甕類6点、同器種不明1点、中世在地系土器皿4点、同器種不明1点、近世国産磁器2点、同国産施釉陶器3点、同在地系土器焙烙1点が出土している。



第45図 笠松遺跡4区遺構外出土の遺物

第4節 笠松遺跡5区

笠松5区は平成22年度と24年度の2カ年度にわたって調査されているため、5-1、5-2、5-3区の3区画に分かれている。5-3区の南半分は掘削により破壊されて遺構は残っていない。調査した遺構の数は、土坑14基、井戸3基、溝10条、落ち込み1ヶ所、ピット30基である。

1 土坑

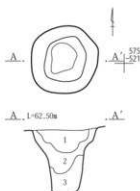
土坑は5-2区、5-3区で合計14基調査した。各土坑の規模などについては第14表にまとめたとおりである。なお、1号土坑は井戸なので「3号井戸」と改称し、16号土坑は掘削のため欠番とした。

4～14号土坑は5-2区の南東側に集中して存在している。しかもそのうちの長方形に近い形の土坑(7～14号土坑)は、主軸方位が近いあるいは直交しているものが多く、埋土も黒褐色土あるいは暗褐色土と共通するので、それらは近い時期のものである可能性が高い。このような長方形に近い形態の土坑は近世以降のいわゆるイモ穴であることが多く、それらは竈の周縁部に作られることが多い。これらの土坑に方向を同じくし、7・9・11・12号土坑のように直線的に並んでいるものがあるのはそのためであると考えることができよう。出土遺物が少ないので個々の土坑の時期を特定することはできないが、以上のことが正しいとすれば、近世以降のものであろう。

2号土坑(第46図、PL. 20-1)は5-3区にあり、5号溝と重複するが、新旧は不明である。円形に近い形状で、深いので、柱穴である可能性もあるが、近くと同様のものは見あたらない。3号土坑(第46図、PL. 20-2)も5-3区にある。区界にかかるが、長方形あるいは方形であるらしい。両者とも遺物が出土せず、時期は明らかではない。

5号土坑(第46図、PL. 20-3)は5-2区にあり、方形の土坑であるが、先述のイモ穴と推定される土坑と埋土が共通するため、これも近世以降と思われる。6号土坑(第46図、PL. 19-5)は5号土坑のすぐ東にある細長い土坑である。これも埋土が同じで、しかも十能瓦の小

2号土坑



2号土坑

1. 黒褐色土 粘性、締まりあり。
2. 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量含む。粘性、締まりあり。
3. 褐色土 黄褐色土ブロックを少量含む。粘性やや強い。締まりあり。

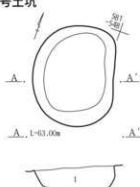
3号土坑



3号土坑

1. 表土 現耕作土。暗褐色土。
2. 暗褐色土 旧耕作土。
3. 暗褐色土 黄褐色土ブロックを微量含む。粘性強い。締まり強い。
4. 暗褐色土 3層に類似するが、黄褐色土ブロックをやや多量に含む。
5. 暗褐色土と黄褐色土の混土。
6. 暗褐色土 黄褐色土粒を少量含む。粘性、締まりややあり。

5号土坑

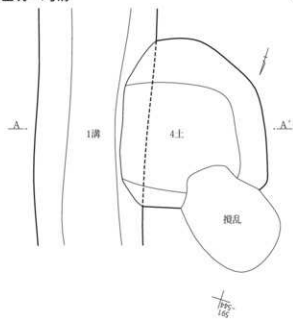


5号土坑

1. 黒褐色土 粒子細かく、粘性、締まりなし。黄褐色ロームブロックをやや多く含む。

0 1:40 1m

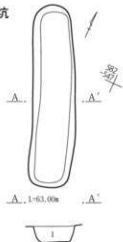
4号土坑・1号溝



1号溝・4号土坑

1. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性なし。締まりややあり。にふい黄褐色ロームブロックを含む。1号溝。
2. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性なし。締まりややあり、明黄褐色ローム小ブロックを含む。1号溝。
3. 黒褐色土 粒子やや細かく、粘性少しあり。締まりややあり。明黄褐色ローム小ブロックを多く含む。1号溝。
4. にふい黄褐色土 粒子細かく、粘性なし。締まり弱い。明黄褐色ロームブロックを多く含む。4号土坑。
5. にふい黄褐色土 粒子細かく、粘性少しあり。締まりややあり。明黄褐色ロームブロックを非常に多く含む。4号土坑。

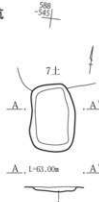
6号土坑



6号土坑

1. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。黄褐色ロームブロックをやや多く含む。

8号土坑



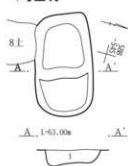
10号土坑

1. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。にふい黄褐色土ブロックを含む。

8号土坑

1. 暗褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。黄褐色ロームブロックを少し含む。

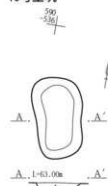
7号土坑



7号土坑

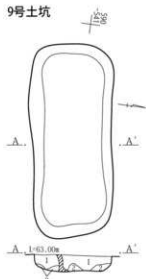
1. 黒褐色土 粒子細かく、粘性、締まりなし。黄褐色ロームブロックをやや多く含む。

10号土坑



第46図 笠松遺跡5区2～8・10号土坑平断面図

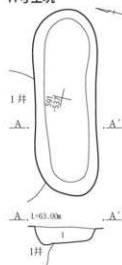
9号土坑



9号土坑

1. 黒褐色土 粒子やや細かく、粘性、締まりなし。褐色ローム粉を含む。
2. 黒褐色土 粒子細かく、粘性、締まりなし。褐色ロームブロックをやや多く含む。

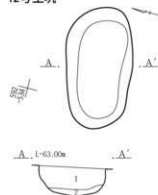
11号土坑



11号土坑

1. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。黄褐色ローム小ブロックを含む。

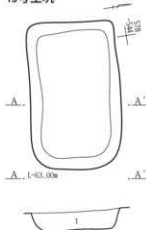
12号土坑



12号土坑

1. 暗黄褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。にぶい黄褐色ロームブロック、明黄褐色ロームブロックを含む。
2. 黒褐色土 粒子やや細かく、粘性、しまりなし。にぶい黄褐色ロームブロックを含む。

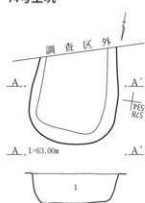
13号土坑



13号土坑

1. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。明黄褐色ロームブロックを多く含む。

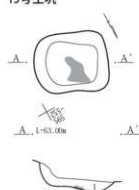
14号土坑



14号土坑

1. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。明黄褐色ロームブロックを多く含む。

15号土坑



15号土坑

1. 黒褐色土 粒子粗く、粘性なし。締まりややあり。As-B軽石、黄褐色ロームブロック、焼土ブロック、炭化物を含む。

0 1:40 1m

第47図 笠松遺跡5区9・11～15号土坑断面図

第14表 笠松遺跡5区土坑一覧表

番号	所在グリッド	主軸方位	大きさ(m)		備考 (内は小破片のため未掲載の遺物数)
			長辺×短辺×深さ		
2	570-520	N-3° -E	0.72×0.69×0.68		2溝と重視。新旧不明
3	555-535	N-9° -W	[0.60]×[0.45]×0.34		
4	585-540	N-14° -W	1.80×1.52×0.44		1溝より古。
5	575-545	N-15° -W	1.07×0.94×0.25		
6	580-545	N-25° -W	1.93×0.45×0.17		(十能瓦1点)
7	585-540	N-75° -E	1.08×0.52×0.17		8溝と重視。新旧不明。
8	585-540	N-11° -W	0.71×0.47×0.06		7溝と重視。新旧不明。
9	585-535	N-79° -E	2.03×0.82×0.18		
10	585-535	N-15° -W	0.87×0.48×0.11		
11	590-535	N-77° -E	1.97×0.64×0.17		1井より新。(土師器器種不明1点)
12	590-530	N-84° -E	1.30×0.71×0.31		(時期不詳土器2点)
13	575-540	N-85° -E	1.57×0.96×0.19		
14	575-530	N-3° -W	[0.98]×0.91×0.29		
15	590-550	N-63° -W	0.78×0.61×0.24		6溝と重視。新旧不明。

破片が出土しているため、近世以降のものである。4号土坑(第46図、PL. 19-4)も5-2区にある。底面の形から見ると方形であるらしい。埋土がイモ穴と推定されるものと違い、1号溝よりも古いので、時期が異なるものと思われるが、遺物は出土していない。15号土坑(第47図、PL. 21-7)は6号溝と重複するが、新旧は不明である。埋土にAs-Bを含むので古代末～中世頃のものと思われる。底面付近に焼土が見られ、埋土に炭化物を含むのが特徴的であるが、遺物は出土していない。

2 井戸

井戸は3基調査した。

1号井戸(第48図、PL. 20-5)

5-2区東側にあり、11号土坑より古い。確認面では長径1.46m、短径1.26mの、本遺跡の中ではやや小さな素掘りの井戸である。深さは1.57mで底面の標高は61.33mである。壁は急角度に掘られており、地下水の湧出に伴うえぐれは見られない。埋土にはロームを多く含み、人為的に埋められていると思われる。

出土遺物は土師器杯椀類の小破片が1点出土しているのみであり、これのみでは時期を特定できない。

2号井戸(第48図、第19表、PL. 20-6)

5-2区の西側にある。確認面ではほぼ円形で、長径2.24m、短径2.14mの素掘りの井戸である。深さは2.82mで、底面の標高は59.89mである。壁は湧水によるえぐれが顕著で、断面は複雑な形状になっている。埋土にはロームブロックを含み、人為的に埋められていると思われるが、最上層の1・2層は不自然な形態であり、あるいは上面に別の土坑が重複している可能性も考えられる。2層には多くの石を含んでいる。

遺物は少ないが、中世の常滑陶器甕1点と在地系土器火鉢1点を掲載した。その他の出土遺物はない。この遺物からみて中世以降の井戸であると思われる。

3号井戸(第48図、PL. 20-7)

5-3区の西側にある。確認面では長径2.19m、短径1.81mの楕円形の素掘りの井戸である。深さは1.95mで、底面の標高は60.61mとやや高い。壁は、深さ0.20～0.60

mまでは傾斜が緩やかであるが、それ以下は垂直に掘られている。この緩やかな部分は崩れたものと考えられる。埋土は7層は自然堆積のようだが、それより上層は人為的に埋められていると考えられる。上層には多くの礫を含んでいる。

出土遺物はなく、時期は明らかではない。

3 溝

溝は10条調査した。

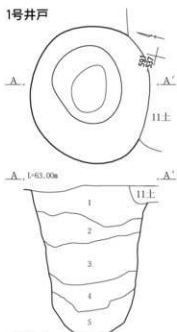
1号溝(第49・51～53図、第19表、PL. 21-8, 22-1～4, 33)

5-2区、5-3区にある南北方向の溝である。その位置・方向からみて5-1区の7号溝はこの溝と一連のものであろう。4号土坑、2、4、5、6、10号溝と重複し、本溝は4号土坑、2、4、5号溝よりも新しく、6号溝より古い。10号溝は1-Cセクションをみると、1号溝と同時存在と思われる。

北半部が西に湾曲するが、長さは両端を直線的に結ぶと54.20mであり、南端はさらに調査区外へ伸び、北端は7号溝へとつながる。南端から7号溝北端まで直線的に結ぶと、72.10mである。幅は0.80～2.68mで北側が細い。深さは0.22～0.48mで、断面は途中で稜があるが逆台形の部分が多い。5-3区では多くの凹みがみられるが、この付近は攪乱が多く入っているため、この凹みはそれと溝とを認識してしまった可能性もある。方向は最南部はN-5°-Wであり、北に行くに従って西に曲がり、北端ではN-67°-Wとなる。底面の標高は北端で62.75m、南端で62.13mである。その差は0.62mであり、水が流れていたとすれば、周囲の傾斜と同じく北から南となるが、埋土に砂などを含まず、水が流れていた痕跡はみられない。

出土遺物は比較的多い。掲載したのは、渥美陶器の甕3点(1は12世紀末～13世紀初頭、2・3は12世紀～13世紀初頭)、中世の常滑陶器で甕と思われる破片1点、在地系土器片口鉢3点(5・7は14世紀中頃、6は中世)、板碑1点、宝篋印塔1点、砥石1点であり、すべて中世のものと思われる。その他小破片として、土師器杯椀類1点、同器種不明14点、須恵器杯椀類14点、同甕甕類1点、中世産焼締陶器3点、近現代陶磁器1点、時期不詳土

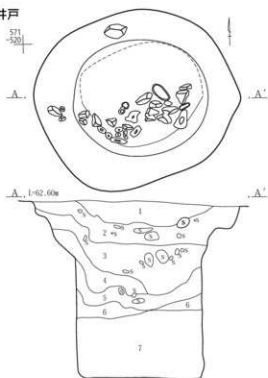
1号井戸



1号井戸

1. 黒褐色土 明黄褐色ロームブロックを多く含む。
2. 暗褐色土 明黄褐色ロームブロックを少し含む。
3. 暗褐色土と明黄褐色ロームブロックの互層。
4. 黒褐色土 明黄褐色ロームブロックを少し含む。
5. 黒褐色土と明黄褐色ロームブロックの互層。

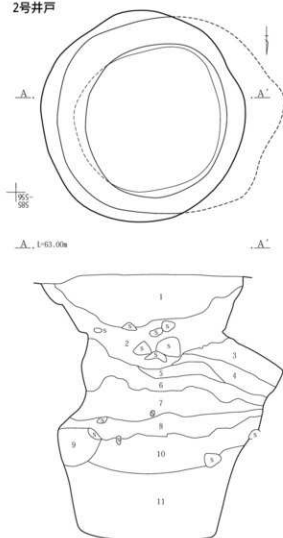
3号井戸



3号井戸

1. 黄褐色土 粘性あり。締まりややあり。
2. 暗褐色土 粘性、締まりややあり。
3. 暗褐色土 2層に類似するが、黄褐色土ブロックを多量に含む。
4. 暗黄褐色土 暗褐色土をブロック状に含む。粘性、締まりあり。
5. 暗黄褐色土 4層に類似するが、暗褐色土を含まない。
6. 黄褐色土 粘性、締まりあり。
7. 黄褐色土と黒褐色土とが相互に層を成して堆積。粘性、締まり強い。

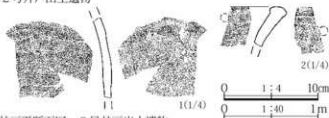
2号井戸



2号井戸

1. 黄褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。ロームブロック主体。
2. にぶい黄褐色土 粒子細かく、粘性、締まりなし。にぶい黄褐色ロームブロック、暗褐色土ブロックを含む。
3. 暗褐色土 粒子細かく、粘性、締まりなし。明黄褐色ロームブロックを含む。
4. 黒褐色土 粒子細かく、粘性弱い。締まりなし。明黄褐色ロームブロックを多く含む。
5. 暗褐色土 粒子細かく、粘性弱い。締まりなし。明黄褐色ローム小ブロックを含む。
6. にぶい黄褐色土 粒子やや細かく、粘性弱い。締まりなし。明黄褐色ローム小ブロックを多く含む。
7. 黒褐色土 粒子やや粗かく、粘性弱い。しまりなし。明黄褐色ロームブロックを含む。
8. 暗褐色土
9. 疎層 黄褐色ロームブロックを含む。
10. 暗褐色土 黄褐色ロームブロックを多く含む。
11. 砂礫層

2号井戸出土土物



第48図 笠松遺跡5区1～3号井戸平面図、2号井戸出土土物

第3章 笠松遺跡の調査の成果

器類6点が出土している。遺物の出土数からみて溝の埋没年代は中世であり、近現代の陶磁器は混入であろう。

2号溝(第55図、Pl. 21-8, 22-1)

5-3区中央部にある東西方向の溝である。西側は調査区外となり、東側は途切れている。1、3号溝と重複し、本溝はいずれよりも古い。

長さは11.62mである。幅は0.46~0.85mでやや広狭があり、深さは0.09~0.23mで全体に浅く、あまりしっかりした溝ではない。断面形は底面のやや広い逆台形である。方向は西半部がN-86°-E、東半部はやや北に曲がりN-79°-Eである。底面の標高は西端部で62.33m、東端部で62.39mで、その差は0.06mとわずかである。一方が途切れている形状から、水を流すものとは考えられず、何らかの区画溝ではないかと思われる。

出土遺物はないが、1号溝よりも古いので、中世かそれ以前に測るものである。

3号溝(第55図、Pl. 21-8, 22-1・5)

5-3区の中央にある北西-南東方向の短い溝である。2号溝と重複し、本溝が新しい。

長さはわずか6.34mで北西端は途切れ、南東端は攪乱と重複する。幅は0.34~0.74m、深さは0.07~0.20mで、断面形は浅い逆台形である。方向はN-46°-Wである。底面の標高は北西端で62.40m、南東端で62.34mで、その差は0.06mであるが、埋土には砂を含まず、水が流れていたとは思えない。

出土遺物はないので時期の特定はできない。

4号溝(第54図、Pl. 22-6)

5-3区の北端近くにある北西-南東方向の溝である。北西側は調査区外となるが、延長部は5-2区では確認できなかった。南東側は途切れている。1、5号溝と重複し、本溝は5号溝よりも新しく、1号溝よりも古い。

長さは両端を直線的に結ぶと14.49m、幅は0.29~0.50m、深さはビット状に深いところを除いて0.12~0.26mであり、断面形は逆台形である。方向はやや蛇行し、西部がN-84°-W、中央部がN-70°-W、東部がN-75°-Wである。底面の標高は北西端で62.45m、

南東端で62.53mであり、その差は0.08mだが、底面には凹凸があり、どちらが高いということはない。

出土遺物はないので時期は特定できないが、1号溝よりも古いので、中世かそれ以前に測るものである。

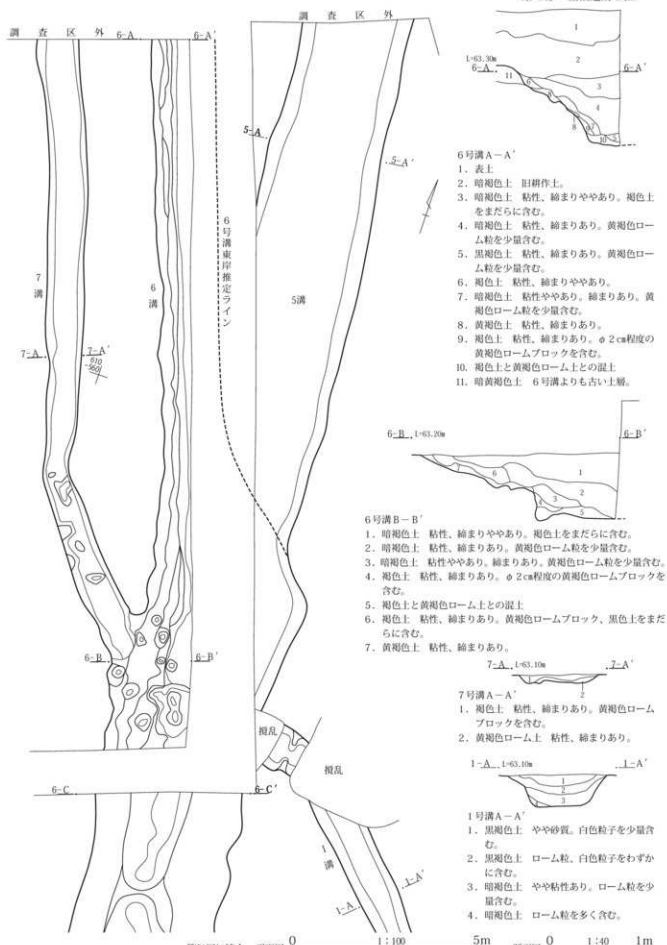
5号溝(第49~51・54図、Pl. 23-1~3)

5-2区と5-3区にまたがる溝で、5-2区の南西隅で直角に曲がる。5-2区の調査時には、この溝があまりに浅く壁が不明瞭であったため、人為的ではないと考えて「1号流路」と呼んで調査した。しかし、その位置と方向から5-3区の5号溝と一連であることは間違いなく、なおかつ直線的に延びて直角に曲がっているという形態からみれば自然にできたものとは考えられず、人為的に掘られていることは確実視されるため、5-2区の部分についても5号溝と改称して報告することにした。2号土坑、1、4、6号溝と重複し、2号土坑とは新旧不明であるが、3条の溝よりは本溝が古い。5-1区にある6号溝との重複は、調査時点では明確には確認できなかったが、6号溝が5-2区にもかかり、しかもそれが5号溝より新しいことは断面から明らかであるため、6号溝の平面形は第49・51図の破線で示したように推定した。なお、東端部の底面にある四角い凹みは、溝よりも古い時期の土坑である可能性がある。

長さは、5-2区の南北方向の部分で調査区にかかる部分を計測すると50.00m、5-2区と5-3区にまたがる東西方向の部分でやはり調査区にかかる部分を計測すると33.85mである。幅は2.35~4.05m、深さはほとんどないところもあるが、最も深いところで0.30mである。断面形は血状の部分が多い。方向は南北方向の部分でN-7°-W、東西部分でN-84°-Eであり、ほぼ直角になっている。底面の標高は北端で62.99m、南西の角で62.48m、東端で62.37mであり、周辺の地形と同様、北が高く南東が低い。埋土には砂を含まず、水が流れていた痕跡は確認できない。直角に曲がっていることからみて何らかの区画溝である可能性が考えられるが、溝内に特別なものはなく、溝自体も不明瞭なものでその性格は明らかにはしがたい。

出土遺物はいずれも小破片で、土師器杯椀類1点、須恵器杯椀類1点、時期不詳土器片4点が見られるにすぎず、時期は特定できないが、1号溝よりも古いので、中

第4節 笠松遺跡5区



6号溝 A-A'

1. 表土
2. 暗褐色土 旧耕作土。
3. 暗褐色土 粘性、締まりややあり。褐色土をまだらに含む。
4. 暗褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色ローム粒を少量含む。
5. 黒褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色ローム粒を少量含む。
6. 褐色土 粘性、締まりややあり。
7. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりあり。黄褐色ローム粒を少量含む。
8. 黄褐色土 粘性、締まりあり。
9. 褐色土 粘性、締まりあり。φ2cm程度の黄褐色ロームブロックを含む。
10. 褐色土と黄褐色ローム土との混土
11. 暗黄褐色土 6号溝よりも古い土層。

6号溝 B-B'

1. 暗褐色土 粘性、締まりややあり。褐色土をまだらに含む。
2. 暗褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色ローム粒を少量含む。
3. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりあり。黄褐色ローム粒を少量含む。
4. 褐色土 粘性、締まりあり。φ2cm程度の黄褐色ロームブロックを含む。
5. 褐色土と黄褐色ローム土との混土
6. 褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色ロームブロック、黒色土をまだらに含む。
7. 黄褐色土 粘性、締まりあり。

7号溝 A-A'

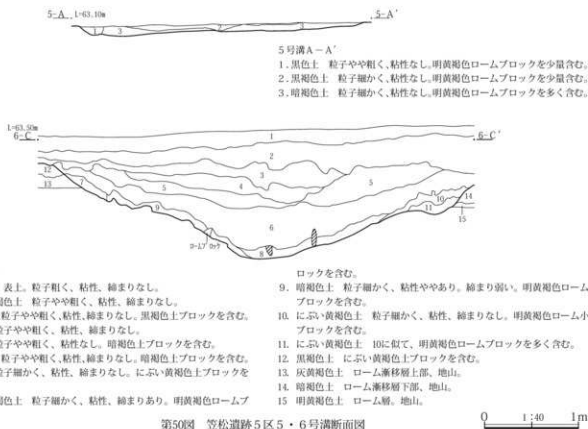
1. 褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色ロームブロックを含む。
2. 黄褐色ローム土 粘性、締まりあり。

1号溝 A-A'

1. 黒褐色土 やや砂質。白色粒子を少量含む。
2. 黒褐色土 ローム粒、白色粒子をわずかに含む。
3. 暗褐色土 やや粘性あり。ローム粒を少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。

第51図に続く 平面図 0 1:100 5m

第49図 笠松遺跡5区1・5号溝北端部、6・7号溝平面図



5号溝A-A'

1. 黒色土 粒子やや粗く、粘性なし、明黄褐色ロームブロックを少量含む。
2. 黒褐色土 粒子細かく、粘性なし、明黄褐色ロームブロックを少量含む。
3. 暗褐色土 粒子細かく、粘性なし、明黄褐色ロームブロックを多く含む。

6号溝C-C'

1. 暗褐色土 表土。粒子粗く、粘性、締まりなし。
2. にぶい黄褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。
3. 暗褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。黒褐色土ブロックを含む。
4. 黒色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。
5. 黒色土 粒子やや粗く、粘性なし。暗褐色土ブロックを含む。
6. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。暗褐色土ブロックを含む。
7. 褐色土 粒子細かく、粘性、締まりなし。にぶい黄褐色土ブロックを含む。
8. にぶい黄褐色土 粒子細かく、粘性、締まりあり。明黄褐色ロームブロックを含む。
9. 暗褐色土 粒子細かく、粘性ややあり。締まり弱い。明黄褐色ロームブロックを含む。
10. にぶい黄褐色土 粒子細かく、粘性、締まりなし。明黄褐色ロームブロックを含む。
11. にぶい黄褐色土 10に似て、明黄褐色ロームブロックを多く含む。
12. 黒褐色土 にぶい黄褐色土ブロックを含む。
13. 灰黄褐色土 ローム層移層上部、地山。
14. 暗褐色土 ローム層移層下部、地山。
15. 明黄褐色土 ローム層、地山。

第50図 笠松遺跡5区5・6号溝断面図

0 1:40 1m

世かそれ以前に溯るものである。

6号溝(第49～51図、PL. 23-4)

5-1区の東壁にそった位置にある南北方向の溝である。5-1区では溝の西壁が分かり、南東隅でやや広くなる。5-2区では、先述のように、その存在が明確に確認できなかったが、破線で示した部分が6号溝だと考えられ、幅が広い。北端は調査区外に延びるが、位置、方向、規模からみて堀籠遺跡3区の2号溝が北延長部に相当する。15号土坑、1、5、7号溝と重複し、15号土坑とは新旧不明だが、1、5、7号溝より新しい。

長さは北端から南端の推定線までを計測すると30.00m、幅は5-2区の部分で3.56～4.74m、深さは0.52～0.80mである。断面形は5-2区のC-C'セクションをみると逆三角形である。方向は、5-2区の部分ではN-7°-Wである。5-1区の部分では不明であるが、やや西に振れるらしい。底面の標高は北端で62.50m、5-1区の南東隅で62.27m、5-2区の最も深いところでは62.19mである。南端が途切れているため水が流れていたとは思えないが、何に用いられた溝かは不明確

である。

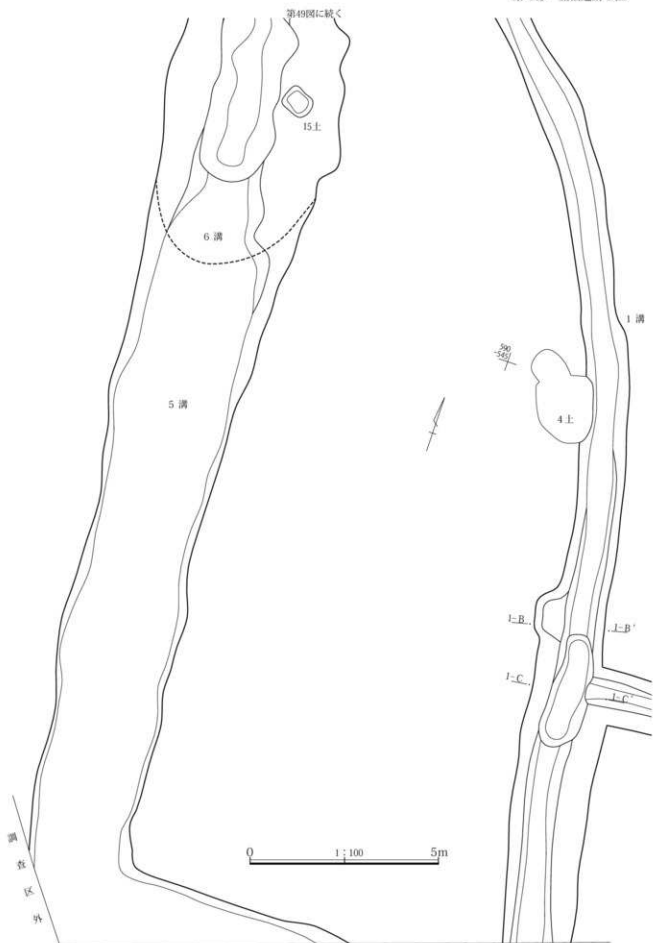
出土遺物は須恵器杯碗類の小破片が1点出土しているのみであり、時期は明確にできないが、1号溝より新しいので、中世以降のものであることは確実である。

7号溝(第49図、PL. 23-4)

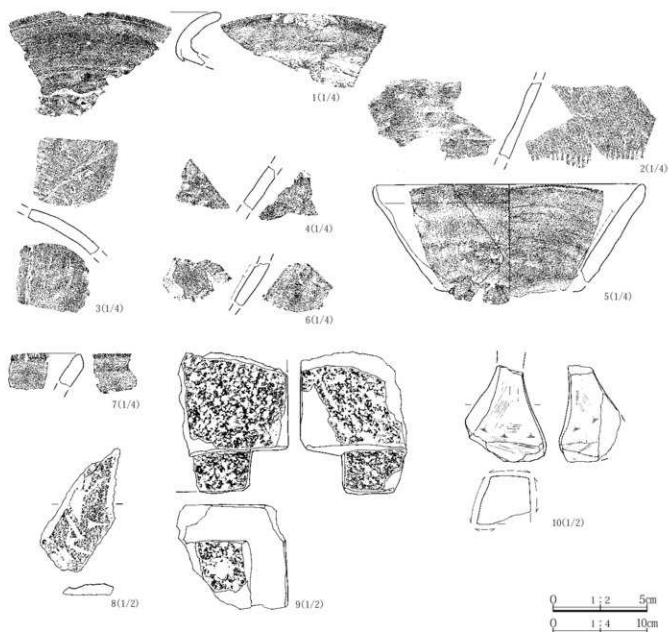
5-1区にある南北方向の溝である。先述のように、位置・方向から考えて1号溝の北延長部だと思われる。南端で6号溝と重複し、本溝が古い。北端は調査区外に延びる。

長さは南北両端を直線的に結ぶと16.40mである。幅は0.65～1.12m、深さは0.10～0.19mで1号溝よりも浅いが、これは上面を削平されているためであろう。断面形は皿形あるいは浅い逆台形である。方向は一度屈曲しており、南端部はN-36°-W、北部は北に向きを変えN-15°～20°-Wである。底面の標高は北端で63.05m、南端で62.84mであり、その差は0.21mである。

出土遺物はないが、1号溝と一連であることは間違いなく、中世のものと思われる。



第51図 笠松遺跡5区1・5号溝中央部、6号溝南端部平面図



第53図 笠松遺跡5区1号溝出土遺物

8号溝(第56図、PL. 23-5~7)

5-1区と5-2区の西部にある南北方向の溝である。9号溝と重複し、本溝が古い。南北両端は調査区外に延びるが、南端部は攪乱のため不明瞭であった。

長さは南端部を破線のように推定して24.85mである。幅は0.56~0.92m、深さは0.07~0.20m。断面形はやや不整形である。方向は5-1区の部分は $N-16^{\circ}-W$ で、5-2区の部分では $N-10^{\circ}-W$ である。底面の標高は北端で62.98m、南端で62.67mであり、その差は0.31mある。

出土遺物はなく、時期は不明である。

9号溝(第56図、PL. 23-5・6)

5-1区と5-2区にまたがり、8号溝の東側に平行する南北方向の溝で、南端で西に大きく屈曲する。8号溝と重複し、本溝が新しい。北端部は途切れ、南端は西に屈曲して調査区外に延びる。

長さは南北部分が22.83m、南端の屈曲した東西部分が3.84mである。幅は0.18~0.94m、深さは0.03~0.34mであり、5-1区が細く浅いが、これは削平によるものと思われる。断面形は楕円形あるいは逆台形である。方向は、南北方向部分の北半が $N-19^{\circ}-W$ 、南半は $N-23^{\circ}-25^{\circ}-W$ 、東西方向部分は $N-88^{\circ}-E$ であり、や

上B



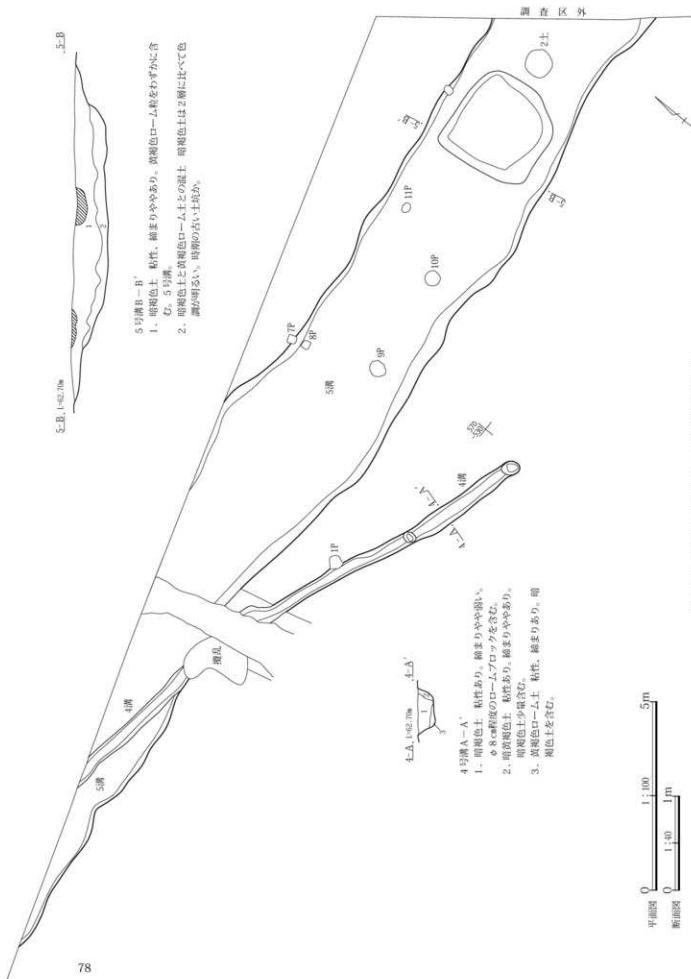
5号溝B-B'

1. 暗褐色土 粘性、粘まりややあり。黄褐色ローム粒をわずかに含む。5号溝。
2. 暗褐色土と黄褐色ローム土との混土。暗褐色土は2層に比べて色が明ない。4号溝の古い土状か。



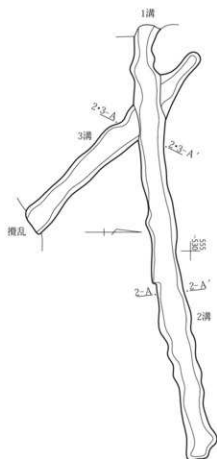
4号溝A-A'

1. 暗褐色土 粘性あり、粘まりやや強い。
φ8cm程度のロームブロックを含む。
2. 明黄褐色土 粘性あり、粘まりややあり。
暗褐色土少量含む。
3. 黄褐色ローム土 粘性、粘まりあり。暗褐色土を含む。



第54図 笠松遺跡5区4号溝、5号溝南部平衡断面図

2・3号溝



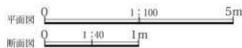
2号溝 A-A'

1. 暗褐色土 粘性やや弱い。締まりややあり。黄褐色ロームブロックを少量含む。

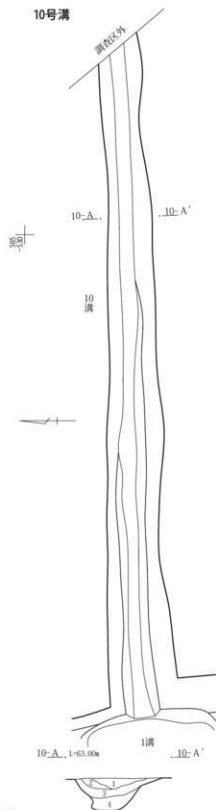


2・3号溝 A-A'

1. 暗褐色土 粘性、締まりややあり。黄褐色ローム粒をわずかに含む。3号溝。
2. 暗黄褐色土 粘性、締まりあり。暗褐色土をわずかに含む。2号溝。
3. 暗褐色土 粘性やや弱い。締まりややあり。2号溝。
4. 暗褐色土 1層に似るが、黄褐色ロームブロックを少量含む。2号溝。
5. 暗黄褐色土 粘性、締まりあり。2号溝。



10号溝



10-A, l=63.00m

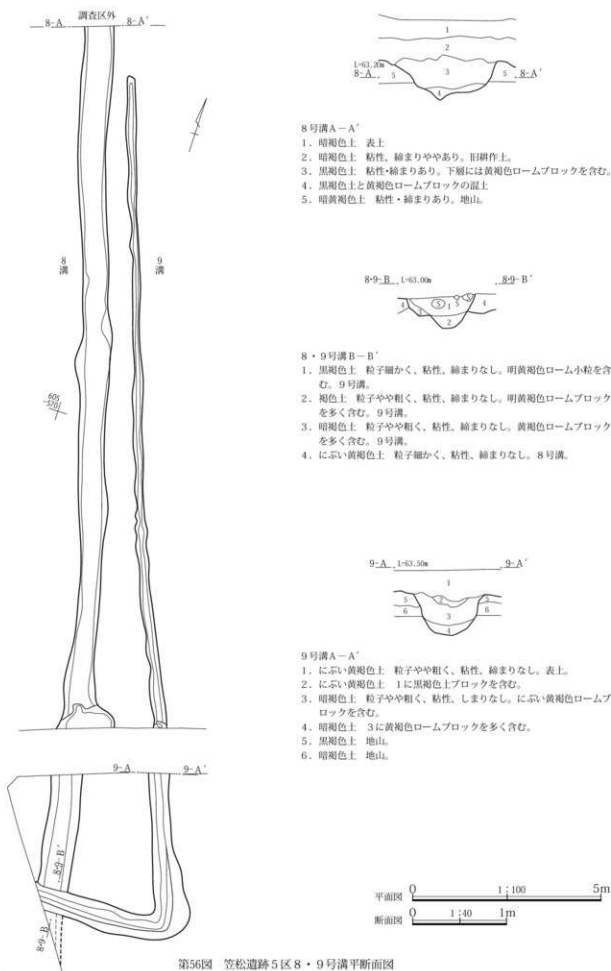


10号溝 A-A'

1. 暗褐色土 粒子細かく、粘性なし。締まり強い。
2. 暗褐色土 粒子細かく、粘性なし。締まり強い。にぶい黄褐色ロームブロックを多く含む。
3. 暗褐色土 粒子細かく、粘性なし。締まり弱い。にぶい黄褐色ロームブロックをわずかに含む。
4. にぶい黄褐色土 粒子細かく、粘性、締まりなし。明黄褐色ロームブロックを含む。

第55図 笠松遺跡5区2・3・10号溝平面断面図

第3章 笠松遺跡の調査の成果



第56図 笠松遺跡5区8・9号溝断面図

やや鋭角に曲がっている。底面の標高は北端で63.10m、屈曲部で62.67m、西端で62.56mである。やや鋭角に大きく曲がる点からみて、何らかの区画溝であると思われる。

出土遺物はなく、時期は不明である。

10号溝(第55図、PL. 24-1)

5-2区の南東部にある東西方向の溝である。1号溝と重複するが、同時存在であると思われる。

長さは14.55m、幅は0.78~1.44m、深さは0.33~0.46m。断面形はやや歪んだ逆台形で、深くしっかりとした溝である。方向は $N-89^{\circ}-E$ で直線的に延びる。底面の標高は西端で62.46m、東端で62.44mであり、その差はわずかである。

出土遺物はいずれも小破片で、土師器杯椀類1点、同裏甕類1点、須恵器杯椀類1点がある。中世の遺物の出土はないが、1号溝と同時存在であることから中世の溝と考えられる。

4 落ち込み

落ち込みと名付けた遺構は5-2区の西側にある。調査区に遺構の東側がわずかにかかるだけであり、溝である可能性もあるが、壁の形状がかなり不整形で溝と断定することもできないため「1号落ち込み」としたものである。

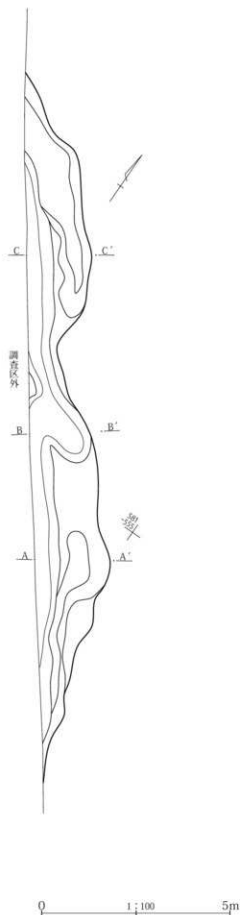
1号落ち込み(第57・58図、第20表、PL. 24-2, 33)

5-2区の西壁にかかっている遺構である。他の遺構との重複はない。

長さは調査区の壁で計測して18.79m、幅は最大のところで1.97m、深さは最も深いところで0.61mである。壁には凹凸があり、いくつかの溝が重複したような形態である。埋土も不自然な堆積であり、掘り直しが行われているらしい。

出土遺物は、常滑陶器甕1点、在地系土器片口鉢1点、板碑1点、五輪塔の火輪と水輪各1点を掲載した。いずれも中世のものである。その他の出土遺物はない。

出土遺物から、この遺構の年代は中世であると考えられるが、一部が調査区にかかっているだけであり、遺構の性格は明らかではない。



第57図 笠松遺跡5区1号落ち込み平面図

第3章 笠松遺跡の調査の成果

A. 1-63.0m



1号落ち込みA-A'

1. にふい黄褐色土 粒子細かく、粘性なし、表上に近い。
2. 暗褐色土 粒子細かく、粘性なし、締まりなし、明黄褐色ロームブロックを含む。
3. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性なし、締まりなし、明黄褐色ロームブロックを含む。

B. 1-63.0m



1号落ち込みB-B'

1. にふい黄褐色土 粒子細かく、粘性なし、締まりなし、明黄褐色ローム小ブロックを多く含む。
2. 褐色土 粒子細かく、粘性なし、締まりなし、明黄褐色ローム大ブロックを多く含む。
3. 褐色土 粒子やや粗く、粘性なし、締まりなし、円礫・砂粒を含む。

C. 1-63.0m

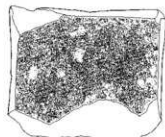
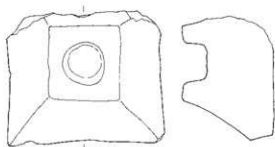


1号落ち込みC-C'

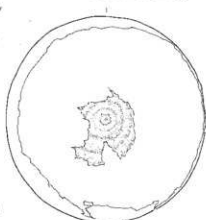
1. 暗褐色土 粒子やや粗く、粘性なし、締まりなし、黒褐色土ブロック・明黄褐色ロームブロックを含む。
2. にふい黄褐色土 粒子やや粗く、粘性なし、締まりなし、明黄褐色ロームブロックを多く含む。

0 1:40 1m

A'



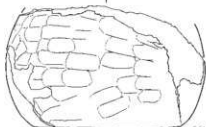
4(1/6)



1(1/4)



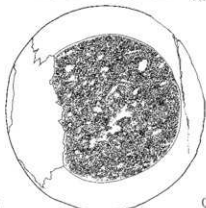
3(1/2)



5(1/6)



2(1/4)



0 1:4 10cm

0 1:2 5cm

0 1:6 20cm

第58図 笠松遺跡5区1号落ち込み断面図、出土遺物

5 ピット

ピットは合計30基調査した。わずかな例外を除いて5-2区南東部と5-3区北東部に集中している。大きさなどのデータは第15表にまとめたとおりである。細く深いものについては柱穴である可能性があるが、建物として把握することはできなかった。

第15表 笠松遺跡5区ピット一覧表

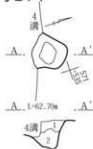
番号	グリッド	大きさ(m)		備考
		長径×短径×深さ		
1	570-535	0.35×0.31×0.31		4号溝と重複。
2	575-520	0.34×0.29×0.32		
3	575-520	0.32×0.27×0.28		
4	575-525	0.45×0.40×0.22		
5	575-525	0.49×0.43×0.47		
6	575-525	0.23×0.22×0.19		
7	575-530	0.23×0.22×0.19		5号溝と重複。
8	575-530	0.22×0.20×0.20		5号溝と重複。
9	570-530	0.47×0.39×0.31		5号溝と重複。
10	570-525	0.41×0.40×0.22		5号溝と重複。
11	575-525	0.27×0.22×0.18		5号溝と重複。
12	575-520	0.26×0.21×0.32		5号溝と重複。
13	565-525	0.46×0.32×0.34		
14	560-520	0.28×0.23×0.24		
15	555-530	0.48×0.43×0.13		

6 旧石器時代の調査

旧石器時代の調査は2×2mないし2×4mの調査ピットを、第62図のような位置に設定して行った。南側が空白なのは攪乱のためであり、その他遺構を避けたために配置が不規則になっているところがある。調査ピットは合計18ヶ所であり、調査した面積は88㎡となる。

番号	グリッド	大きさ(m)		備考
		長径×短径×深さ		
16	580-530	0.53×0.46×0.13		
17	590-530	0.81×0.74×0.37		
18	585-535	0.79×0.78×0.40		
19	580-535	0.88×0.71×0.85		
20	580-525	0.81×0.59×0.46		
21	590-525	0.40×0.35×0.67		
22	580-525	0.57×0.48×0.46		
23	580-525	0.45×0.37×0.50		
24	585-530	0.35×0.33×0.92		
25	575-525	0.35×0.33×0.92		
26	575-540	0.67×0.67×0.46		
27	580-525	0.26×0.22×0.81		
28	580-545	0.71×0.49×1.10		
29	585-535	0.52×0.49×0.53		
30	580-530	0.30×0.27×0.61		

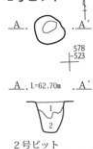
1号ピット



1号ピット

1. 暗褐色土 粘性、締まりややあり。
2. 暗褐色土と黄褐色ローム土の混土 粘性、締まりあり。

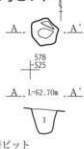
2号ピット



2号ピット

1. 暗褐色土 締まりややあり。黄褐色ローム粒を微量含む。
2. 暗褐色土 締まりややあり。φ10cm程度のロームブロックを含む。

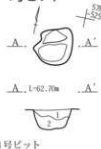
3号ピット



3号ピット

1. 暗褐色土 締まりややあり。黄褐色ロームブロックを少量含む。

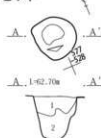
4号ピット



4号ピット

1. 暗褐色土 締まりややあり。黄褐色ローム粒を含む。
2. 黄褐色ローム土 粘性、締まりあり。黒色土を微量含む。

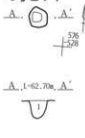
5号ピット



5号ピット

1. 暗褐色土 締まりややあり。黄褐色ローム粒を含む。
2. 暗褐色土 締まりややあり。黄褐色ロームブロックを少量含む。

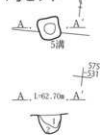
6号ピット



6号ピット

1. 暗褐色土 締まりやや弱い。黄褐色ローム粒を微量含む。

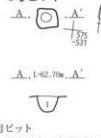
7号ピット



7号ピット

1. 暗褐色土 締まりややあり。黄褐色ローム粒を微量含む。
2. 黄褐色ローム土 粘性、締まりあり。

8号ピット



8号ピット

1. 暗褐色土 締まりやや弱い。黄褐色ローム粒を微量含む。

0 1:40 1m

第59図 笠松遺跡5区1～8号ピット平面図

第3章 笠松遺跡の調査の成果

9号ピット



9号ピット

1. 暗褐色土 締まりややあり。黄褐色ローム粒を微量含む。
2. 暗褐色土 締まりややあり。黄褐色ロームブロックを少量含む。
3. 暗褐色土と黄褐色ローム土の混土 暗褐色土と黄褐色ローム土が交互に層状に堆積している。粘性、締まりあり。

10号ピット



10号ピット

1. 暗褐色土 締まりややあり。黄褐色ローム粒を微量含む。

11号ピット



11号ピット

1. 暗褐色土 締まりややあり。黄褐色ロームブロックを少量含む。

12号ピット



12号ピット

1. 暗褐色土 締まりやや弱い。黄褐色ローム粒を微量含む。

13号ピット



13号ピット

1. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりやや弱い。黄褐色ロームブロックを少量、黄褐色ローム粒を微量含む。

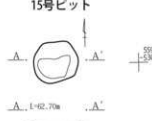
14号ピット



14号ピット

1. 暗褐色土 締まりややあり。黄褐色ロームブロックを少量含む。

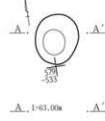
15号ピット



15号ピット

1. 暗褐色土 締まりあり。黄褐色ロームブロックを少量含む。
2. 黄褐色ローム土 粘性、締まりあり。

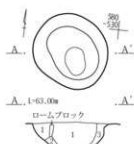
16号ピット



16号ピット

1. 暗褐色土 粒子細かく、粘性、締まりなし。
2. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。明黄褐色ロームブロックをやや多く含む。

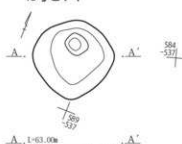
17号ピット



17号ピット

1. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。黄褐色ロームブロックを含む。
2. 暗褐色土 粒子細かく、粘性ややあり。締まりあり。黄褐色ローム小ブロックを含む。
3. 褐色土 粒子細かく、粘性、締まりなし。にぶい黄褐色土ブロックを多く含む。

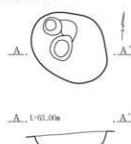
18号ピット



18号ピット

1. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。黄褐色ロームブロックを含む。
2. にぶい黄褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。明黄褐色ロームブロックを含む。
3. 暗褐色土 粒子細かく、粘性、締まりなし。ローム漸移層主体。

19号ピット



19号ピット

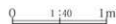
1. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。黄褐色ロームブロックを含む。

20号ピット



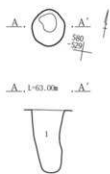
20号ピット

1. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。明黄褐色ロームブロックを含む。柱抜き取り痕か。
2. にぶい黄褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。明黄褐色ロームブロックを含む。



第60図 笠松遺跡5区9～20号ピット平面図

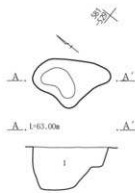
21号ピット



21号ピット

1. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。明黄褐色ローム小ブロックを多く含む。

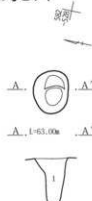
22号ピット



22号ピット

1. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。明黄褐色ローム小ブロックを多く含む。

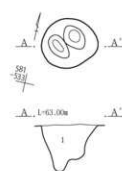
23号ピット



23号ピット

1. 暗褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。明黄褐色ロームブロック、黒色土ブロックを含む。

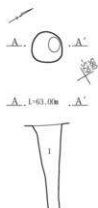
24号ピット



24号ピット

1. にぶい黄褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。明黄褐色ロームブロック、黒色土ブロックを多く含む。

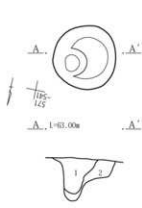
25号ピット



25号ピット

1. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性なし。締まり強い。黄褐色ローム粒を多く含む。

26号ピット



26号ピット

1. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。明黄褐色ロームブロックを少し含む。
2. 黒褐色土 明黄褐色ロームブロックを1層より多く含む。

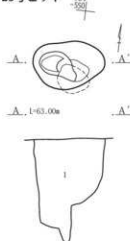
27号ピット



27号ピット

1. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。明黄褐色ロームブロックを多く含む。

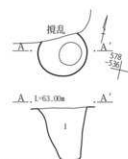
28号ピット



28号ピット

1. にぶい黄褐色土 粒子細かく、粘性なし。締まりややあり。明黄褐色ローム大ブロックを含む。

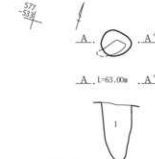
29号ピット



29号ピット

1. 黒色土 粒子やや粗く、粘性なし。締まりややあり。明黄褐色ロームブロックを少し含む。

30号ピット

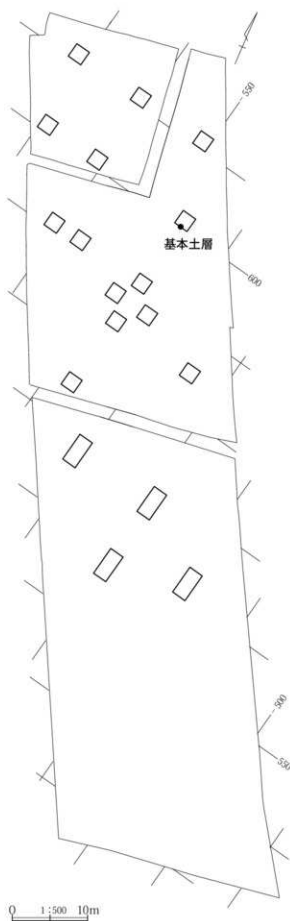


30号ピット

1. 黒褐色土 粒子やや粗く、粘性、締まりなし。黄褐色ロームブロックを含む。

0 1:40 1m

第61図 笠松遺跡5区21～30号ピット平面図

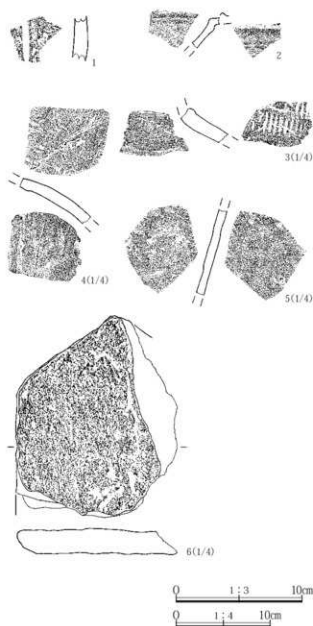


第62図 笠松遺跡5区旧石器調査ピット配置図

いずれのピットからも遺構、遺物とも出土しなかった。

7 遺構外出土の遺物

遺構外から出土した遺物のうち、掲載したのは縄文土器1点、古瀬戸折縁深皿1点、渥美陶器甕2点、常滑陶器甕1点、板碑1点である。この他、小破片として、土師器杯椀類1点、同甕類1点、同器種不明6点、須恵器杯椀類3点、同甕類1点、中世国産焼締陶器2点、近世国産磁器1点、同国産施軸陶器1点、在地系土器焙烙か鍋1点、時期不詳土器類2点が出土している。



第63図 笠松遺跡5区遺構外出土の遺物

第4章 堀廻遺跡の調査の成果

第1節 成果の概要

笠松遺跡の北に位置する堀廻遺跡は、さらに扇状地の内部に入り水が乏しい地域となる。そのため生活には適さないと思われ、遺構の数も減少する。今回調査した遺構は、3～6区の4区画合計で、竪穴状遺構1基、土坑6基、溝4条である。竪穴状遺構と土坑は遺物が出土せず、時期・性格とも不明である。溝は、3区の1号溝は上層にAs-Bがみられるので古代に遡るものであり、規模も大きい注目されるものである。やはり3区南にある2号溝は南側で調査した笠松遺跡5区の6号溝と一連のものであると思われる。

第2節 堀廻遺跡3区

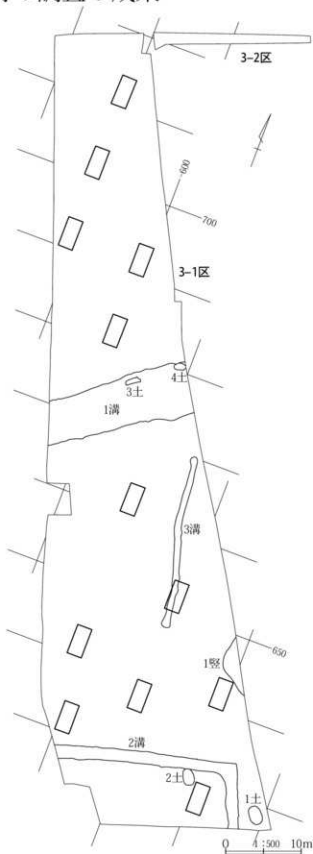
堀廻遺跡3区は3-1区と3-2区に分かれる。笠松遺跡5区の北に位置し、3-1区の南半に遺構が見られるが、北半と3-2区には遺構はない。調査した遺構は竪穴状遺構1基、土坑4基、溝3条である。

1 竪穴状遺構

竪穴状遺構は1基を調査した。3-1区南半部の東壁にかかる位置にある。確認面では竪穴住居のような形態であったため「竪穴状遺構」と名付けたものである。全体の平面形が竪穴住居のような方形であるとすれば、その西半分が調査区にかかっていることになる。ただし、平面図・断面図に明らかなように、壁がなだらかであり、底面にも凹凸があるので、この点では竪穴住居状とはいええず、「竪穴状遺構」という名称はやや不適当であったかもしれない。南西隅に当たる部分は壁がえぐれたような形状になっている。

長さは調査区壁の部分を計測すると7.83m、幅は最大の部分で残存長2.25m、深さは最も深いところで0.84mである。埋土にはローム小ブロックを多く含み、人為的に埋められているらしい。

遺物は須恵器杯碗類の小破片1点が出土しているだけ



第64図 堀廻遺跡3区全体図

第4章 堀廻遺跡の調査の成果

であり、それのみからは遺構の時期を特定することはできないが、埋土の上にはAs-Bを多量に含む層が堆積し、埋没土にはAs-Bが見られないことから、それを遡るものであると思われる。

2 土坑

土坑は合計4基調査した。いずれも3-1区にある。

1号土坑(第66図、PL. 26-2)

3-1区南東隅付近にある。平面形はやや長方形に近い楕円形で、断面は逆台形あるいは椀形である。底面は平坦になっている。埋土には多量のローム土が含まれており、人為的に埋められているらしい。長さは2.47m、幅は1.67m、深さは最も深いところで1.11mであり、主軸方向は $N-40^{\circ}-W$ である。

次の2号土坑とはほぼ同形同大で、埋土も共通し、さらに主軸方向も近いので、ほぼ同じ時期のものと思われる。遺物が出土しないので時期を特定することは難しく、性格も不明である。

2号土坑(第66図、PL. 26-3)

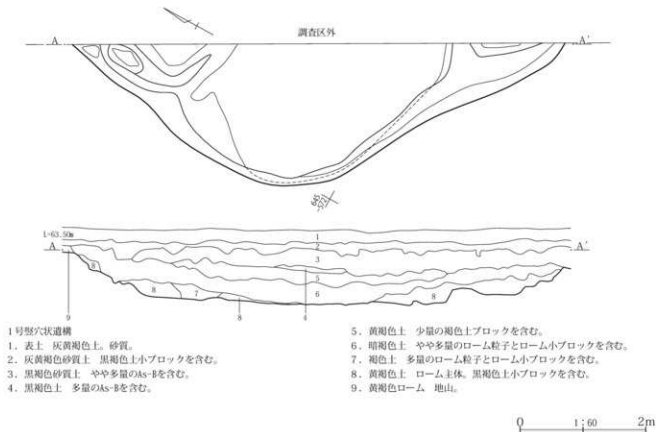
3-1区南東端近くの中央付近にある。2号溝と重複し、本土坑が古い。1号土坑とほぼ同形同大で、長さ2.21m、幅1.47m、深さは最深で0.68m、主軸方位は $N-33^{\circ}-W$ である。1号土坑同様遺物は出土しないが、先述のように、近い時期のものであると思われる。その性格は不明である。

3号土坑(第66図、PL. 26-4)

3-1区中央付近、1号溝の北岸に重複する位置にある。溝と同時に発掘してしまったため、新旧関係は明らかにできなかったが、主軸方位が溝とほぼ同じで、底面も溝の底面と段差が見られないことから、1号溝と同時存在である可能性が高いと思われる。

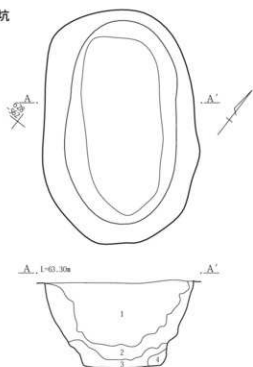
平面形は長方形に近い形状で、底面は平坦である。壁は大きくえぐれたようになっている。長さは2.06m、幅は0.81m、深さは溝の上端から計測して1.19m、主軸方向は $N-56^{\circ}-E$ である。

出土遺物はない。



第65図 堀廻遺跡3区1号壑穴状遺構平面図

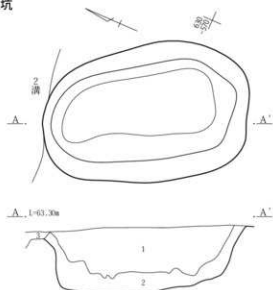
1号土坑



1号土坑

1. 黒褐色土 少量のローム小ブロックを含む
ほかに夾雑物少ない。
2. 黄褐色土 ローム主体。黒褐色土ブロックを含む。
3. 暗褐色土 黒褐色土に多量のローム粒子、
ローム小ブロックを含む。
4. ロームブロック

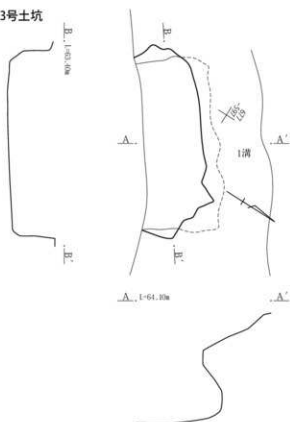
2号土坑



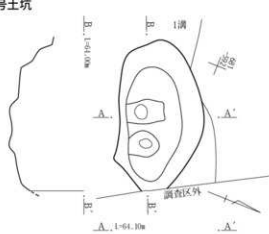
2号土坑

1. 黒褐色土 微量のローム小ブロックのほか
は夾雑物少ない。
2. 暗褐色土 黒褐色土とローム土の混合。多
量のローム小ブロックを含む。
3. 暗褐色土 2号溝埋土。

3号土坑



4号土坑



0 1:40 1m

第4章 堀廻遺跡の調査の成果

溝と同時存在と思われる、岸をえぐり取ったような形状から、その層位にある土を得るために掘った土坑であると思われる。1号溝の時期は、後述するように、As-Bより遡るものである。

4号土坑(第66図、PL. 26-5)

3-1区中央東端、1号溝の北岸に重複する位置にある。この土坑も溝と同時に発掘してしまっただため、溝との新旧は不明である。

やや歪んだ楕円形で、長さは調査区内で1.57m、幅は0.79m、深さは0.81m、主軸方向は $N-68^{\circ}-E$ である。遺物が出土せず、時期、性格とも不明である。

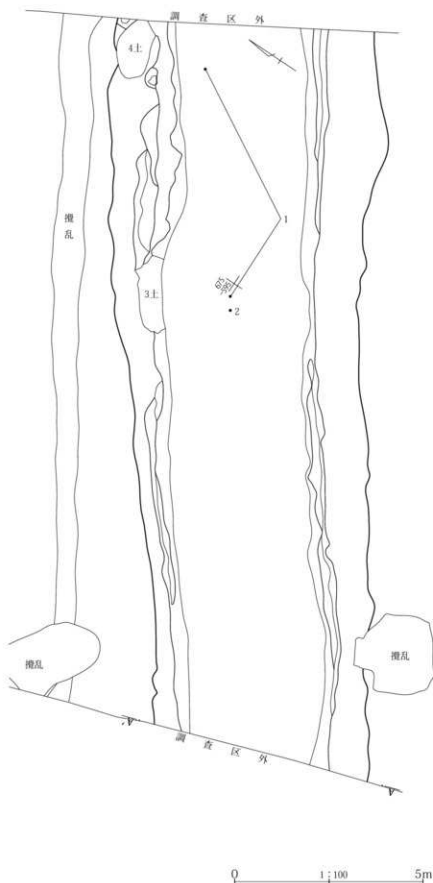
3 溝

溝は3条調査した。調査時に4号として調査した溝は、ガラス瓶が出土したことから近代以降のものであり、ここでは取り上げていない。

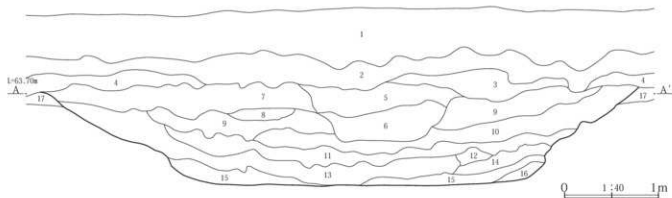
1号溝(第67・68図、第20表、PL. 26-6・7、34)

3-1区の中央部にある北東-南西方向の溝である。3、4号土坑と重複し、先述のように3号土坑とは同時存在の可能性が高く、4号土坑との新旧は不明である。

上幅5.56~7.34mの大きな溝で、調査区には20.55m分がかかり、両端は調査区外に延びている。底面幅は3.16~3.92mで、深さは0.80~1.19mである。断面形は下位で急角度となるがほぼ整った逆台形で、底面は平坦であり、きわめてしっかりとした溝である。方向は $N-55^{\circ}-E$ で直線的に延びている。底面の標高は、北東端で62.80m、南西端で62.73mであり、北



第67図 堀廻遺跡3区1号溝平面図



1号溝

1. 盛土 道路の碎石。
2. にぶい黄褐色砂質土 白色軽石を含む。
3. 灰褐色砂質土 多量の黒色土小ブロックを含む。
4. 灰褐色砂質土 多量の黒色土ブロックを含む。
5. 褐色土 多量のAs-Bを含む。6層と共に埋まった溝を再び掘削している。
6. 黒褐色土 多量のAs-Bを含む。
7. 褐色土 黒色土と軽石(As-Bか)を含む。
8. 黒褐色砂質土 軽石(As-B)をブロック状に含む。

9. 黒褐色土 褐色土をブロック状に含む。
10. 黒褐色土 やや多量の明黄褐色土をブロック状に含む。
11. 黒褐色土 少量の黄褐色土ブロックを含む。
12. 黒褐色土 ロームブロック、焼土粒子、焼土ブロックを含む。
13. 暗褐色土 多量のローム粒子、ローム小ブロックを含む。
14. にぶい黄褐色土 多量のローム粒子、ローム小ブロック、少量の黒色土小ブロックを含む。
15. 明黄褐色土 ローム主体。黒褐色土粒子、黒褐色土小ブロックを含む。
16. 明黄褐色土 ローム主体。多量の黒褐色土粒子、黒褐色土小ブロックを含む。
17. 明黄褐色土 ローム主体。黒褐色土粒子を含む。



第68図 堀廻遺跡3区1号溝断面図・出土遺物

東が高いがその差はわずかである。

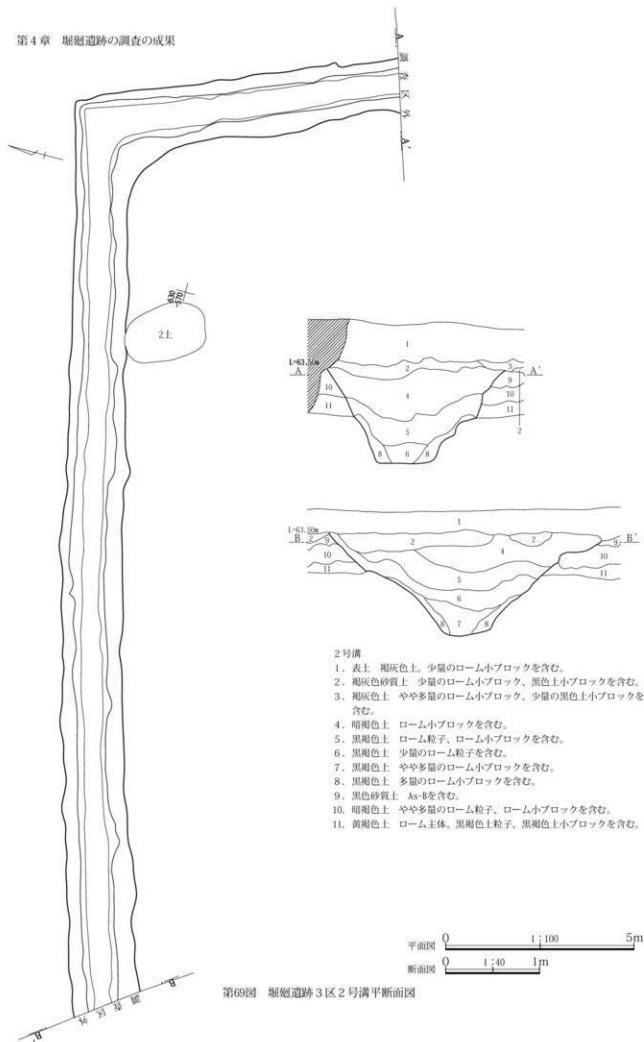
断面を見ると5、6層は掘り直しの層である。その下層の8～11層も13層を切るように堆積しており、掘り直しの可能性が考えられる。As-Bの含有から、5、6層の掘り直しはAs-B降下後、8～11層の掘り直しは降下以前と想定できる。

出土遺物は少ない。掲載したのは土師器杯1点と須恵器杯2点であり、埋土の下層から出土している。その他小破片として土師器杯椀類2点、須恵器杯椀類3点が出土している。掲載した杯は9世紀前半のものと思われるので、掘削された年代はその頃まで遡る可能性がある。一旦埋没した後に少なくとも1回の掘り直しがあったと思われるが、As-B降下頃に再び埋没し、その後幅の狭い溝が掘られている。深さは浅いもの直線的で規模が大きいため、重要な役割をもった溝であると思われる

が、埋土には砂等は見られず、水が流れていた形跡は認められない。そのため、現状では役割を明確にすることはできない。

2号溝(第69図、PL. 26-8, 27-1)

3-1区の南端近くにあるL字形の溝で、両端は調査区外に延びる。東側の南北部分は長さ8.55mで大きく屈曲し、西に向かって24.45mで調査区境となる。幅は1.24～1.83m、深さは南端のA-A'セクションで1.00m、西端のB-B'セクションで1.10mである。方向は南北部分ではN-22°-Wであり、その方向が笠松5区6号溝と近く、位置からみてその北延長部であると思われる。東西部分の方向はN-75°-Wでわずかに北に湾曲する。断面形は逆台形で、整った形態である。底面の標高は西端で62.52m、南端で62.57mで差はほとんどない。



第69図 堀廻遺跡3区2号溝平面図

出土遺物は少なく、須恵器狭盃類の小破片が1点出土しているだけである。

L字形に曲がり、埋土にも溝が流れた痕跡はないため、何らかの区画溝と考えられるが、南側の笠松5区では南端で大きく広がり、そこで途切れると推定されるので、やや疑問がある。時期を示すような遺物はないが、断面を見るとAs-Bを含む層を切って掘削されており、中世以降のものである。

3号溝(第70図、PL. 27-2)

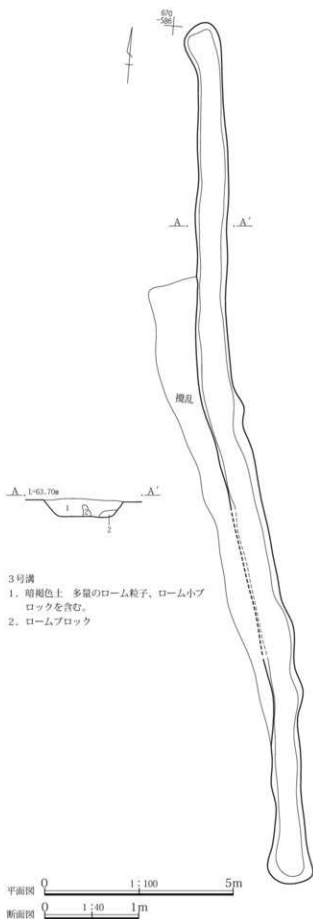
3-1区南半部の東側にある南北方向の溝である。長さ22.84mで両端が途切れている。幅は0.63~1.19m、深さは0.10~0.24mで、方向は緩やかに蛇行するが、両端を結んだ線で計測するとN-11°-Wである。断面形は浅い逆台形で、底面の標高は北端で63.68m、南端で63.28mである。出土遺物はない。両端が途切れているため水を流したもとのと思えず、性格は不明である。

4 旧石器時代の調査

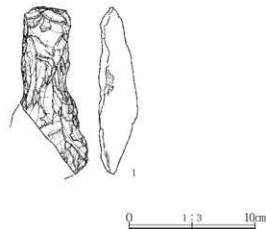
旧石器時代の調査は、2×4mのトレンチを第64図に示した位置に12ヶ所設定して行った。面積は96m²である。調査の結果遺構・遺物とも出土しなかった。

5 遺構外出土の遺物

遺構外出土の遺物も少ない。掲載したのは縄文時代の打製石斧1点である。その他、土師器杯碗類の小破片2点が出土しているだけである。

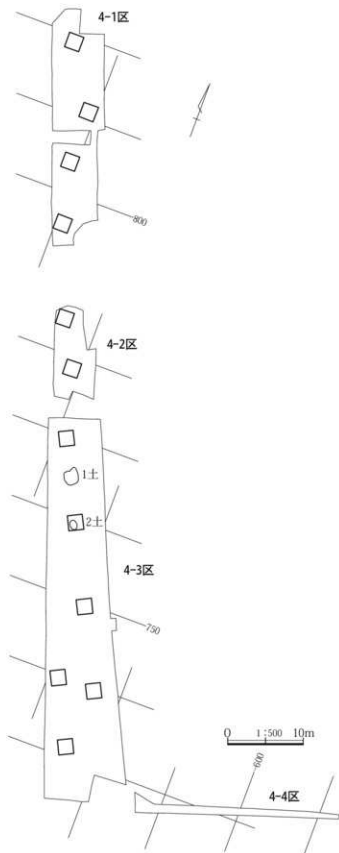


第70図 堀廻道跡3区3号溝平面断面図



第71図 堀廻道跡3区遺構外出土の遺物

第3節 堀廻遺跡4区



第72図 堀廻遺跡4区全体図

堀廻遺跡4区は3区の北に位置し、さらに遺構は少なくなる。この区は第72図に示したように4区画に分けられる。調査した遺構は土坑2基のみである。

1 土坑

土坑は4-3区北半部で2基調査した。

1号土坑(第73図、PL. 28-3)

不整形の土坑であり、長径2.44m、短径1.88m、深さ0.39mである。断面形も不整形である。出土遺物はなく、時期・性格とも明らかではない。

2号土坑(第73図、PL. 28-4)

楕円形の土坑であり、長径1.26m、短径0.92m、深さ0.32m、主軸方位はN-39°-Wである。断面形は椀形で、上面に掘り直しのような凹みが見られる。出土遺物はなく、時期・性格とも明らかではない。

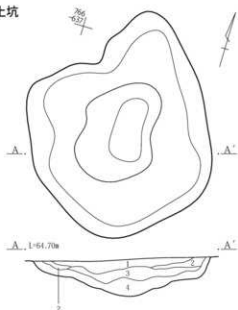
2 旧石器時代の調査

旧石器時代の調査は、2×2mのピットを第72図に示した位置に設定して行った。調査ピットは合計12ヶ所であり、面積は48㎡である。調査の結果、遺構・遺物とも出土しなかった。

3 遺構外出土の遺物

遺構外出土の遺物は多くない。掲載したのは縄文土器1点と石鏃1点である。その他は時期不明の土器の小破片が1点出土しているだけである。

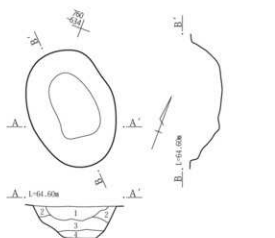
1号土坑



1号土坑

1. 暗褐色砂質土
2. 暗褐色土 全体にザラつきが強い。粘性、締まり弱い。
3. 暗褐色土 2層よりやや明るい色調。全体にややザラつきあり。粘性、締まり弱い。
4. 暗黄褐色土 黄褐色土ブロックを含む。粘性、締まりあり。

2号土坑

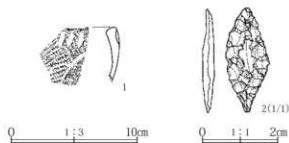


2号土坑

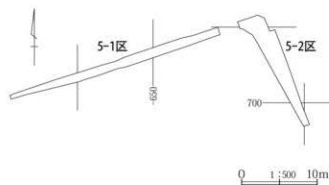
1. 暗褐色砂質土
2. 暗褐色土 全体的にザラつきが強い。粘性、締まり弱い。
3. 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量含む。粘性、締まりややあり。
4. 黄褐色土 粘性、締まりあり。

0 1:40 1m

第73図 堀廻遺跡4区1・2号土坑断面図



第74図 堀廻遺跡4区遺構外出土の遺物



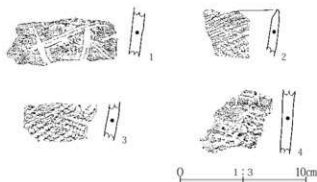
第75図 堀廻遺跡5区全体図

第4節 堀廻遺跡5区

5区は非常に狭小な調査面積しかない。第75図に示したように、2地区に分けて調査を行ったが、遺構は見つからなかった。

1 遺構外出土の遺物

遺構外出土の遺物は少ない。掲載したのは縄文土器4点である。その他には土師器杯碗類の小破片が4点出土しているだけである。



第76図 堀廻遺跡5区遺構外出土の遺物

第5節 堀廻遺跡6区

6区は第77図に示したように6区画に分かれる。6-5区以外は狭小で、特に北側の調査区では掘乱が多かったため、旧石器時代の調査も行えない区があった。調査した遺構は溝1条のみである。

1 溝

1号溝(第78図、PL. 30-1・2)

6-5区中央やや南寄りにある東西方向の溝である。調査区を東西に直線的に横断し、両端は調査区外に延びる。調査した長さは6.77m、幅0.66～0.77m、深さはA-A'セクションの部分で0.70mである。断面形は深い逆台形で、埋土はローム土を多く含み人為的に埋められているらしい。底面の標高は東端で63.65m、西端で

63.67mであり、ほとんど差がない。出土遺物はない。

整った形状であるが、東隣の4区では見つかっておらず、現道の位置で途切れるか曲がってしまうらしい。わずかな長さの調査であり、出土遺物もないので、時期・性格とも明らかではない。

2 旧石器時代の調査

旧石器時代の調査は、2×2mのピットを第77図に示した位置に設定して行った。調査ピットは合計9ヶ所、面積は36㎡である。調査の結果、遺構・遺物とも出土しなかった。

3 遺構外出土の遺物

遺構外から出土したのは第79図にあげた縄文土器1点だけである。

第5章 天良七堂遺跡5区の調査の成果

天良七堂遺跡5区は、今回報告する調査区の中では東にやや離れた位置にある。調査した遺構は溝1条と硬化面であり、その硬化面の下に性格不明の遺構が存在した。

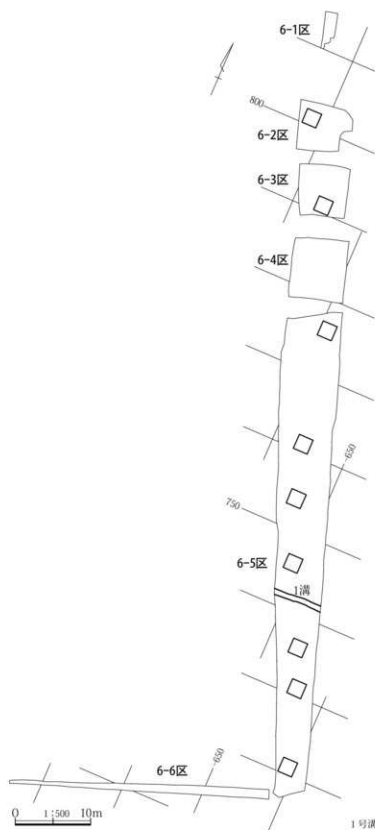
1号溝(第80・81図、PL. 31-1・2)は調査区の南辺に沿って見られるもので、推定東山道駅路下新田ルート(の延長線上)にあり、その北側溝と考えられる溝である。調査区内にはその北壁のみが分かっており、幅などは不明である。調査できたのは長さ10.08m分である。深さは東端のB-B'セクションで2.07mである。西端のA-A'セクションでは底面付近が狭いので、底部まで掘ることができなかった。方向は北壁で計測してN-83°-Eである。この方向は笠松4区1号溝のN-77°-Eとは6°異なる。笠松4区1号溝は推定東山道駅路下新田ルートの北側溝と考えられているが、同じく南側溝の位置にある9号溝の方向はN-82°-Eであり、本溝と近い。出土遺物は土器器裏面類と須恵器器裏面類の小破片が各1点ずつである。B-B'セクションに明らかのようにAs-B(14層)よりも新しく、さらに複数回の掘り直しが認められる。もちろん、この溝の掘削がいつまで遡るかは明らかではない。東山道駅路との関連

については第7章で再び触れる。

硬化面は溝の北側一帯にみられ、一部掘乱に削平されている。A-A'セクションの9層、B-B'セクションの16層の上面が固く締まっているもので、明らかにAs-Bの下層にある。A-A'セクションの9層は、一部1号溝にかぶるように堆積しているため、1号溝と同一の場所に、より古い時期の溝が存在したと思われる。この1号溝が推定東山道駅路下新田ルートの北側溝だとすれば、この硬化面はその北側＝外側にあることになり、路面ではないことになる。しかし、それではこの硬化面がどのようなものであるのかは、調査した面積が少ないこともあり、明らかではない。

この硬化面の下層では、調査区東半部に掘り込みがあるのが見つかった(第82図、PL. 31-3・4)。一部溝状にみえる部分もあるが、全体的に不整形であり、しっかりした遺構だとは思えないものである。ここからは土器器裏面類5点、同器種不明4点が出土している。

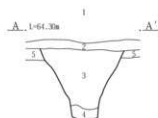
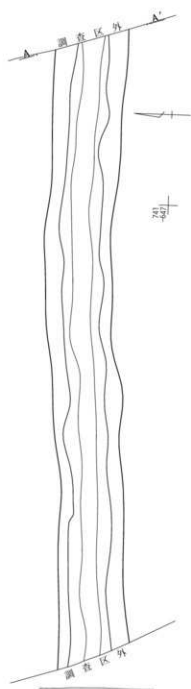
表土からは土器器裏面類12点、同器種不明55点、須恵器杯碗類2点、灰釉陶器瓶類2点が出土しているが、いずれも小破片であり、掲載できる遺物はなかった。



第77図 堀廻遺跡6区全体図



第79図 堀廻遺跡6区遺構外出土の遺物

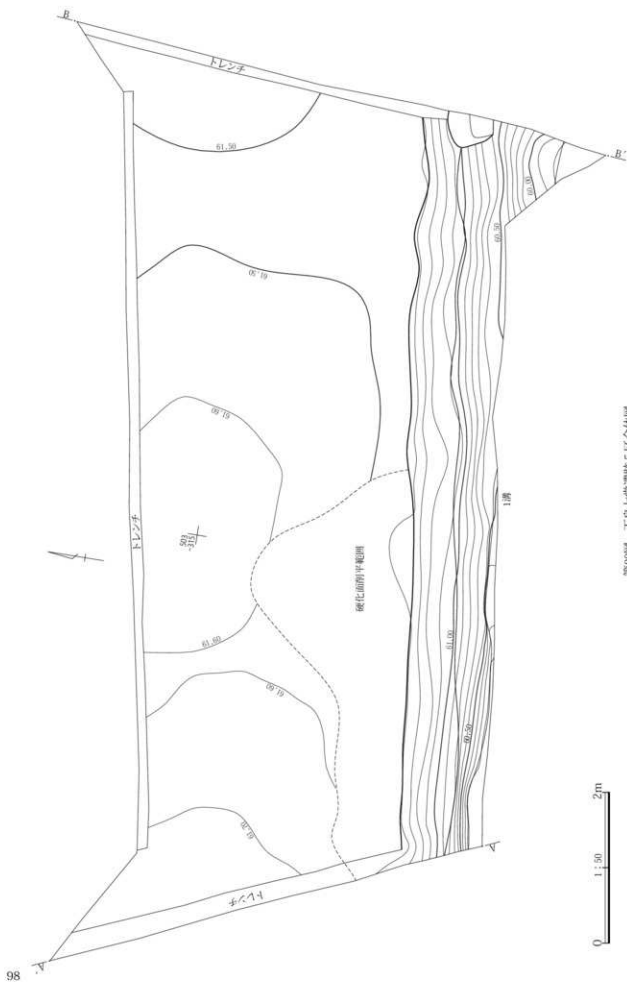


1号溝

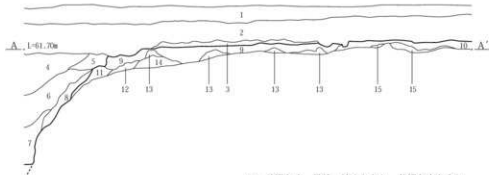
1. 褐色砂質土 少量のローム小ブロックを含む。
2. 褐色砂質土 やや多量のローム小ブロックを含む。
3. 明褐色砂質土 多量のローム粒子、ローム小ブロックを含む。人為的な埋土か。
4. 黄褐色土 ロームブロック主体。褐色土を含む。
5. 黄褐色ローム 地山。

平・断面図 0 1:40 1m

第78図 堀廻遺跡6区1号溝断面図



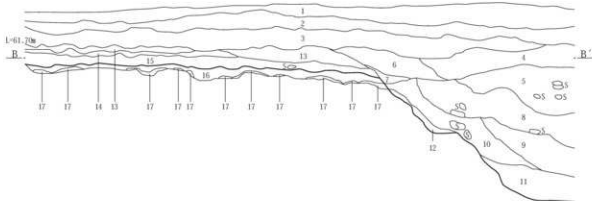
第88図 天良七堂遺跡5区全体図



1号溝 A-A'

1. 表土 暗褐色土。
2. 暗褐色土 旧耕作土。黄褐色粒を少量含む。
3. 黒褐色土 粘性、締まり強。全体的にザラつく。As-8混土層だが2層に削平され、残りが悪い。
4. 暗褐色土 粘性、締まりややあり。φ5~10cmの小礫を少量含む。
5. 暗褐色土 粘性、締まりややあり。2層よりも色調暗い。
6. 暗褐色土 5層に似るが黄褐色土をまばらに含む。
7. 暗褐色土 粘性強い。締まりあり。

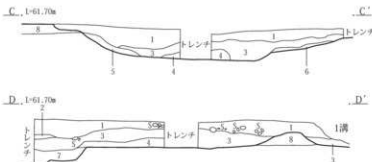
8. 暗褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色土を含む。
9. 暗褐色土 粘性ややあり。締まり強い。全体的にザラつく。この上面が硬化面。南端付近は上面が削平されている。
10. 暗褐色土 この上面が硬化面。9層に比べて締まりはやや弱い。
11. 黄褐色土 黄褐色土粒を全体に含む。
12. 暗褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。
13. 暗黄褐色土 粘性、締まりあり。暗褐色土を含む。
14. 黄褐色土 粘性、締まりあり。暗褐色土をまばらに含む。
15. 暗褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。



1号溝 B-B'

1. 表土 暗褐色土。
2. 暗褐色土 旧耕作土。ビニール片が混入する。
3. 褐色土 旧耕作土。粘性、締まりややあり。
4. 暗褐色土 粘性、締まりややあり。ややザラつく。
5. 暗褐色土 粘性、締まりあり。ややザラつく。φ10~20の礫を多量に含む。
6. 黒褐色土 粘性ややあり。締まりやや弱い。ザラつきがない。
7. 暗褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色土ブロック、黄褐色粒を少量含む。
8. 黒褐色土 6層に似るが、締まりがより弱い。

9. 黒褐色土 粘性ややあり。締まりやや弱い。
10. 暗褐色土 粘性あり。締まりややあり。黄褐色粒を全体に含む。
11. 黒褐色土 粘性あり。締まり弱い。礫を含む。
12. 暗褐色土と黄褐色土の混土 12層と地山の混土。
13. 黒褐色土 粘性ややあり。締まりやや弱い。全体的にザラつきあり。As-8混土層。
14. As-B 一部に小豆色火山灰も観察でき一次堆積と思われる。
15. 黒褐色土 粘性ややあり。締まりやや弱い。ザラつきあり。
16. 暗褐色土 粘性やや弱い。締まり強い。赤褐色土、白色軽石粒、黄褐色粒をまばらに含む。この上面が硬化面。
17. 黄褐色土 粘性、締まりあり。

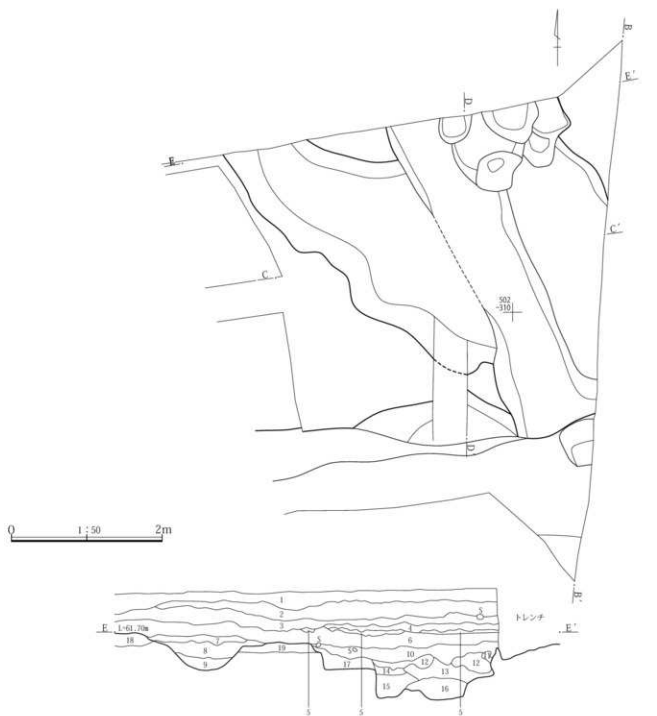


硬化面下遺構 C-C'・D-D'

1. 暗褐色土 粘性やや弱い。締まり強い。赤褐色土、白色軽石粒、黄褐色粒をまばらに含む。この上面が硬化面。
2. 暗褐色土 粘性あり。締まりあり。黄褐色土を含む。
3. 褐色土 粘性ややあり。締まり強い。φ1cm程度の黄褐色土ブロックを含む。全体的にザラつきあり。
4. 黒褐色土 粘性あり。締まり強い。黄褐色土を含む。
5. 暗褐色土 締まり強い。黄褐色土を含む。
6. 黄褐色土 粘性、締まりあり。
7. 黒褐色土 粘性ややあり。締まりやや弱い。黄褐色土を含む。
8. 黄褐色土 地山。

0 1:50 2m

第81図 天良七堂遺跡5区1号溝・硬化面下遺構断面図



硬化面下遺構 E-E'

1. 表土 暗褐色土。
2. 暗褐色土 旧耕作土。
3. 褐色土 黄褐色土を粒状に含むが、部分的で少量。
4. 黒褐色土 As-8混土。
5. As-B B-B'セクションよりも残り悪い。
6. 黒褐色土 粘性ややあり。締まりやや弱い、ザラつきあり。
7. 暗褐色土 粘性ややあり。締まりあり。白色粒子(φ0.5~4mm)をごく少量含む。上面は部分的に降下している。
8. 暗褐色土 粘性ややあり。締まり強い。上面が硬化面。白色粒子、黄褐色粒を少量含む。細かい互層をなしている部分もある。
9. 暗褐色土 粘性あり。締まり強い。黄褐色土混じり。層状の堆積は認められないが、固く締まっている。
10. 暗褐色土 白色粒子、ローム粒を少量含む。鉄分の沈着が斑状に認められる。
11. 黄褐色土ブロック
12. 暗褐色土 粘性あり。締まりあり。黄褐色土を含む。
13. 黄褐色土 ローム土主体。粘性。締まりあり。暗褐色土を含む。
14. 褐色土 粘性ややあり。締まり強い。φ1cm程度の黄褐色土ブロックを含む。全体的にザラつきあり。
15. 黒褐色土 粘性ややあり。締まりやや弱い。黄褐色土を含む。
16. 黄褐色土 13層に似る。ローム土主体。中層に暗褐色土が層状に認められる。下層は暗褐色土が多い。
17. 黒褐色土 粘性やや弱い。締まりあり。ローム粒、ロームブロックを全体的に含む。
18. 暗褐色土と黄褐色土の混土 粘性ややあり。上面が硬化面だが、全体的に硬化しているのではなく、締まりがやや弱い部分もある。
19. 地山

第82図 天良七堂遺跡5区硬化面下遺構平面断面図

第6章 自然科学分析

笠松遺跡4区では多くの溝を調査した。そのなかで、1号溝と9号溝は推定東山道駅路(下新田ルート)の側溝と推定され、また、4号溝は笠松遺跡1区で見つかった官衙的な建物群を囲う溝であると考えられ、いずれも歴史的に重要な意味をもつ溝である。さらに推定東山道駅路の路面を通過する2号溝は、その規模の大きさからこの地域にとって重要な役割をもっていたものと思われる。この遺跡の性格を考える上では見過ごせない遺構である。以上のようにこの4条の溝は重要な意味をもつものであるが、出土遺物が豊富なわけではなく、年代の決定には困難を伴っている。そこで、これらの溝の埋没土に含まれている火山灰を分析・同定することで、溝の埋没年代について考察する資料を得るため、火山灰分析を実施した。分析は株式会社火山灰考古学研究所に委託して行った。以下にその分析結果を掲載する。

第1節 笠松遺跡の火山灰分析

1 はじめに

関東地方北西部の大開々扇状地とその周辺には、北関東地方のほか、中部地方、中国地方、九州地方などの火山に由来するテフラ(tephra, 火山砕屑物:いわゆる火山灰)が分布しており、その多くについてはすでに年代や岩石記載的特徴が明らかにされて、地形地質学のみならず考古学の研究においても過去の時空指標として有効に利用されている。

そこで、発掘調査によって層位や年代が不明な溝状遺構が複数検出された太田市笠松遺跡でも、テフラ層やテフラ粒子を含む土層が認められたことから、地質調査を実施して土層の層序を記載するとともに、純度の高い分析試料を採取し、室内でテフラ分析(テフラ検出分析)を実施して、溝状遺構の層位や年代に関する資料の収集を行った。調査分析の対象となった地点は、新田郡御園連遺構と考えられている4号溝のBセクション、東山道関係遺構と推定されている1号溝のAセクションと9号溝のAセクション、さらに1号溝に合流する2号溝のAセクションの4地点である。

2 土層の層序

(1) 4号溝Bセクション

4号溝Bセクションでは、4号溝の覆土を観察できた(第83図)。ここでの覆土は、下位より淘汰の良い黄灰色砂層(層厚7cm)、若干色調が暗い灰褐色土(層厚9cm)、垂円礫混じりで白色の細粒軽石を含む灰褐色土(層厚25cm、軽石の最大径4mm)、白色の細粒軽石を含む灰褐色土(層厚35cm)、暗灰褐色土(層厚13cm)、成層したテフラ層(パッチ状、最大層厚7cm)、基底付近に青みがかった灰褐色砂質土(最大層厚1cm)をパッチ状に含む黒褐色砂質土(層厚15cm)からなる。なお、覆土の最下部の淘汰の良い黄灰色砂層については、基盤の堆積物の可能性もあるのかも知れない。

このうち、成層したテフラ層は、下部の黄灰色粗粒火山灰層(層厚4cm)と、上部の桃色砂質細粒火山灰層(層厚3cm)から構成されている。このテフラ層は、層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に同定される。As-Bの上位の、青みがかった灰褐色砂質土は、1128(大治3)年に浅間火山から噴出したと推定されている浅間稻川テフラ(As-Kk, 早田, 1990, 2004など)に関係すると考えられる。

(2) 1号溝Aセクション

1号溝Aセクションでは、1号溝の覆土を観察できた(第84図)。ここでの覆土は、下位より白色の細粒軽石混じりで黄色土ブロックに富む暗灰褐色土(層厚10cm、軽石の最大径3mm)、黄色土粒子に富む灰色土(層厚7cm)、灰色土(層厚6cm)、黒灰色土(層厚6cm)、暗灰色土(層厚22cm)、暗灰褐色土(層厚13cm)、若干色調が暗い灰褐色土(層厚17cm)からなる。

(3) 9号溝Aセクション

1号溝と対し推定されている9号溝の覆土は、下位より黄色土ブロック混じり暗灰褐色土(層厚18cm)、砂混じ

りて若干色調が暗い灰褐色土(層厚18cm)からなる(第85図)。

(4) 2号溝Aセクション

2号溝Aセクションでは、2号溝の覆土を観察できた(第86図)。ここでの覆土は、下位より黄白色シルトの薄層を挟む層理が認められる灰色土(層厚8cm)、黄色土ブロック混じり暗灰色砂層(層厚5cm)、亜円礫や暗灰色土ブロックを少量含む黄色土ブロック層(層厚12cm、礫の最大径43mm)、黄色土ブロック混じりで亜円礫を多く含む灰褐色土(層厚7cm、礫の最大径79mm)、亜円礫混じりで黄色土ブロックに富む灰色土(層厚5cm、礫の最大径38mm)、亜円礫混じり灰褐色土(層厚13cm、礫の最大径89mm)、黄色土ブロック混じり灰色土(層厚5cm)、暗灰色土(層厚13cm)、黄色土粒子混じり灰色土(層厚5cm)、若干黄色がかった灰色砂質土(層厚3cm)、灰褐色土(層厚5cm)、灰褐色砂層(層厚2cm)、若干色調が暗い灰褐色土(層厚10cm)、黒灰褐色砂層(層厚8cm)、若干色調が暗い灰褐色土(層厚26cm)からなる。

3 テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

テフラ層に含まれるテフラ粒子の定性的特徴を把握するために、調査分析の対象となった4地点において、層界にかからないように基本的に厚さ5cmごとに設定し、少なくとも各土層ごとに採取した試料のうちの18試料を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料を7gずつ秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第16表に示す。溝状遺構のテフラ検出分析では、大きく分けて3種類の軽石や火山ガラスを検出できた。それらは、色調が淡褐色および光沢のある褐色で斑品に斜方輝石と単斜輝石を特徴的に含むもの(タイプ1)、さほど発泡が良くなく色調が白色で斑品に角閃石や斜方輝石を特徴的に含むもの(タイプ2)、

そして発泡が比較的良好く色調が灰白色で斑品に斜方輝石と単斜輝石を特徴的に含むもの(タイプ3)である。

4号溝のBセクションにおいてAs-Bより下位の覆土基底部から採取された2試料のうち、上位の試料24からタイプ2とタイプ3の火山ガラスが少量検出された。

1号溝Aセクションでは、いずれの試料からもタイプ1のテフラ粒子を検出できた。それはとくに試料12や試料11に多い傾向にある。また、試料15ではタイプ2やタイプ3の火山ガラスも少量認められた。タイプ2の火山ガラスは試料13、試料12、試料11、試料5、タイプ3の火山ガラスは試料9でも少量検出された。

9号溝Aセクションでは、試料8および試料2のいずれから、タイプ1のほか少量のタイプ2とタイプ3の火山ガラスが検出された。

2号溝Aセクションでは、いずれの試料からもタイプ1の火山ガラスが比較的多く検出された。軽石も試料22、試料19、試料10、試料7で認められ、ほかの遺構と比較してやや多い傾向にある。ほかにタイプ2の軽石や火山ガラス、さらにタイプ3の火山ガラスも少量ながら多くの試料で認められる。

4 考察

(1) テフラ粒子の起源

タイプ1の軽石や火山ガラスは、色調や斑晶鉱物の組み合わせなどから、As-BまたはAs-KKに由来すると推定される。本遺跡付近での降灰量は前者の方がはるかに多いことから、基本的にはAs-B起源と考えて良い。

また、タイプ2の軽石や火山ガラスは、発泡の程度、色調、斑晶鉱物の組み合わせなどから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳沢川テフラ(Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992、2003)、または6世紀初頭に中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP、新井、1962、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992、2003)に由来すると考えられる。テフラの分布と本遺跡の位置を考えると、前者の可能性がより高い。

タイプ3の火山ガラスは、色調や斑晶鉱物の組み合わせなどから、3世紀後半に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C、荒牧、1968、新井、1979、坂口、2010)に由来すると考えられる。

以上のテフラ同定については、さらに火山ガラスの屈折率測定などを実施して、同定の信頼度を高めると良い。

(2) 溝状遺構の層位

4号溝については、Bセクションにおいて覆土最下部の試料25が採取された砂層は、層相から基盤の堆積物あるいは基盤に由来する堆積物と推定される。試料24からAs-CやHr-FA（またはHr-FP）に由来するテフラ粒子が検出されたことや、覆土中にAs-BおよびAs-Kkが認められたことなどから、4号溝の層位はHr-FAより上位でAs-Bより下位にあると考えられる。

1号溝については、いずれの覆土試料からも、おもにAs-Bに由来する軽石や火山ガラスが検出された。とくにテフラ粒子が急増する試料12付近にAs-Bの降灰層があることも否定はできないが、さほど砂質でもなく、その付近にAs-Bの降灰層があるような層相には見えないこと、また最下位の試料15が採取された土層には、基盤の黄色土ブロックが非常に多く含まれていることなどから、元来試料12より下位の土層中のAs-B起源の粒子の量が非常に少なかった可能性がある。そこで、ここでは、1号溝の層位についてAs-Bより上位の可能性を考えたい。この1号溝と関係すると考えられている9号溝についても、覆土最下位の試料8から、おもにAs-Bに由来する火山ガラスが検出されたことから、その層位はAs-Bより上位と推定される。

さらに、2号溝Aセクションについても、いずれの覆土試料からも、おもにAs-Bに由来する軽石や火山ガラスが検出されたことから、その層位はAs-Bより上位と推定される。以上の溝の層位の推定に際しては、堆積物の人為により除去あるいは自然的作用による流失が起きていないことを前提としている。

なお、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 2003など)の可能性が指摘されている細粒の黄白色軽石層について、2号溝の壁で採取した試料を対象にテフラ検出分析を実施した。その結果、As-BP Groupと同じように重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が認められるものの、むしろ斜長石に富み、透明の繊維束状軽石型や分厚い中間型の火山ガラスを比較的多く含むことが明らかになった。このような特徴は、As-BP Groupの多くに通常認められる斜方輝石や単斜輝

石など重鉱物に富む特徴とは異なり、浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 2003など)などAs-BP Groupより上位のテフラの特徴に似ている。今後、このテフラについても、火山ガラスや斜方輝石の屈折率測定などを実施して、高信頼度のテフラ同定を行うと良い。

5 まとめ

太田市笠松遺跡において、地質調査とテフラ検出分析を実施した。その結果、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)のほか、浅間C軽石(As-C, 3世紀後半)、極名ニツ岳渋川テフラ(Hr-HA, 6世紀初頭)あるいは極名ニツ岳伊香保テフラ(Hr-HP, 6世紀中葉)、浅間粕川テフラ(As-Kk, 1128年)などに由来する土層やテフラ粒子を検出できた。その結果、新田郡衛との関係が推定されている4号溝の層位はHr-FAとAs-Bの間、東山道の関連と考えられている9号溝および2号溝の層位、さらに1号溝の層位については、いずれもAs-Bより上位の可能性が高いと推定される。

文献

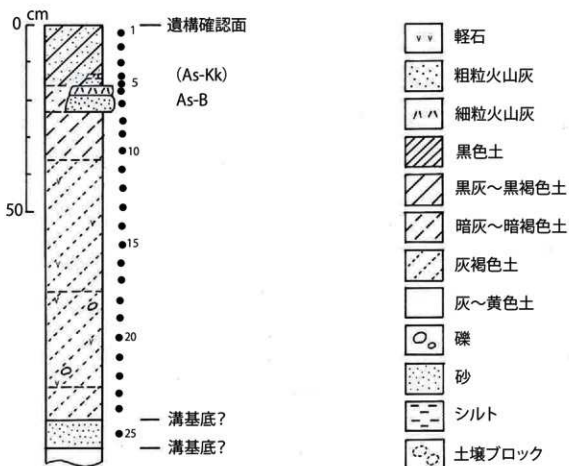
- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
- 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質。地質研報, no.14, p.1-45.
- 町田 洋・新井房夫(1992)「火山灰アトラス-日本列島とその周辺」。東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫(2003)「新編火山灰アトラス-日本列島とその周辺」。東京大学出版会, 336p.
- 坂口 一(1986)極名ニツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 坂口 一(2010)高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向-中居町一丁目遺跡H22の水田耕作地と周辺集落との関係-。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目遺跡3」, p.17-22.
- 早田 勉(1989)6世紀における極名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉(1990)浅間火山の生い立ち。佐久考古通信, no.53, p.2-7.
- 早田 勉(2004)火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史-とくに平安時代の噴火について-。かみつけの里博物館編「1108-浅間火山-中世への歴史」, p.45-56.

第6章 自然科学分析

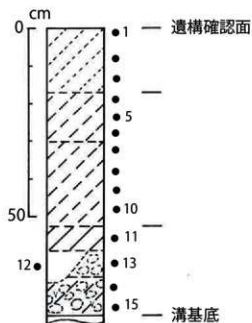
第16表 溝状遺構に関係するテフラ検出分析結果

地点名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス	
		量	色調	最大径	量	形態 色調
4号溝Bセクション	24				*	ps 白,灰白
	25					
1号溝Aセクション	2				**	ps 淡褐,褐
	5				**	ps 淡褐,褐>白
	9				*	ps 淡褐>灰白
	11				***	ps 淡褐,褐>白
	12	*	淡褐	2.1	***	ps 淡褐,褐>白
	13				*	ps 淡褐,褐>白
	15				(*)	ps 淡褐,白,灰白
9号溝Aセクション	2				*	ps 淡褐,褐>白,灰白
	8				*	ps 淡褐,褐>白,灰白
2号溝Aセクション	7	*	淡褐>白	2.0,2.8	***	ps 淡褐,褐>白
	10	*	淡褐>白	2.0,5.2	***	ps 淡褐,褐>白
	15	*	白	2.2	**	ps 淡褐,褐>白
	19	*	淡褐>白	2.2,2.3	**	ps 淡褐,褐>白
	22	*	淡褐>白	3.1,2.1	**	ps 淡褐,褐>白,灰白
	25				**	ps 淡褐,褐>白
	27				*	ps 淡褐,褐>白,灰白

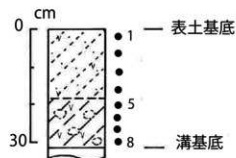
****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない, (*): とくに少ない。
最大径の単位は, mm, bv: バブル型, sd: 中間型, ps: 軽石型。



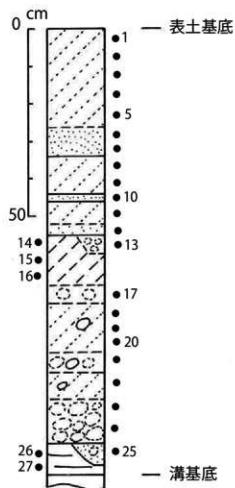
第83図 笠松道跡4区4号溝Bセクション土層柱状図



第84図 笠松遺跡4区1号溝Aセクション土層柱状図



第85図 笠松遺跡4区9号溝Aセクション土層柱状図



第86図 笠松遺跡4区2号溝Aセクション土層柱状図

第7章 総括

笠松遺跡・堀廻遺跡・天良七堂遺跡の調査の成果は前章までに述べたとおりである。本遺跡は、第87図にみるように、新田郡宇に近く近いという位置にあり、それに深く関連すると思われる重要な遺構が調査できた。ここではそれらの成果の意義を検討し、総括としたい。まとめる視点は3つあり、1つめは溝に囲まれた建物群の様相とその性格について、2つめは推定東山道駅路下新田ルートについて、3つめは中世以降のこの遺跡の状況についてである。以下その順に検討を加える。なお、以下の記述では笠松遺跡〇区という場合、「遺跡」を省略して呼称することにする。

溝に囲まれた建物群の様相とその性格

関連する遺構群の全体図は第88図のとおりである。今回報告した笠松3・4区では、少なくとも9棟の掘立柱建物と、それを囲む大規模な溝を調査した。これは笠松1区の北端部で見つかった、溝で囲まれた掘立柱建物群と基壇状遺構の北側に当たるものである(笠松1区の成果については、昨年度刊行した『笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2012を参照のこと。以下この報告書をあげる場合は『昨年度報告書』と略称する)。今回の調査によって区画溝の北西隅が見つかったことから、北辺と西辺の位置が確定し、また、区画内部の北側にも予想通り多くの建物が建てられていたことが明らかとなった。

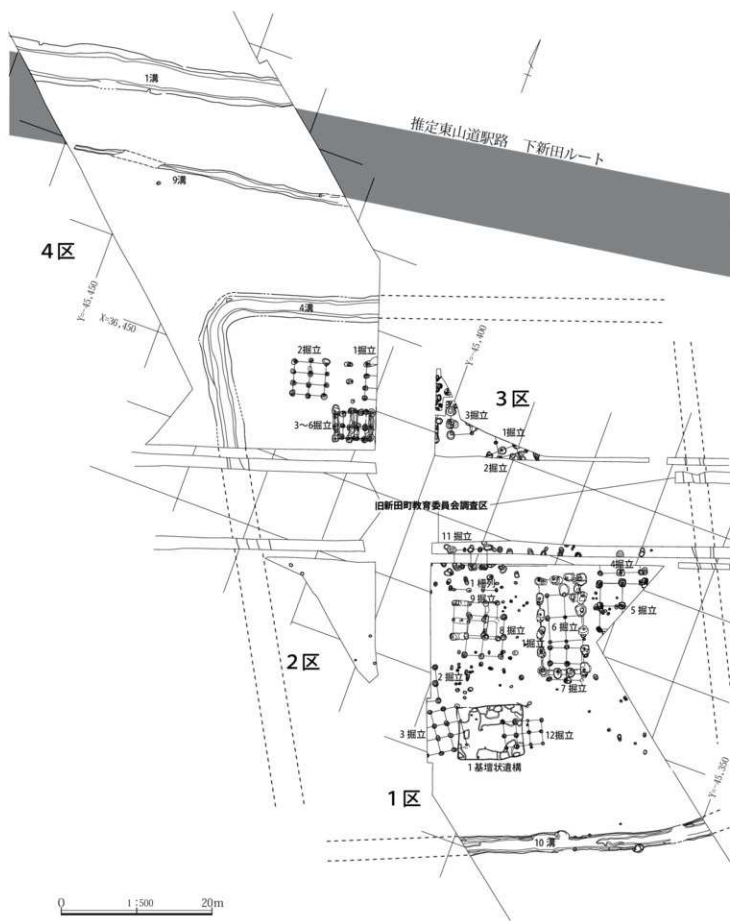
周囲を区画する溝は、笠松1・2区の調査では南辺と東辺だけが見つかり、北辺、西辺は明らかではなかった。そのため、『昨年度報告書』では、西辺は旧新田教育委員会が主要地方道足利伊勢崎線の拡幅工事に伴って行った調査(新田町教育委員会『天良七堂遺跡・笠松遺跡』1999)で見ついている2号溝を結んだ線と推定し、また、北辺は北側を東西に通しているはずの推定東山道駅路下新田ルートが相当すると推定された。そのようにして復元した区画の形は、かなり歪んだ台形であった。

本年度の調査によって4区で見つかった4号溝は、それが掘立柱建物の外側でL字形に曲がる溝であることか

ら、区画の北西コーナーに相当するものと思われる、とすればそれによって西・北辺が確定することになる。この溝は幅2.84～3.66mと大きく、逆台形の整った断面形をもち、また、埋土の上層にAs-Bが堆積しているなどの特徴が、区画南・東辺である笠松1区10号溝と共通している。さらにその位置や走行方向から考えても、区画の北西角としてふさわしいので、これを区画の北西隅と断定して間違いないであろう。出土する土器も8世紀中頃～9世紀後半の土器がほとんどであり、これも笠松1区10号溝と共通するので矛盾はない。

また、笠松3区では1号溝が調査され、これが笠松1区10号溝の北延長線にあることから、東辺の位置が補強できた。以上の成果から区画を復元すると、第88図のようになるとと思われる。各辺の溝の走行方向は、南辺の笠松1区10号溝がN-68°-E、東辺の1区10号溝と3区1号溝を結んだ線がN-28°-W、北辺の4区4号溝がN-71°-E、西辺の4区4号溝がN-29°-Wであって、やや歪んではいるものの平行四辺形に近い形となる。その規模は、溝の内側で計測して北辺が約59m、東辺が約65m、南辺が約55m、西辺が約70mである。この区画溝の中に多くの掘立柱建物と基壇状遺構が配置されているのである。区画の外側にはそのような建物は見つかっていないで、その点からもこれらの溝が区画溝であることが裏付けられる。つまりこの区画の施設は、溝に囲まれて周囲から隔てられ、ひとつの「院」をなしているのであり、それだけ他から独立した役割をもった施設であるということになるであろう。

建物は、笠松1区で掘立柱建物11棟と基壇建物(調査では掘り込み地業の最下部と思われるものが確認されただけなので、『昨年度報告書』では「基壇状遺構」と呼称しているが、建物とすれば基壇建物であるので、以下の記述ではそのように呼称する)1棟、笠松3区で掘立柱建物3棟、笠松4区で掘立柱建物6棟があり、単純に合計すると掘立柱建物20棟、基壇建物1棟が区画内に建てられていたことになる。その他、建物として認めなかった柱穴が1区と3区を中心に数多くあるので、本来存在し



第88図 官衛的区画と推定東山道駅路下新田ルート
 (旧新田町教育委員会の調査区は、新田町教育委員会「天良七堂遺跡・笠松遺跡」1999による)

た建物の数はもっと多かったはずである。これらの建物群には数時期の変遷があったはずであるが、重複関係にない建物が多く、遺物の出土も少ないため、明確な変遷案を示すのは困難である。

『昨年度報告書』で検討されている笠松1区では、「区画の中にまず1号掘立柱建物という大型の建物と、それとL字型に直交する方向の1号基壇状遺構が作られ、1号掘立柱建物は少なくとも1回の建て替えが行われた後、多くの総柱建物が2～4時期にわたって建てられ続けた」と推定している。つまり1区では最大で6時期程度の変遷があったと考えられている。笠松3区では狭い調査区の中に数多くの柱穴がみられるので、数時期の建物が重複していることは分かるが、時期を判断するのは難しい。4区では1、2号掘立柱建物はそれぞれ建て替えないと考えられるが、3～6号掘立柱建物は同一位置に建てられているので、ここでは少なくとも4時期が確認でき、笠松1区を越えることはないようである。つまりこの区画内では、全体として4～6時期か、あるいはそれ以上の変遷があったと言える。

建物の形態は、笠松1区にみられる、基壇建物(1号基壇状遺構)と大型のいわゆる側柱建物(1号掘立柱建物)以外は、比較的小規模な総柱建物がほとんどである。1区では1号掘立柱建物を除いた10棟のうち、総柱建物は8棟である。残りの2棟は1辺しか調査区にかかっていないため不明であるが、総柱建物であっても不思議ではない。それらの規模は、3間×3間以上のものが1棟(3号掘立柱建物)、2間×3間が1棟(12号掘立柱建物)ある他は、いずれも2間×2間のものである(5号掘立柱建物など、さらに大きくなる可能性のある建物もある)。3区では3棟の建物を推定したが、いずれも柱穴がL字形に配置されていることから建物を把握できただけで、それが建物のどの部分であるかは確認できていないため、総柱建物であるかどうかは不明である。4区では、2号掘立柱建物が2間×3間の総柱建物である。東側にある1号掘立柱建物は西辺のみが調査できただけで構造が明らかではないが、特徴が2号と似ているところがあり、これも総柱建物である可能性が高い。3～6号は調査区境が近いので、その方向にさらに長くなるかもしれないが、3号は2間×2間の総柱建物、5号は2間×1間以上の総柱建物である。6号は目隠し堀的な施設

である可能性が高いので建物の検討には除外して考える必要がある。4号は側柱だけしか見つからないので、これのみいわゆる側柱建物である可能性があるが、建物の内側中央にはやや位置が外れているものの柱穴がみられるため、総柱建物ではないと断定することもできない。以上のように、総柱建物ではないのは、笠松1区1号を除けば、わずかに疑問は残るものの笠松4区4号だけであり、その他の建物はみな総柱か、その可能性を残すものである。それが『昨年度報告書』で示したような変遷通りだとすると、1号掘立柱建物という大型の建物と、1号基壇建物が最初に作られた後、やや小規模な総柱建物が区画内に造られ続けたということになる。これはこの区画の性格を考える上で重要な点である。

最初に建てられたと推定した基壇建物(1号基壇状遺構)は、区画の東辺と西辺とのほぼ中間に位置し、南辺区画溝とも方向がほぼ一致している。そのためこの建物の位置は、区画溝に合わせて決められていると思われる。そして、それが最も南に配置される建物である。1号掘立柱建物はその斜め北側に、ほぼ直交する方向で配置されている。1号基壇建物の中軸線がこの区画内の建物配置の中軸線だとすると、1号掘立柱建物はそれから7m離れて建てられていることになるが、とすれば、その西側の対称的な位置にも同規模の建物があるのではないかと推定も当然考えられる。しかし残念ながらその位置は調査区外となってしまい、調査区西辺近くでも柱穴は見つからなかった。そのため、対照的な位置に同規模の建物が存在する可能性はあるものの、その当否は確認できていない。現状では、区画内部の南半部では、当初南側に基壇建物と大型の掘立柱建物がL字形に配置されていたことは確認できたが、コの字形配置については未確認といわざるをえない。

次に問題となるのはこれらの建物の北側にどのような建物があったかであるが、これも判然としない。4区の状況からは小規模な総柱建物か、あるいは東西に長い建物が配置されていた可能性があるが、最初期の建物がどれなのかは確定できないからである。3区をみると、3号掘立柱建物とその周囲には大きな柱穴が多く、また、3号掘立柱建物の方位はN-24°-Wで、笠松1区1号掘立柱建物に近い(1号は2時期あり、新しいAの方位はN-23°-W、古いBはN-25°-W)ので、これらが

同時期かそれに近い時期である可能性は高い。それが正しければ北側にも笠松1区1号掘立柱建物のような大規模な建物が建てられていた可能性がある。ただし、何度も述べるように3区の調査区は狭小なので、建物規模は全く分からない。いずれにしろ、区画の中の建物変遷は、最初に基壇建物と大型掘立柱建物が区画の形を意識した規則的配置をとって建てられたのち、総柱建物が数時期にわたって建てられたということになる。その間の建物にはかなりの格差が認められるので、そこにこの区画の役割の変化を認めることができるであろう。

これらの施設の年代は、『昨年度報告書』では笠松1区1号掘立柱建物の柱痕から8世紀末～9世紀の須恵器が出土し、区画溝である10号溝から8世紀後半～9世紀後半の土器が出土しているの、建物群の初現は8世紀代に遡る可能性があるとしている。さらに基壇建物には出土遺物がないが、それに関わる可能性がある1号粘土採掘坑からは、8世紀前半にまで遡る遺物が出土していることも指摘している。笠松3、4区においても掘立柱建物から出土する遺物はほとんどないが、区画溝(4区4号溝)から出土する遺物は8世紀中頃～9世紀後半の土器がほとんどなので、年代的に矛盾するようものはない。そのため、この区画溝と建物群とは、8世紀代には作られていたと考えられる。

出土遺物のみでは、それ以上詳細な年代は推定できないが、新田郡庁の建物変遷と、この区画の北側を通過するはずの推定東山道駅路下新田ルートの設置時期が参考になる。小宮俊久氏は、『天良七堂遺跡3』(太田市教育委員会 2012)のなかで、8世紀中葉頃の「3段階」に下新田ルートが設置され、郡庁の建物も正方位に向きを変えたと述べられている。つまり、新田郡庁では下新田ルートの設置が大きな画期となっているのである。ところが、笠松遺跡の区画溝や掘立柱建物はみな西に振れ、正方位を取るものがみられない。さらに、下新田ルートの方位(次項で述べるようにN-80°-E前後と推定される)に近いものもみられないのである。下新田ルートのような大きな道路が築かれ、それが郡衙の施設配置に重要な意味をもっていたのだとすれば、この道が築造されたあとに、それと無関係の方向の区画が作られるとは考えにくい。とすれば、笠松遺跡の区画は、下新田ルートが設置される以前に作られたものと考えることができるのでは

ないだろうか。そこで興味深いのが、笠松1区にある4号竪穴住居の存在である。この竪穴住居は掘立柱建物群の中にあるが、それらの建物群が機能していたときに竪穴住居が中央に建てられていたとは思えないので、この住居は掘立柱建物群よりも古いことになるであろう。その住居の時期がまさに8世紀前半なのである。以上のことから、この区画が作られた時期は、8世紀前半の下新田ルートの設置前と推定される。その後4～6時期の建物変遷があるので、その存続期間は長かったはずだが、建物方位が下新田ルートの設置後も大きく変化していない理由は、区画溝が作り替えられなかったので、溝にほぼ合致している当初の建物方向が、そのまま踏襲されたからと考えられるのではないだろうか。

この区画の廃絶時期は、『昨年度報告書』でも述べられているとおり不明であるが、9世紀後半以降の遺物は少ないので、そのころが一つの画期になると思われる。新田郡庁の廃絶時期も小宮俊久氏によれば9世紀後半だということであり(前掲書による)、とすれば、この区画も郡庁と軌を一にして廃絶した可能性が強いのではないだろうか。区画溝の上層には4辺ともAs-Bの一次堆積がみられるので、そのころには溝もほとんど埋まっていたことになる。

最後にこの区画の性格であるが、残念なことにこの点についても確定することは難しく、『昨年度報告書』で述べられている以上のことを述べるのは困難である。先述したように、溝で区画された「院」の中のみ建物が配置され、それが他の施設から離れた位置にあることから、独立した役割をもった施設で、郡庁の近傍にあることから何らかの官衙に当たると考えるのが妥当であるが、ではそれが何なのかということ、出土文字資料もなく推定する根拠に乏しいからである。ただしその際にまず確認しておくべきことは、区画内に基壇建物と大型の掘立柱建物が作られていた段階と、やや小規模な総柱建物が建てられていた段階とがあるらしいことである。その変遷が正しいとすれば、両段階の間に区画の性格が大きく変わったことになる。区画の性格を考える場合には、それを考慮に入れる必要がある。

郡衙の施設としては、『上野国交替記録』その他の史料から、郡庁、正倉、厨家、館があることが分かっている。しかし『昨年度報告書』でも述べられているとおり、その

いずれにも当てはまらない可能性が高い。郡庁、正倉は本遺跡の東で調査されているし、土器の出土が少ない本遺跡が厨家・館など人の生活に関わる施設としてふさわしいとは思えないからである。ただし館の調査例自体がさほど多いわけではないので、その可能性を完全に排除すべきではないと思われ、今後の検討の際には館も考慮に入れるべきだと思われる。また、区画の内部に総柱建物が建ち並んだ時期は、正倉の役割の一部を担っていたと考える余地も残っていることも付け加えたい。

その他郡衙周辺の施設にはいろいろなものがあるが、ここが交通の要衝であるということから有力な候補となるのはやはり新田駅家である。この区画の北側には何度も述べるように推定東山道駅路下新田ルートが通過しており、それ以前の駅路と推定されている牛堀矢ノ原ルートも南側を通過し、さらに東山道武蔵路も南東からこの付近に合流してくる。そのような交通の要衝であり、独立した役割をもった官衙として、新田駅家上げられるのは当然であろう。しかし駅家の遺跡は山陽道駅路以外では明確なものが見つからないので、東国地域における駅家の典型的な姿がどのようなものかは判明していない。そのため本区画の建物がそれにふさわしいかどうかの判断材料に乏しく、駅家が有力候補とはなるものの断定するには至らないのが現状である。その際に疑問点としてあげられるのは、この区画の設置が新田ルートよりも先行するという推定が正しいとすると、南側にやや離れた牛堀・矢ノ原ルートが機能していた時期に新設された施設ということになるが、わざわざ駅路から離して作る理由は何なのかという点である。さらに、南にある道路を意識したののだとすると、南辺区画溝(笠松1区10号溝)に入り口的な施設がないのも不審である。北の入り口も今回の調査区外になると思われ、この施設の正面がどちら向きなのか、現状では断定しきれないが、それも含めて施設の性格を判断する材料に乏しく、やはり確定的に述べることは困難である。さらにのに総柱建物ばかりに建物構成が変化することも合理的に説明できなければならない。現状では新田駅家である可能性を考慮に入れながら、今後検討を重ねていく必要があるだろう。

推定東山道駅路下新田ルートについて

すでに何度も述べているように、笠松4区には推定東

山道駅路下新田ルートが通過することが、周辺の遺跡の調査結果から分かってきた。ここではその成果についてまとめておきたい。

本遺跡近傍の下新田ルートは、新田郡庁の調査の中で明確になっている。そのルートは第87図のとおりで、郡庁の南を通過して西に延び、笠松1～4区の区画の北側を通過している。通過地点は笠松4区中央に当たり、また、天良七堂5区とした部分では北側溝がかかるはずであった。駅路北の側溝は、北側が幅広く深く掘られ、それが新田郡庁と正倉群の南限溝となっている。

調査の結果、推定位置に駅路側溝とはほぼ同じ走行方向を示す溝(笠松4区1、9号溝、天良七堂5区1号溝)が見つかり、これが下新田ルートと考えられる。ただし、これらの溝は本文中に述べたように、いずれも中世以後に掘られたもので、古代に遡るものではない。笠松4区1、9号溝では含まれている火山灰を分析した結果、埋土の上層から下層までAs-Bが含まれていることが明らかとなり、中世以降の溝であることが判明しているのである。そのため、これらの溝が古代東山道駅路の側溝ではないことは明白であるが、天良七堂5区の1号溝では、下層により古い溝が一部確認できるので、あるいは古代の溝が同位置で重なっているかもしれないと考えられた。このような状況は太田市教育委員会の新田郡庁関連の調査でも同様である。前掲の報告書『天良七堂遺跡3』によれば、郡庁の南に位置するH22-3トレンチでは、古代の駅路北側溝と思われる26号溝を壊して古代より新しい時代の掘削と考えられている22号溝が掘られている。この22号溝は、より西側のH22-17トレンチでは完全に26号溝の上ののってしまい、ここでは26号溝が確認できなくなっている。同様な状況は、天良七堂5区と笠松4区の間面に設けられたH22-14トレンチまで続くが、そこの西端では22号溝が南に大きく曲がって古代の26号溝が現れるようになるという。この南に曲がる22号溝は、その位置から見て、笠松3区2号溝、笠松1区1号溝につながるものと思われる。以上のように、古代の駅路北側溝=26号溝は、新田郡庁の南では古代より新しい溝=22号溝で大きく壊され、それが全く確認できない場所もあるほどなのである。その状況は本遺跡と同じであるので、笠松4区においても中世以降と思われる1号溝が、古代の駅路北側溝を完全に壊しているのだと考え

たいところである。しかしそのように理解すると大きく矛盾するのは、笠松4区のすぐ東側に当たるH22-14トレンチではその新しい22号溝は南に曲がってしまい、その下層になっていた古代の26号溝が現れるとされていることである。つまりこのトレンチから笠松4区1号溝につながるように延びているのは、古代の26号溝であって、それより新しい時期の22号溝ではないのである。このトレンチと4区との間はわずかな距離であるが、この矛盾を解決するためには、笠松4区では別の新しい時期の溝＝笠松4区1号溝が入ってきて、古代の北側溝＝26号溝に完全に重なって破壊していると考えられるしかない。後述するように、笠松4区1号溝の方向が駅路の走行方向とやや違うのはそのためであるかもしれない。これまでの調査結果を合理的に解釈するにはこの理解しかないことになるが、H22-14トレンチと笠松4区との間では調査が行われていないので、その可否は確認できない。

また、南側溝と推定される笠松4区9号溝もAs-B降下以降に掘削されたものである。南側溝は太田市教育委員会の調査でもH22-14トレンチ、その東側のH22-19トレンチで27号溝として調査されている。前掲の報告書ではその時期について明記がないが、H22-19トレンチでは掘り直しが確認されており、やはり新しい時期に掘り直されることがあったらしい。それが笠松4区と同じAs-B降下後なのかどうかは不明であるが、いずれにしろこの付近では駅路側溝がAs-B降下以降に掘り直され、何らかの用途に利用されていたのである。

以上のように本遺跡では、As-B以降に掘り直されているため側溝の掘削時期が新しくなってしまうが、古代の駅路側溝は同位置にあったことが確実であり、笠松4区の1号溝、9号溝が駅路側溝の後進と考えられるのである。ただしこの2条の溝の間が路面になるものの、路面そのものは完全に削平されており、道路跡に関わる硬化面や整地などの痕跡は全く残っていない。天良七堂5区では溝の北側に硬化面が見られたが、それは路面とは反対側になり、道路跡に関わるものとは考えられず、性格は不明である。また、1号溝と9号溝とは、本文で述べたように走行方向がやや異なる。1号溝はN-77°-E、9号溝はN-82°-Eで、その差は5°程あり、東に向かって広がる角度になっている。太田市教育委員会の調査では、道路の走行方向は前掲のH22-14トレ

ンチでN-80°-Eだということなので、1・9号溝ともやや異なり、中間の方位ということになる。4区における下新田ルートの幅は、両側溝が平行しないので参考にしかならないが、満心一心で計測すると、東端で12.5m、西端で10.5mとなる。

中世以降の状況

前項で述べたとおり、推定東山道駅路の側溝は、As-B降下以後に大きく掘り直されている。その掘削年代は明らかではないが、本遺跡では他にも中世以後と考えられる溝が多く存在し、注目される。たとえば、下新田ルートの上を横断する笠松4区2号溝や、北側溝である笠松4区1号溝から南に分岐する笠松4区19号溝、調査区の中央部を横断する笠松4区34号溝など、幅が広く規模の大きな溝が存在する。これらの溝には埋土にも水が流れた痕跡は認められないが、水が流れていた可能性を全く否定することもできないと思われ、一部は用水路として用いられたものかもしれない。いずれの溝も規模が大きいため民衆が軽々に掘削できるものではないと思われるし、部分的に駅路側溝を利用しているので、ある程度公的な要素もそこには認めることができるであろう。溝が実際にどこからどこに向かっているのかは、周辺の調査がさらに進展しないと判明しないので、その役割について現状では明言できないが、この地域の政治的状況なども反映した溝であると思われ、地域の歴史を解明する上では重要なものと考えられる。

また、遺跡内からは南北方向、つまり土地の傾斜にほぼ沿って多くの溝が掘られているのが見つまっている。第2章第1節で述べたように、この地域は大間々扇状地の末端に近い場所である。そして、湧水地帯のやや北側に当たると、場所によっては大雨の際に水がしみ出してくることがあるということであり、そのための排水用の溝がこのような南北溝なのだと考えられる。溝の埋土中から出土する遺物は少ないので、この溝の時期を確定するのは困難であったが、いずれも中世以後とみられ、そのころこの地域に住んだ人々が、排水のための溝を設けたのがこのような溝なのであろう。とすれば、この多くの溝の存在にこの地域の特徴が良く現れているということができ、これも遺跡の性格を表すものとして重視すべき遺構であろう。

遺物観察表 凡例

遺物観察表(第17表～第20表)では略号などを多く用いた。以下にその凡例を掲げる。

出土位置 出土位置を挿入にドットで示してある遺物については、遺構内のおおよその出土位置を記述し、同時に底面とのレベル差を+○(cm)と示す。cmは略。

計測値 土器・陶磁器は基本的に口径・底径・器高を計測し、それぞれ「口」「底」「高」と略している。「台径」は高台径あるいは台付裳等の台径を示す。単に「径」とある場合は、この「台径」のことである。ただし小破片のためこれらの計測値を示さないものも多い。縄文土器はいずれも小破片であるため、計測値を示せるものはなかった。石製品・金属製品などでは長さ・幅・厚さなどを計測しているが、形状により異なるので表中に計測位置を明示した。単位はすべてcmである。重さを計測した場合の単位はgである。なお()は推定値、[]は残存値を表す。

胎土 土器は夾雑物を記述する。古墳時代～古代の土器では、砂粒の場合は2mm以下を細砂粒、2mm以上を粗砂粒とする。その他、軽石、角閃石、小礫などの混入を記述する。中近世の在地系土器についてはA・Bで区別するが、Aは片岩に由来する雲母状に光る鉱物を含むもの、Bはそれを含まないものを示している。縄文土器は、細砂粒、粗砂粒などの混入を記述し、前期の土器の場合は繊維の混入を明示した。

焼成 古墳時代～古代の土器については、土器器の場合は「良好」か「やや不良」かを区別し、須恵器の場合は「還元焰」か「酸化焰」かを区別して記入している。縄文土器は「良好」か「ふつう」かを区別している。中近世の土器・陶磁器は特にこの項目を設けず、記述する必要がある場合は成形・整形の特徴の項目に記述する。

色調 『新版標準土色帖1999年版』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)に準拠した。

中近世の土器・陶磁器の年代 次の文献によっている。

在地片口鉢 星野守弘「軟質陶器」『新編高崎市史 資料編3 中世I』高崎市 1996

内耳鍋 秋本太郎「上野と周辺地域との関係―在土器の分布論を中心に―」『海なき国々のモノとヒトの動き -16～17世紀における内陸部の流通-』内陸遺跡研究会 2005

在地系土器皿 木津博明「上野国に於ける在土生産土器について」『中近世土器の基礎研究』V 中世土器研究会 1989

常滑 中野晴久「常滑窯」、「編年表」『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世・常滑系』愛知県 2012

第17表 遺物観察表(1)

笠松遺跡3区遺構外								
挿入番号 写真番号	No.	種 器 類	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要	
第15図 PL.32	1	砥石 破片		長[4.5] 幅3.4	厚1.4 重31.8	流紋岩	四面使用。上端側小口部に切断痕が残る。	
笠松遺跡4区17号土坑								
第29図	1	須恵器 鉢	埋土 底部2/3	底6.6		細砂粒/還元焰/灰 黄緑	ロクロ整形(右回転)底部は回転糸切り無調整。	
笠松遺跡4区1号井戸								
挿入番号 写真番号	No.	種 器 類	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要	
第30図	1	瓦 丸瓦か	埋土 破片	長14.3 巾11.8	厚2.6	細砂粒・粗砂粒/酸 化焰/にぶい赤褐色	桶巻き造りか。外面は漚で、内面は布目。	
第30図	2	尾張陶器 片口鉢	埋土 口縁部片			//灰白	口縁部は小さい玉縁状をなす。端部内面は小さい段状に厚減。	片口鉢1類。13世紀第3四半期。
第30図 PL.32	3	尾張陶器 片口鉢	埋土 底部片			//灰白	高台貼り付け。内面の底部と体部境は使用による擦れにより窪む。	片口鉢1類。中世。2と同一個体か。
第30図 PL.32	4	砥石 切り砥石	埋土 破片	長[4.8] 幅[3.0]	厚[2.0] 重32.6	砥沢石	四面使用。形状は糸巻状を呈し、上半部を大きく破損。	

遺物観察表

第18表 遺物観察表(2)

笠松遺跡 4区2号井戸									
検出番号 写真番号	No.	種 器	類 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要
第31図	1	常滑陶器 甌か	埴土 破片				/暗赤褐	断面は灰白色、器表は暗赤褐色。外面は自然釉が厚くかかり、下部に流れる。	中世。
笠松遺跡 4区2号溝									
検出番号 写真番号	No.	種 器	類 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要
第32図	1	龍泉窯系青磁 杯	埴土				/灰白	体部外面に筋襷弁文。全面釉施後に高台端部を削る。器壁に比して軸は厚い。高台径は小さく、断面形も三角形。	Ⅱ-2次植。13世紀初頃前。
笠松遺跡 4区4号溝									
検出番号 写真番号	No.	種 器	類 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要
第36図 PL.32	1	土師器 杯	北西角+10 口縁一部欠	口12.0 底8.0	高	4.2	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。体部外面は横のへつ削り。底部は手持ちへつ削り。内面は撫で。	粉っぽい素地。明文の可能性があるが内外面摩滅のため不明。
第36図 PL.32	2	須恵器 杯	南西部+10 1/2	口12.8 底7.6	高	3.9	細砂粒/還元焰/にふい・黄緑	ロクロ整形(右回転)底部は回転系切り無調整。	内外面厚減。墨書判読不能。
第36図 PL.32	3	須恵器 杯	南西部+2	口11.7 底7.7	高	3.5	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)底部は回転系切り後、周辺を回転へつ削り。	
第36図 PL.32	4	須恵器 杯	理土 3/4	口12.4 底7.9	高	3.1	細砂粒・小礫/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)底部は回転系切り後、周辺を回転へつ削り。	底部中央部に円形の磨き。
第36図	5	須恵器 杯	埴土 口縁+底部片	底8.4			細砂粒・粗砂粒/還元焰/褐灰	ロクロ整形(右回転)底部は回転へつ削り。	
第36図	6	須恵器 杯	埴土 口縁+底部片	底6.2			細砂粒/還元焰/褐灰	ロクロ整形(右回転)底部は回転系切り無調整。	外面部分的に吸灰
第36図 PL.32	7	須恵器 杯	北西角+24 1/4	口14.8 底9.6	高	4.2	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)底部は切り離し後、回転へつ削り。	見込部摩滅。
第36図 PL.32	8	須恵器 杯	埴土 1/2	口13.4 底5.6	高	4.0	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)底部は回転系切り無調整。	
第36図 PL.32	9	須恵器 杯	北東部+21 完形	口11.6 底4.9	高	4.0	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)底部は回転系切り無調整。	歪みか顕著。
第36図	10	須恵器 杯	埴土 体部+底部片	底7.0			細砂粒・粗砂粒/還元焰/褐灰	ロクロ整形(右回転)底部は回転系切り無調整。	
第36図 PL.32	11	須恵器 碗	埴土 口縁+体部1/3	口14.8			細砂粒/還元焰/褐灰	ロクロ整形(右回転)	
第36図	12	須恵器 杯	埴土 1/2	底9.6	径	9.8	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)高台は底部回転へつ削り後の付け高台。	
第36図	13	須恵器 杯	北西部+6・7 底辺2/3	底10.0	径	9.0	細砂粒・粗砂粒/還元焰/明赤褐	ロクロ整形(右回転)高台は三角高台状で、底部回転へつ削り後の丁寧な付け高台。	
第36図 PL.32	14	須恵器 杯	埴土 口縁+底部片	口13.8 底6.6	径	5.4	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)高台は底部回転系切り後の付け高台で、端部に凹縁を施す。	
第36図 PL.32	15	須恵器 杯	埴土 底部片	底6.2	径	5.6	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)高台は底部回転系切り後の離れ付け高台。	
第36図	16	須恵器 皿か	埴土 底部	底6.5	径	6.0	粗砂粒・小礫/還元焰/にふい・黄緑	ロクロ整形(右回転)高台は低く、底部回転系切り後のやや離れ付け高台。	
第36図	17	須恵器 碗か	埴土 底部1/2	底6.0			細砂粒・粗砂粒・小礫/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)高台は底部回転系切り後の付け高台で、端部に凹縁を施す。	
第37図 PL.32	18	須恵器 皿	埴土 1/4	口13.0 底6.6	高	2.7	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰黄褐	ロクロ整形(右回転)高台は底部回転系切り後の付け高台。	
第37図 PL.32	19	須恵器 皿	埴土 1/2	口13.6 底7.6	高	2.9	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)高台は底部回転系切り後の付け高台。	高台剥落。
第37図 PL.32	20	須恵器 盤か	埴土 杯底部+脚部片				細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)脚部は、杯下部を回転へつ削り後の丁寧な取り付け。	見込部やや摩滅。
第37図	21	瀬戸・美濃陶器 天目碗	埴土 口縁部片				/灰白	内外面に光沢のある鉄釉。口縁端部は強く外反。	17世紀か。
第37図	22	在地系土器 焙烙	埴土 口縁部片				B/淡黄	体部はやや内湾。外面中に接合痕現る。外面下位は遊削り。	江戸時代。
笠松遺跡 4区6号溝									
検出番号 写真番号	No.	種 器	類 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要
第40図	1	中国青白磁 甌か	埴土 体部小片				/白	外面施文後に内外面施釉。小片のため詳細不明。	13～14世紀。
笠松遺跡 4区9号溝									
検出番号 写真番号	No.	種 器	類 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要
第32図 PL.32	1	銅鏡 鏡水遺寶	埴土 完形		径	22.33～22.34mm 重1.79		新寶永。新寶永の中でも器厚が薄い。背文字は認められない。	
笠松遺跡 4区14号溝									
検出番号 写真番号	No.	種 器	類 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要
第39図	1	須恵器 瓶	埴土 体部片				細砂粒・粗砂粒・軽石/還元焰/黒褐	ロクロ整形(右回転)	胴部に自然釉。
第39図	2	須恵器 瓶	埴土 体部+底部1/2	底12.0	径	11.6	細砂粒・粗砂粒/還元焰/暗褐	ロクロ整形(右回転)高台は丁寧な付け高台で端部に凹縁が顕る。	高台端部に圧痕。

第19表 遺物観察表(3)

笠松遺跡4区14号遺跡

種別番号 写真番号	No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要
第399図	3	土師器 土付罌	埋土 台部1/3	底 4.1 口径 8.3	細砂粒・角四石/良好/赤黒	成形・整形の特徴	脚部内外面は横撫で。胴部内面はヘラ撫で。
第399図	4	土師器 土付罌	埋土 口縁～胴部	口 13.8	細砂粒/良好/赤黒	成形・整形の特徴	口縁部は横撫で。胴部外面は横のヘラ削り、内面は斜めのヘラ撫で。

笠松遺跡4区14・15号溝

種別番号 写真番号	No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要	
第399図 PL.32	1	須恵器 鉢	埋土 2/3	口 14.4 底 7.2	高 5.9	粗砂粒・粗砂粒/酸化燧/明赤黒	口クロ整形(右回転)底部は回転糸切り無調整。	底部内柱作りか、底部が円盤状に割断。
第399図 PL.33	2	砥石 磨石	埋土 完形	長 11.8 幅 8.9	厚 6.9 重 855.7	粗粒輝石安山岩	礫刃辺部に砥打痕がある。	
第399図 PL.33	3	磨石 磨石	埋土 完形	長 12.8 幅 12.9	厚 7.0 重 1547	粗粒輝石安山岩	背面側の平坦面が摩耗して、光沢を帯びる。	

笠松遺跡4区28号溝

種別番号 写真番号	No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要	
第411図	1	在地系土器 焙烙か	埋土 体部片			B//灰黄	成形・整形の特徴	断面中央は灰色。器表付近は浅黄褐色。内面は粗い織文磨き。外面上半は横撫で。外面下半は縦削り。

笠松遺跡4区遺構外

種別番号 写真番号	No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要		
第458図 PL.32	1	縄文土器 深鉢	1方遺構北側 口縁部片			粗砂/ふつう/黄橙	成形・整形の特徴	内反ぎみの平口縁の口縁下は無文帯で、隆線を1条添らせて文様帯区画し、以下の胴部にR.Lの織文を施す。	加曾利E式。
第458図 PL.32	2	縄文土器 深鉢	トレンチ 胴部片			粗砂/良好/橙	成形・整形の特徴	胴部に鐘杉状の沈線と蛇行沈線を縦位に施し、地文に織文を施す。	加曾利E式。
第458図 PL.32	3	縄文土器 深鉢	34号溝 胴部片			粗砂/良好/橙	成形・整形の特徴	胴部に沈線と懸垂文とR.Lの織文を縦位に施す。	加曾利E式。
第458図 PL.32	4	縄文土器 深鉢	表土 胴部片			粗砂/ふつう/黄橙	成形・整形の特徴	胴部に沈線と懸垂文とR.Lの織文を縦位に施す。	加曾利E式。
第458図 PL.32	5	縄文土器 深鉢	1号溝 胴部片			粗砂/ふつう/黄橙	成形・整形の特徴	胴部にR.Lの織文を縦位に施す。	加曾利E式。
第458図 PL.32	6	磨製石斧 片尻状	表土 片部欠	長 [11.9] 幅 [4.6]	厚 3.3 重 243.9	変玄武岩	成形・整形の特徴	完成状態。表裏面とも丁寧に研磨する。器体下部を欠損する。破損部の後に砥打痕があり、砥石として転用。	
第458図 PL.32	7	石製 四基無茎鏃	表土 完形	長 2.3 幅 1.3	厚 0.3 重 0.7	黒色頁岩	成形・整形の特徴	完成状態。背面側に大きく素材面を残す。加工は粗い。	
第458図	8	龍泉系青磁 碗	埋土 口縁部片			//灰白	成形・整形の特徴	器壁は厚く、器縁に比して縁は薄い。外面は片形りによる蓮弁文であるが、破片が小さく鏡の有無は不明。	II類。13世紀前後～前手。

笠松遺跡5区2号井戸

種別番号 写真番号	No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要		
第488図	1	常滑陶器 罌	埋土 体部片			//橙	成形・整形の特徴	外面は板状工具による縦位撫で。	中世。
第488図	2	在地系土器 火鉢	埋土 口縁部片			B//明黄褐	成形・整形の特徴	口縁部は外反し。胴部は内外に突き出る。口縁部に焼成前の穿孔が1箇所残る。	中世。

笠松遺跡5区1号溝

種別番号 写真番号	No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要		
第538図	1	須美陶器 罌	埋土 口縁部片				成形・整形の特徴	口縁部は強く外反し、端部の強い横撫では指跡的。口縁部内面と胴部外面に自然軸。体部内面下部は使用り。内面の底部と体部境は顕著な擦れにより窪む。体部内面下部は使用による擦れが認められる。	12世紀末～13世紀初頭。
第538図 PL.33	2	須美陶器 罌	埋土 体部片				成形・整形の特徴	外面は板状工具による斜位撫での後、帯状の叩き目。	12世紀～13世紀初頭。
第538図	3	須美陶器 罌	埋土 胴部片				成形・整形の特徴	胴部外面に叩き目。上部外面に自然軸。	12世紀～13世紀初頭。
第538図	4	常滑陶器 罌	埋土 体部片			//暗赤褐	成形・整形の特徴	断面は灰白色。器表は暗赤褐色。	中世。
第538図 PL.33	5	在地系土器 片口鉢	埋土 1/5	口 (28.0)		//灰	成形・整形の特徴	断面中央は灰色。器表付近はにぶい黄褐色。器表は灰色。口縁部は小さい玉縁状をなし、端部は尖り気味。玉縁状部分のみ横撫で。体部内面下部は器表磨滅し、中位は平滑となる。	14世紀中頃。
第538図	6	在地系土器 片口鉢	埋土 体部下位片			B//にぶい黄	成形・整形の特徴	断面は褐色。器表はにぶい黄色。内面は使用による擦れ。	中世。
第538図	7	在地系土器 片口鉢	埋土 口縁部片			B//灰白	成形・整形の特徴	口縁部は玉縁状をなし、端部は尖り気味。	14世紀中頃。
第538図 PL.33	8	板碑	埋土 破片	長 [6.5] 幅 [4.0]	厚 [0.5] 重 19.0	黒色片岩	成形・整形の特徴		
第538図 PL.33	9	玉版印塔	埋土 破片	高 [7.5] 幅 [5.8]	厚 一 重 240.0	粗粒輝石安山岩	成形・整形の特徴	笠部破片。外面は磨き整形されている。多孔質石材を用いるため、工具痕は不明瞭。	
第538図 PL.33	10	砥石 切り砥石	埋土 破片	長 [5.1] 幅 [4.2]	厚 [2.0] 重 60.4	砥沢石	成形・整形の特徴	四面使用。石材は軟質で、著しく研ぎ減る。糸巻状を呈し、上半部を大きく欠損する。	

遺物観察表

第20表 遺物観察表(4)

笠松道線 5区1号落ち込み

挿図番号 写真番号	No.	種 器 類	出上位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要	
第58図 PL_33	1	常滑陶器 甕	埋土 体部片			//暗赤褐	外面は板状工具による縦位撫で。内面の器表擦れによりやや平滑。	中世。
第58図 PL_33	2	在地系土器 平口鉢	埋土 体部片			B//浅黄、灰	断面から内面器表は浅黄色。外面器表は灰色。内面下部の器表は横位撫でにより平滑。	中世。
第58図 PL_33	3	砥石 板破片	埋土 破片	長 [9.7] 幅 [5.7]	厚 [1.1] 重 83.2		緑色片岩	背面側上平の研磨面は横位線条がある。
第58図 PL_33	4	土輪塔 火輪	埋土 一部欠	高 14.7 幅 25.2	厚 一 重 10250		粗粒輝石安山岩	上端側は軒反り、軒口は外側に強く開く。隅棟袖部は直線的だが、上端部は反り上がる。隅棟に径7cm前後の駒穴を穿つ。底面側は磨減が激しく、体部に細い工具痕が見える。
第58図 PL_33	5	五輪塔 水輪	埋土 一部欠	高 [19.5] 幅 31.8	厚 一 重 19250		馬見岡燧灰岩	上面が大きく新落して全容が不明だが、浅い凹部が穿たれており、水輪を転用したものと思えた。体部には縦3cm前後の彫形が残る。軟質石料を使用。工具痕が見ることが多く、異質である。

笠松道線 5区道橋外

挿図番号 写真番号	No.	種 器 類	出上位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要	
第63図 PL_33	1	縄文土器 深鉢	表土 胴部片			粗砂・細砂/ふつつ/黄緑	胴部に沈線で懸文帯が描かれる。	加曾利E式。
第63図 PL_33	2	古瀬戸 所縁深皿か	埋土 口縁部片			//灰白	内外面に灰釉。口縁部は外反し、上面に突帯に至るような高まりが一部認められ、突帯が甕る可能性が高い。	古瀬戸後期。15世紀。
第63図 PL_33	3	瀬美陶器 甕	表土 体部片			//灰	外面に印き目。器壁はやや厚い。	12～13世紀初頭。
第63図 PL_33	4	瀬美陶器 甕か	南瀬戸 胴部片			//灰	外面に自然釉は現状にかかる。外面に印き目。	12～13世紀初頭。
第63図 PL_33	5	常滑陶器 甕	埋土 体部片			//暗赤褐	断面は灰色。器表は暗赤褐色。外面は板状工具による縦位撫で。	中世。
第63図 PL_33	6	板碑	埋土 破片	長 [21.4] 幅 [17.2]	厚 2.6 重 1550.9		緑色片岩	頂部山形部の左辺破片。下端部にキリクが部分的に残存する。二条線は見られない。

旭姫道線 3区1号溝

挿図番号 写真番号	No.	種 器 類	出上位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要		
第68図 PL_34	1	土師器 杯	中央+6.東部+8 1/4	口 [15.2] 底 10.0	高 3.7		細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/ふい 黄緑	口縁部は強い横撫で。体部外面は雑な撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	見込み部に油埋付着。
第68図 PL_34	2	須恵器 杯	中央+6 1/3	口 [12.4] 底 6.8	高 3.1		細砂粒・粗砂粒/選 元胎/灰	口クロ整形(右回転)底部は回転ヘラ削り。	
第68図 PL_34	3	須恵器 杯	埋土 体部+底部片	底 6.2			細砂粒・粗砂粒/選 元胎/灰黄緑	口クロ整形(右回転)底部は回転糸切り無調整。	体部内面に油埋付着。

旭姫道線 3区道橋外

挿図番号 写真番号	No.	種 器 類	出上位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要	
第71図 PL_34	1	打製石斧 短細型	表土 一部欠	長 [13.0] 幅 [5.3]	厚 3.0 重 169.1		ホルンフェルス	完成状態。器身の着輪部に幅足の体部が付く。着輪部・両側縁のエッジは磨れ、裏面側面に著しい摩耗痕。

旭姫道線 4区道橋外

挿図番号 写真番号	No.	種 器 類	出上位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要	
第74図 PL_34	1	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片			粗砂/ふつつ/暗黄緑	内反する平口縁の口縁下に爪形刺突を巡らせ、口縁以下にL Rの縄文を横位・縦位に施す。	加曾利E式。
第74図 PL_34	2	石鏡 尖基鏡	表土 完形	長 2.7 幅 1.1	厚 0.3 重 0.8		チャート	完成状態。背面側・裏面側基部を押し離れが覆う。裏面側に素材面を大きく残す。

旭姫道線 5区道橋外

挿図番号 写真番号	No.	種 器 類	出上位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要	
第76図 PL_34	1	縄文土器 深鉢	表土 胴部片			織織/良好/橙	胴部に平行沈線で縦位・斜位の格子状の文様を描く。	黒浜式。
第76図 PL_34	2	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片			織織/ふつつ/橙	平口縁の口縁以下にL Rの附加条(Lの1本附加)とR Lによる羽状縄文を施す。	黒浜・有尾式。
第76図 PL_34	3	縄文土器 深鉢	表土 胴部片			織織/ふつつ/橙	胴部にL RとR Lによる羽状縄文を施す。	黒浜・有尾式。
第76図 PL_34	4	縄文土器 深鉢	表土 胴部片			織織/ふつつ/橙	胴部に僅かに沈線がみられる。	黒浜・有尾式。

旭姫道線 6区道橋外

挿図番号 写真番号	No.	種 器 類	出上位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 (石器・石製品は石材)	成形・整形の特徴	摘 要	
第79図 PL_34	1	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片			粗砂/良好/橙	胴部に沈線を巡らせて文様帯を区画し、規格内に沈線で幾何学文を描き、L Rの縄文を施す。	堀之内2式。

写真図版



1 笠松道跡3区全景(西から)



2 笠松道跡3区・天良七堂道跡5区全景(南東から)



1 笠松遺跡3-3区全景(北東から)



2 笠松遺跡3-2区全景(南西から)



3 笠松遺跡3-1区掘立柱建物群全景(上が北西)



1 1・2号掘立柱建物全景(南東から)



2 1・2号掘立柱建物全景(南西から)



3 1・2号掘立柱建物全景(西から)



4 3号掘立柱建物全景(南東から)



5 3号掘立柱建物南半部全景(北東から)



6 3号掘立柱建物北半部全景(東から)



7 2号土坑全景(南東から)



8 3号土坑全景(南東から)



1 1号溝全景(北西から)



2 1号溝全景(南東から)



3 2号溝全景(南西から)



4 2号溝全景(西から)



5 笠松遺跡4区南半部全景 左奥が天良七堂遺跡(西から)



1 笠松遺跡4区南半部全景(北東から)



2 笠松遺跡4区北半部全景 奥が天良七堂遺跡(西から)



1 笠松遺跡4区北半部全景(北西から)



2 笠松遺跡4区北半部全景(上が北東)



1 笠松遺跡4区南半部全景(上が北西)



2 4号溝と掘立柱建物群(上が北西)



1 1号掘立柱建物全景(南西から)



2 1号掘立柱建物全景(南東から)



3 2号掘立柱建物全景(南西から)



4 2号掘立柱建物全景(南東から)



5 3～6号掘立柱建物全景(南西から)



6 3～6号掘立柱建物全景(南東から)



7 1号礎石全景(北東から)



8 2号礎石全景(北西から)



1 1号ピット全景(南東から)



2 2号ピット全景(南東から)



3 3号ピット全景(南から)



4 4号ピット全景(南から)



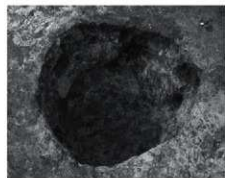
5 5号ピット全景(南から)



6 6号ピット全景(南から)



7 7号ピット全景(南から)



8 8号ピット全景(南から)



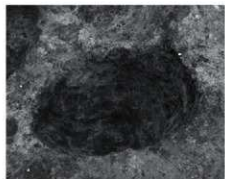
9 9号ピット全景(南東から)



10 10号ピット全景(南から)



11 11号ピット全景(南東から)



12 12号ピット全景(南から)



13 13号ピット全景(南から)



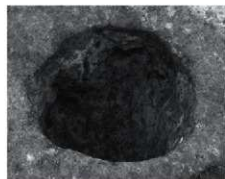
14 14号ピット全景(南から)



15 15号ピット全景(南から)



1 16号ピット全景(南から)



2 17号ピット全景(南から)



3 18号ピット全景(南から)



4 19号ピット全景(南東から)



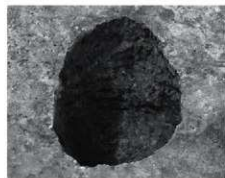
5 20号ピット全景(南から)



6 21号ピット全景(西から)



7 23号ピット全景(南西から)



8 24号ピット全景(南東から)



9 25号ピット全景(南東から)



10 1号土坑全景(南東から)



11 7号土坑全景(南東から)



12 8号土坑全景(南から)



13 9号土坑全景(南から)



14 10号土坑全景(西から)



15 11号土坑全景(南から)



1 3～21号ピット全景(南東から)



2 1号方形遺構全景(北東から)



3 12号土坑全景(南から)



4 13号土坑全景(南東から)



5 14・15号土坑全景(北東から)



6 16号土坑全景(西から)



7 17号土坑全景(南東から)



8 17号土坑全景(北東から)



1 1号井戸全景(南西から)



2 2号井戸全景(東から)



3 3号井戸全景(南から)



4 1号溝全景(北東から)



5 推定東山道駅路下新田ルート(上が北)



1 推定東山道駅路下新田ルート(西から)



2 推定東山道駅路下新田ルート(東から)



1 1号溝全景(西から)



2 2号溝全景(東から)



3 2号溝全景(南西から)



4 4号溝東半部全景(北東から)



5 4号溝西半部全景(南東から)



6 4号溝東半部全景(南西から)



7 5号溝南端部全景(北から)



8 5号溝全景(北から)



1 5号溝北端部全景(南から)



2 6号溝全景(北から)



3 6号溝全景(南から)



4 7・8号溝全景(北東から)



5 9・16号溝全景(東から)



6 9号溝全景(西から)



7 10・20号溝全景(北東から)



8 11号溝全景(北西から)



1 12号溝北半部全景(南から)



2 12号溝北半部全景(西から)



3 12号溝南半部・24号溝全景(南から)



4 13号溝全景(北から)



5 13号溝北半部全景(南から)



6 14・15号溝全景(南東から)



7 19号溝全景(北東から)



8 23号溝全景(北から)



1 25・26・30・31号溝全景(東から)



2 27号溝全景(北から)



3 27号溝全景(南から)



4 29号溝全景(北西から)



5 32号溝全景(北東から)



6 32号溝全景(南西から)



1 33号溝全景(東から)



2 33号溝全景(西から)



3 34号溝全景(北東から)



4 34号溝全景(南西から)



5 37号溝全景(南東から)



6 38号溝全景(北東から)



7 39号溝全景(北東から)



8 41号溝全景(北西から)



1 笠松遺跡5-1区全景(北西から)



2 笠松遺跡5-3区全景(南東から)



3 笠松遺跡5-2区南部全景(南東から)



4 4号土坑全景(北西から)



5 6号土坑全景(北東から)



1 2号土坑全景(南から)



2 3号土坑全景(北東から)



3 5号土坑全景(南から)



4 10号土坑全景(南西から)



5 1号井戸全景(北東から)



6 2号井戸全景(北から)



7 3号井戸礫出土状態(南から)



8 16号ピット全景(南から)



9 17号ピット全景(南から)



10 18号ピット全景(南から)



11 19号ピット全景(東から)



12 24号ピット全景(南から)



13 28号ピット全景(北から)



14 29号ピット全景(南から)



15 30号ピット全景(北から)



1 8号土坑全景(西から)



2 9号土坑全景(北から)



3 11号土坑全景(北西から)



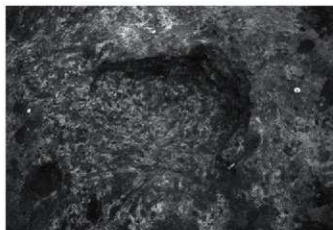
4 12号土坑全景(南から)



5 13号土坑全景(北から)



6 14号土坑全景(東から)



7 15号土坑全景(南西から)



8 1～3号溝全景(南東から)



1 1～3号溝全景(南から)



2 1号溝北端部全景(北西から)



3 1号溝中央部全景(北から)



4 1号溝中央部全景(南から)



5 3号溝全景(南から)



6 4号溝全景(南東から)



1 5号溝北端部全景(北から)



2 5号溝中央部全景(南から)



3 5号溝南端部全景(西から)



4 6・7号溝全景(北から)



5 8・9号溝北半部全景(北から)



6 8・9号溝南半部全景(東から)



7 8号溝南端部全景(北から)



1 10号溝全景(西から)



2 1号落ち込み全景(南東から)



3 堀廻遺跡3区全景(南西から)



1 堀廻遺跡3区全景(南東から)



2 堀廻遺跡3区全景(上が北東)



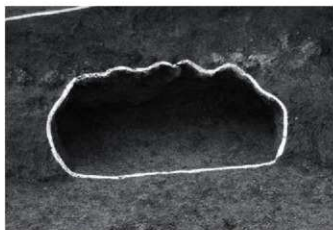
1 1号壑穴状遺構全景(南西から)



2 1号土坑全景(北西から)



3 2号土坑全景(北西から)



4 3号土坑全景(南東から)



5 4号土坑全景(南東から)



6 1号溝全景(南西から)



7 1号溝A-A'セクション(北東から)



8 2号溝全景(北東から)



1 2号溝全景(南西から)



2 3号溝全景(南から)



3 堀廻遺跡3区北半部旧石器調査状況(南東から)



4 堀廻遺跡3区南半部旧石器調査状況(南東から)



5 堀廻遺跡4-1区全景(北西から)



6 堀廻遺跡4-3区全景(南東から)



1 堀廻道跡 4-2区全景(南東から)



2 堀廻道跡 4-4区全景(南西から)



3 1号土坑A-A'セクション(南東から)



4 2号土坑全景(南東から)



5 堀廻道跡 4-1区旧石器調査状況(北西から)



6 堀廻道跡 4-5区旧石器調査状況(南東から)



7 堀廻道跡 4-3区旧石器調査状況(南東から)



8 堀廻道跡 5-1区全景(東から)



1 堀廻道跡 5-2区全景(北西から)



2 堀廻道跡 6-1区全景(北西から)



3 堀廻道跡 6-2区全景(北西から)



4 堀廻道跡 6-3区全景(北西から)



5 堀廻道跡 6-4区全景(北西から)



6 堀廻道跡 6-5区北半部全景(北西から)



7 堀廻道跡 6-5区南半部全景(北西から)



8 堀廻道跡 6-6区全景(北東から)



1 1号溝全景(東から)



2 1号溝全景(南東から)



3 堀廻遺跡6-5区中央部旧石器調査状況(北西から)



4 堀廻遺跡6-5区南半部旧石器調査状況(北西から)



5 天良七堂遺跡5区全景(上が北西)



1 天良七堂遺跡5区全景(西から)



2 1号溝B-B'セクション(北西から)



3 硬化面下遺構全景(南から)



4 硬化面下遺構全景(西から)

3区道構外出土遺物



4区道構外出土遺物



4区1号井戸出土遺物



4区2号溝出土遺物



4区9号溝出土遺物



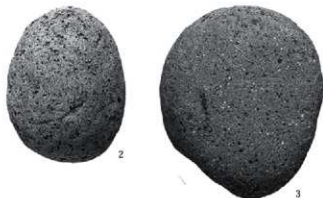
4区4号溝出土遺物



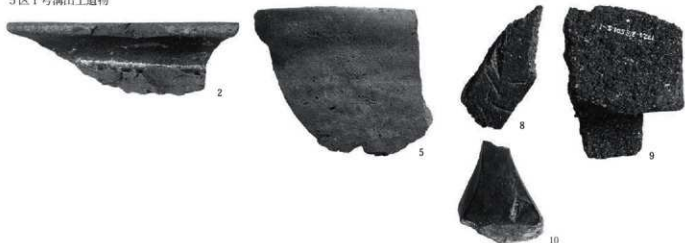
4区14・15号溝出土遺物



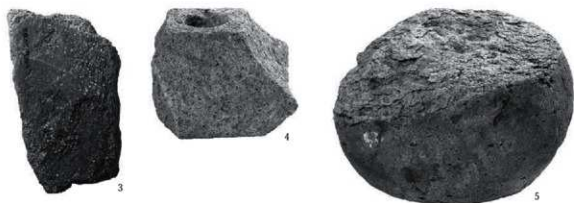
笠松道跡



5区1号溝出土遺物



5区1号落ち込み出土遺物



5区道構外出土遺物



3区1号溝出土遺物



3区道構外出土遺物



4区道構外出土遺物



5区道構外出土遺物



6区道構外出土遺物



報告書抄録

書名ふりがな	かさまついでき・ほりまわりいせき・てんらしちどういせき
書名	笠松遺跡・堀廻遺跡・天良七堂遺跡
副書名	(主)太田大岡々線バイパス地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	569
編者名	谷藤保彦/高井佳弘
編纂機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20130319
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	かさまついでき
遺 跡 名	笠松遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしにったこがねいまち
遺跡所在地	群馬県太田市新田小金井町
市町村コード	10205
遺跡番号	N0030
北緯(世界測地系)	361941
東経(世界測地系)	1391936
調査期間	20100401-20100630/20120401-20120731
調査面積	6884
調査原因	道路建設
種 別	官衙/交通/その他
主な時代	奈良・平安/中世
遺跡概要	官衙-奈良・平安-擬立柱建物9+ピット+溝-土師器+須恵器/交通-奈良・平安+中世-道路側溝-土師器+須恵器+陶磁器+地系土器/その他-中世-土坑+井戸+溝+ピット-陶磁器-在地系土器
特記事項	溝に囲まれた擬立柱建物群/推定東山道駅路下新田ルート
要 約	史跡新田郡庁跡の西にある遺跡で、溝に囲まれた区画内に多数の建物が見られ、何らかの官衙と考えられる。今回の調査はその区画の北半部に当たる場所であり、区画溝の北西角が発見されたことから区画の規模がほぼ判明し、同時に多数の擬立柱建物が見つかっている。北側を推定東山道駅路下新田ルートが通過しているが、側溝は中世に掘り直されている。中近世には多くの溝が掘られ、扇状地末端の湧水を流して利用していた可能性がある。
遺跡名ふりがな	ほりまわりいせき
遺 跡 名	堀廻遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしにったこがねいまち
遺跡所在地	群馬県太田市新田小金井町
市町村コード	10205
遺跡番号	N0002
北緯(世界測地系)	361948
東経(世界測地系)	1391930
調査期間	20100401-20100630
調査面積	4405
調査原因	道路建設
種 別	その他
主な時代	平安/中世/近世
遺跡概要	その他-平安+中近世-竪穴状溝横1+土坑6+溝4-土師器+須恵器
特記事項	浅間B軽石(1108年の浅間山噴火に伴うテフラ)降下以前の大溝
要 約	扇状地上にあるため集落には適さない土地であり、住居は見られなかった。南部を直線的に横断する大溝は、上層に浅間B軽石が堆積しているのが古代のものであり、流水の痕跡はないが用途が目ざされるものである。
遺跡名ふりがな	てんらしちどういせき
遺 跡 名	天良七堂遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしにったこがねいまち
遺跡所在地	群馬県太田市新田小金井町
市町村コード	10205
遺跡番号	T0122
北緯(世界測地系)	361941
東経(世界測地系)	1391943
調査期間	20100401-20100630
調査面積	217
調査原因	道路建設
種 別	交通
主な時代	奈良・平安/中世
遺跡概要	交通-奈良・平安+中世-硬化面+溝
特記事項	推定東山道駅路下新田ルートの北側溝と思われる溝
要 約	狭小な調査区の南端に道路側溝と思われる溝の北壁が掛かっている。浅間B軽石降下後に大きく掘り直されている。北側には硬化面が広がるが、駅路の外側となるのでその性格は不明である。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第569集

笠松遺跡・堀廻遺跡・天良七堂遺跡

(主)太田大間々線バイパス地方特定道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25(2013)年3月12日 印刷

平成25(2013)年3月19日 発行

編集・発行/公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

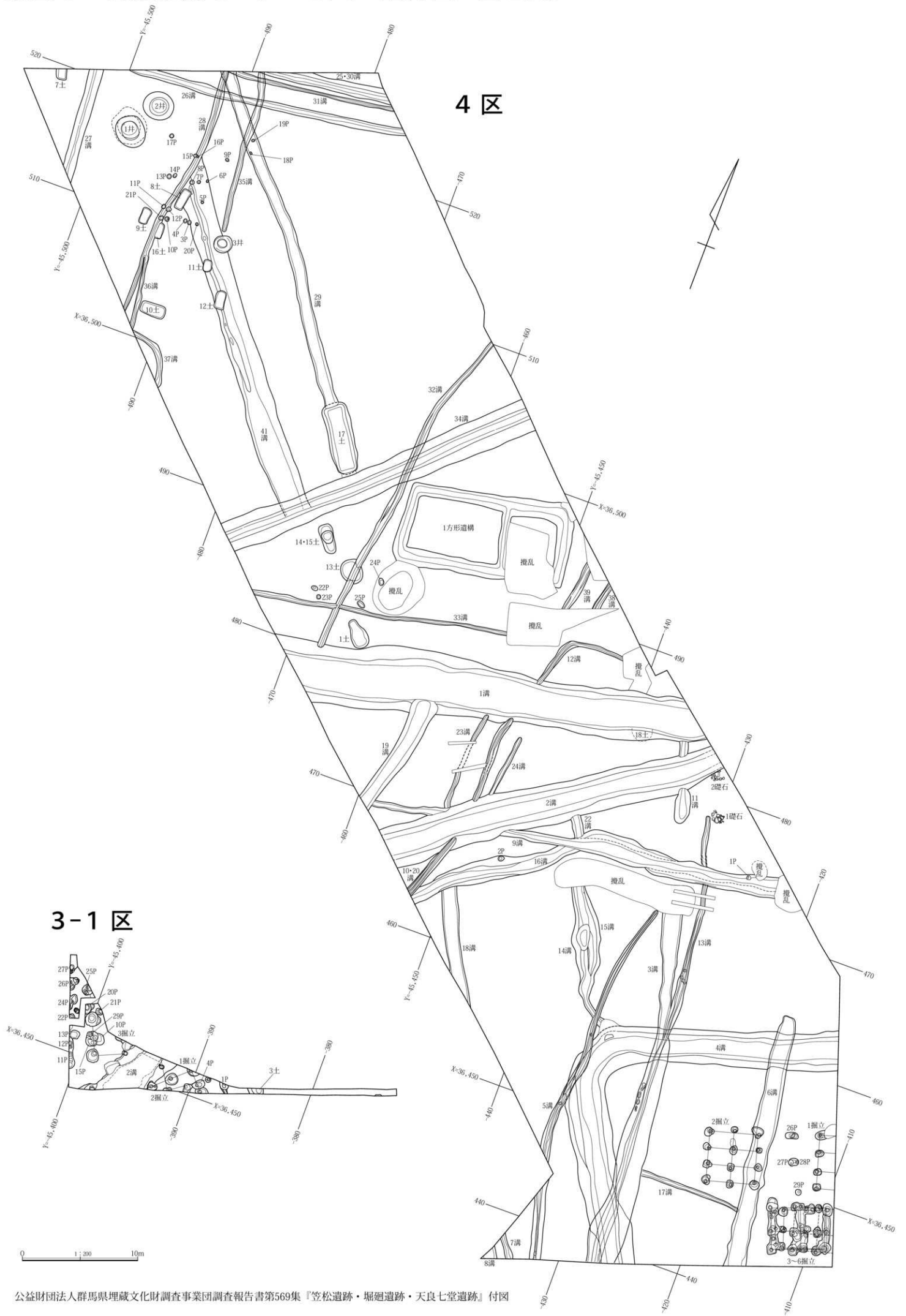
〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/株式会社開文社印刷所

付図1 笠松遺跡 3-1・4区 全体図 (1/200)



付図2 笠松遺跡5区 全体図 (1/200)

5-1区

5-2区

5-3区

